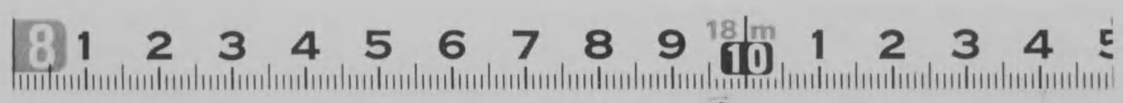
383
82



一葉 るぎの

383-82

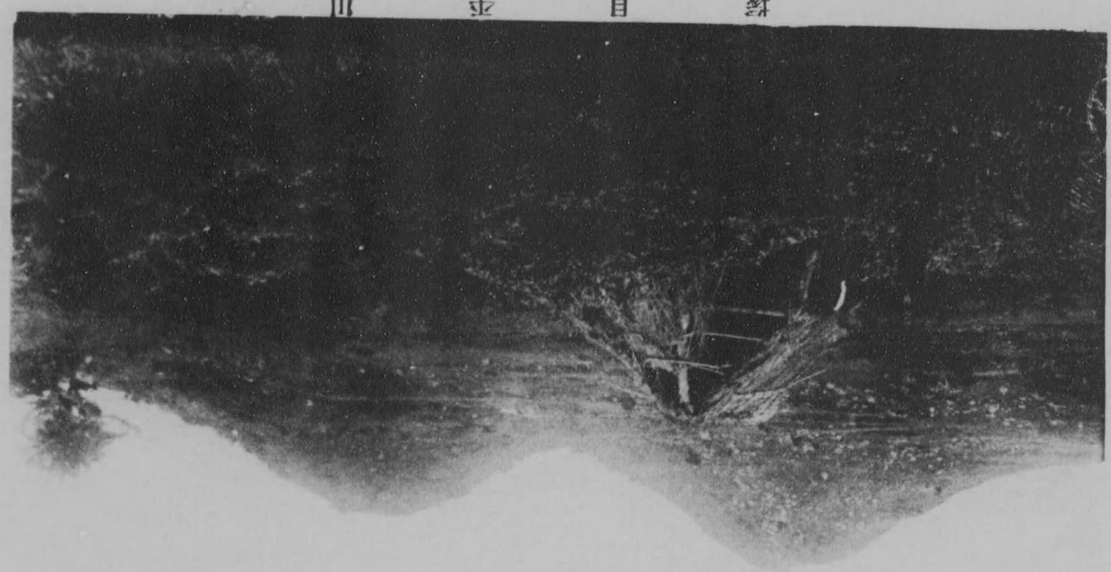
ひるぎの一葉

糸數原主人編著

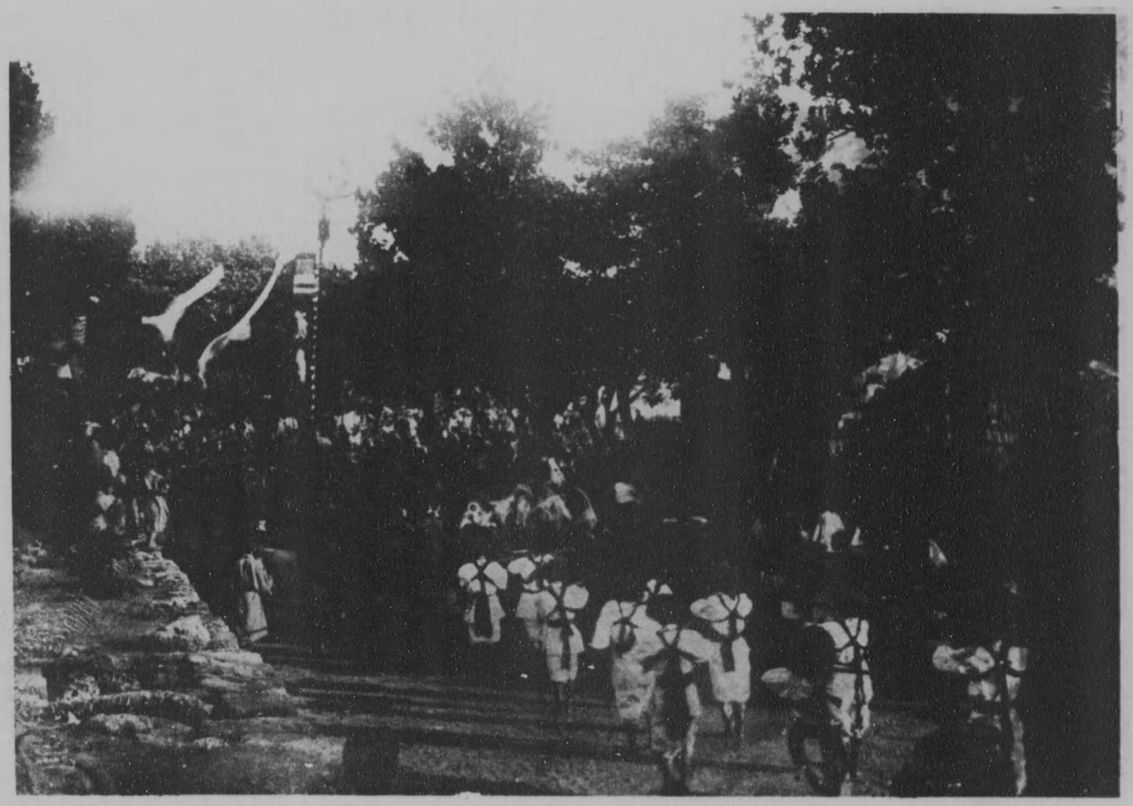
大正
9. 5. 18
内交

滿洲及朝鮮

與那國不二



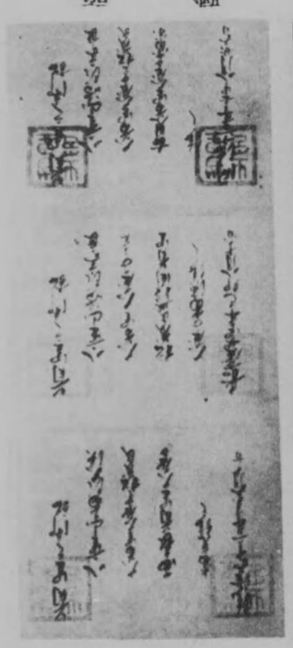
塚　貝　平　川



棒舞
ウボマジエバ

書出分飼稅免子多

老　養



職　頭

石釜と垣木の場漁置定草海原鮫糸

ひ硯き孚の場牧保百

宮良川橋上よりおもと岳を望む

鯉ウトゴラワ

川　東

我か父は逝きて歸らす

此書改版に際して

我れ父を惟ふ事頻りなり

愼みて亡き父の靈に獻け奉る

卓爾

序にかへて

八重山群島

武藤長平

余は一昨年の夏沖繩本島に渡つて八月の上中二旬を採訪に費した、其時沖繩縣内務部長であつた島内三郎君の勸誘に應じて八月下旬八重山群島の首島たる石垣島に渡り九月に掛けて十日許を同島四ヶ村糸數原の岩崎卓爾君の官舍に客となつて同君の指導に依つて採風を試みた、南島の驕陽に苦められたけれども日々同君の好意によつて膳てらるゝ淡水浴と豚肉や岩筍子の珍味とは余をして異郷に在るを忘れて快適の情を遺るを得しめた、是れ一に同君の賜にして今に至るまで當時の一句を余が一生中の愉快なる一齣なりと信じ時々之を想起して心窃に悦しく思つて居る。

數日前岩崎君は遙に書を寄せて前年の著述にかゝる「石垣島案内記」と「八重山童謡集」とを合して一冊となし版を改むる故其卷首に序文を書けと申越された、然し余は他人の著述に序を題する程の大家でない、特に仙骨稜々石垣島測候所長たること茲に二十年、自ら八重山王を以て任ずる同君の南島生活二十ヶ年の記念出版物たる本書に序することは余の敢て當るところでない、よつて先年貢恩の報酬として此悪文を同君に寄せ同君の特別なる同情を請ひ卷末に附錄として貰ひ驥尾に附して我名を世に顯はさんと試みる。

余は沖繩縣立圖書館長伊波普猷君の如く此島を歌の島なりと稱揚する勇氣を持たぬ、然し此島を以て醇樸なる民俗を誇とする平和の仙郷なりと稱揚するを憚らぬ、颱風の中心、マラリヤ熱の流行地といふ二點は此島の缺點であるけれども青く澄み渡つた天、茫々たる青海原、高からぬ山を長く曳く褐野、四季綠を絶たぬ村々山々、島の名に相應しき家々をとりまく石垣、放ち飼にされた牛馬、これで毒蛇が居なければ確に極樂である。

かゝる仙郷に二十年も栖遲する岩崎吾は專問の天候を測定し夏秋の候必ず本土を來襲する颱風をいち早く此島に斥候する本職以外昆蟲の採集に腐心して研鑽怠らぬのみか更に進ん

で八重山の童謡俚謡を蒐集して、忙中の閑を消して居る。

八重山島のことは八重山王の岩崎君が誰よりも詳しく知つて居らるゝ、余の如き僅に一旬同君に據りて觀察し得たる飛鳥一瞥の八重山觀は同君などの眼より見らるれば鹵莽蕪雜のものであらう、けれども大に勇氣を鼓して要點のみを記載する。

八重山群島中最も史上に著聞する島はいふまでもなく石垣島で、本邦の古史にも信覺（シガキ）といふ名で知れて居る、新井白石が信覺は石垣なりと斷じたのは史眼の鋭さを示して餘ある、支那にても師加紀（イシカキ）とも北木山（クロキ）ともいつて、かの周煌の「琉球國志略」にも

○八重山、一名北木山、土名摩師加紀、在大平山西南四百里、去中山二千四百里、由臺灣彭家山用乙辰針可達、察度王當洪武時二次嶋來貢、即八重山大平山也、

といひ、更に其島土豐饒宮古島に勝ることを述べて黒木以下海産物までをも列擧して居る此島は察度王の威勢が南島に振つた時宮古島と共に中山に入貢して居る、到底この島だけで獨立のできるものでないからいづれは他の強者に司配されねばならない、其司配者は第一に中山であつた、その中山が明に入貢する以上此島人は中山王國の爲に其物産を捧げ以て入貢の資を給せねばならなかつた、是より此島民が中山入貢の往還海上に辛酸を嘗め風波に弄ばれ漂流の苦惱を味はねばならぬことゝなつた、此に於てか八重山漂流譚の材料が澤山できて來た。

支那は明といはず清といはず大國の襟度で柔遠の策頗る茫漠たるものであつたが、慶長十四年島津氏の琉球征伐以後薩藩は早速其翌年此島及び宮古島の土地をも檢査して沖繩諸島總稅額を考定することゝなつた、島津氏か首里政府に課するところ嚴なれば首里政府の此島に誅求することも亦た急ならざるを得なかつた、今日も四ケ村にありし昔の名殘を留むるかの桃林精舍の如きは既にこの檢地ありし年頃薩藩の深き謀によつて石垣島綏撫の爲に創建された、これは支那が儒教によつて邊窩懷柔を試むるのに抗抗する薩藩の同化策で神佛混同の宗旨で邊民を心より懷けんとの劃策である、島津氏第十一世忠昌の時桂華禪師を禮聘して以來薩南には儒禪兩道の精氣充ち滿ちて慶長の頃薩藩の外交文書を起草した文之

和尚の如きかゝる治繩策の發案者なるやも知れず、文之の學を受けた伊勢貞昌、川上久國三原重庸など皆な治繩策に腐心した薩藩の名大夫である。

薩藩は治繩策に宗教を利用したのみならず茶の湯、謠曲、狂言等の如き未技を以て識らずの間に此島民を同化せんと試みた、而して其治繩方針は着々成功して終に此島も沖繩本島と同じく島津氏の統治の下に一支那貿易機關として使用され盛に支那語學を奬勵さるゝことゝなつた、南支那語は勿論かの長崎でも使用されなかつた北京官話までが此島の唐通事家で稽古されたなど如何に島津氏が支那貿易に熱心であつたかゞ推知せられる幾多の漂流譚と唐話稽古と颱風の中心ともいふべき天然の位置とは此島の對外關係史を物語るものである。

余の八重山群島觀は右の如くである。

「一九一八・一〇・三」

拜誦　石垣島案内記、八重山童謠集合本御出版に就いて序文を書いて呉れとの事ですが私にはどんなに、きばつても八重山童謠集の序文以上のものは書けないと思ひますから、あれをそのまゝ卷頭に掲げて下さい「八重山童謠集の序」として差支はありませぬたとへ合本の場合でもかまひませぬ、さういふ例は外にいくらもあります。出來上つたら圖書館と私に各一冊宛おくつて下さい。私は目下民族衞生について縣下中を講演して廻つてゐます、既に三十ヶ所以上で試みました。

大正七年九月廿六日

伊波普猷

緒言

一、余さきに明治四十二年五月「石垣島案内記」同四十五年四月「八重山童謠集」を編述して公にせしが、這般增補訂正を加へ合本「ひるぎの一葉」と名づけ出版したり偏に先輩諸士の御高敎を仰ぎ奉る。

一、此書のなるや第七高等學校造士館敎授武藤長平先生より「八重山群島に就て」の有益なる論文を、また沖繩縣立圖書館長伊波普猷先生よりは御懇篤なる書束を賜はりたり、兩先生の御濃情に對しては、余深く謝意を述べて永く紀念とな す。

一、猶ほ表紙圖案は、石垣孫保君、八重山至諄の藝術たる民謠並に童謠の飜曲、作曲は宮良長包君、民謠通解は喜舍場永珣君、口繪寫眞は嵩原安禮君、統計諸表は瀨名波長宣君を煩はしたり茲に謝意を表す。

一、最後に此書上梓に關しては坂田安次郎君、濱崎莊市君の御厚志によれり、是また殊記して謝意に代へんとす。

大正七年十月十七日夜

いはさきほたるの燈をかりて

糸數原主人しるす

引用及び參考書目

「大日本風土編」「地震豫防調査會報文第四十七號」「玉匣廣紀」「黑岩恒先生著石垣島、光閣列島」「山崎博士南洋一瞥」「山上博士地文學」「遠藤利三郎先生藏書八重山舊慣取調書」「人類學雜誌第二十八卷」「鄕土研究第二卷」「古琉球」「農務帳」「八重山日記」「八重山由來記」「乾隆三十六年大波仕形書」「公事帳」「規模帳」「偉人傳」「西遊記」「昆蟲世界自明治四十二年至大正七年」「南洋之水產」「沖繩縣臨時縣會議事錄」「琉球新報三十六年十月五日」「東洋學藝雜誌」

○ひるぎの一葉

石垣島案内記

糸數原主人編

琉球彎

南日本九州南西端ヨリ支那東海ト南太平洋トノ間ニ一ノ堤防ヲ築キ殆ンド弓狀ヲナシテ星羅碁布セル島列ハ素ト地質時代過去ノ世ノ殘骸ニシテあじあ大陸ノ淺海中ニ影ヲ沒シ陸架ヲ造レルモノノ邊緣ナリ學者之レヲ琉球彎ト稱ス其外彎ニハ成層岩ヨリ成ル種子島・屋久島・奄美大島・沖繩島・先島列島等ノ蛾眉翠黛歸然タリ內側ニ沿ヒ亦タ一聯ノ火山列島アリ卽チ九州南端ヲ基點トシ蜿蜒査ニ洋中ニ南走シ隱見出沒峰頭ヲ波間ニ擡グル硫黃島・口之永部島・口之島・中之島・諏訪瀨島・惡石島・土噶喇島・橫島ハ此ノ火山脈ノ北方ヲナシ從是該方向ヲ追フテ進マバ橫島ヲ距ル約六十八海里ニシテ一ノ火山島・鳥島（トリシマ）（明治三十六年五月噴火）ノ峙立スルアリ更ニ南西ニ延ビテ沖繩島ニ接近シ其西方粟國島・久米島ヲ經テ光閣列島ヲ過ギ臺灣北方大屯火山ニ連及シテ窮マル所ヲ知ラズ。

吾人ト最モ關係深キ先島列嶼ヲ流過スル海流ハ生所熱帶地ニアルヲ以テ所謂暖流（黑潮）ナリ遠ク南西呂宋・臺灣近傍ニ起リ北東ニ向ヒテ流レ琉球群島ノ南ニ至リテ本支二流ニ別ル其本流ハ前ノ方向ヲ保持シ漸次九州・四國並ニ本州ノ南岸ヲ過ギ北緯三十八度附近ニ於テ稍々東ニ傾イテ流ル此流域中ニ競潮及ビ激湍ヲ生ズ狀チ大浪ノ激シテ礁脈淺礁ノ上ヲ過クルガ如シ又支流ハ琉球・宮古島・東經百二十六度、北緯二十七度ノ點ニ至リ北向流トナリテ九州ノ西部ヲ洗ヒ朝鮮海峽ヲ經テ日本海ニ入リ對馬海流トナル夫レヨリ本邦ノ北西海岸ニ沿フテ北東ニ流レ北海道極北部ニ達シ宗谷海峽ヲ越ヘテ阿哥斯克海ニ入リ樺太ノ東岸ニ進ミテ終ルガ如シ故ニ石垣島ヲ洗濯スル海洋狀態ハ平凡ニシテ黑潮ノ感應ヲ享クルアル耳。

標識瓶の行衛

瓶番號	投入年月日	投入ノ位置	拾得年月日	拾得シタル海面	漂流日數
28	同	同	六月一日	沖繩縣中頭郡典那城平安座前濱	一三
13	大正七年五月二十日	奥那國島ト基隆トノ中間	大正七年八月六日	長崎縣西彼杵郡平島村ノ東岸	七九
34	同	同	七月廿五日	高知縣幡多郡八束村ノ海岸砂濱	七〇
52	五月廿一日	奥那國島ノ南東二浬ノ沖	八月廿九日	東京市芝浦海岸	一〇一
59	同	同	七月廿二日	淡路國三原郡福良濱鳴門海峽東一浬ノ沖	六三
70	五月廿二日	石垣島平久保崎南西六浬沖	六月廿九日	肥前國北松浦郡津吉村海岸東二浬	三九
76	同	同　八浬ノ沖	六月十八日	大隅國熊毛郡北種子村西ノ表港	二八
103	五月廿六日	波照間島ノ南東三浬ノ沖	六月廿六日	同國大島郡十島村字口之島港外三浬ノ海上	三三
111	六月十二日	石垣島平久保崎ノ西十二浬	七月廿八日	靜岡縣濱名郡舞坂みなと半浬沖	四七
159	七月九日	西表島沖ノオカン附近	七月廿五日	日向國南那珂郡市木村字石濱濱	一六
161	八月十日	石垣島川平灣十二浬ノ沖	八月三十日	西表島高那海岸	二一
171	七月十日	鳩間島十浬ノ沖	八月廿八日	同上原一浬沖	一八

註　大正七年八重山漁業組合（理事長坂田安次郎君）ニ於テ海流調査ニ供賞セシ標識瓶百八十五本ナリ。

拾得したる標識瓶

瓶番號	投入年月日	投入ノ位置	拾得年月日	拾得シタル海面	漂流日數
	一九〇八年十月十三日	東經百二十五度北緯二十一度三十分	一九〇八年十月十九日	小濱島	七
	一九〇八年四月十六日	西經百三十度北緯三度二十五分	一九一〇年六月	波照間島	?

一九一一年一月十八日	東經百二十四度五分 北緯二十六度四十一分	一九一四年一月十三日	石垣島川平灣內
一九一二年五月二日	東經百二十六度四十分 北緯十二度五十四分	一九一二年十二月廿五日	同

こけさくら草の咲く石垣島

がすまる帶ノ先島列島ハ點々青螺トナリ一大樂園ニ泛ブガ如ク大小合セテ十四島ヨリ成ル總面積四十一方里ナリ石垣島（面積十六方里七五）西表島（面積二十方里八三・土地廣ク人烟稀薄戸數二百五十九戸・人口千百七十二人・內譯セハ本籍人八百七十七人・寄留二百九十五人也）ヲ二大主島トナス就中殊ニ衆美ヲ聚メ群ヲ拔キテ立テルハ昔シ琉球三十六島中北木山● 夷師加紀又タ信覺ト唱ヘラレ常夏（グレハウス）ノ鄕ナリ島ノ海岸線ニ沿フトキハ周圍大凡三十里周緣ニ緣礁●ノ附着發達シタルアリ犬牙鋸齒岬角小灣出入スト雖モ良港ナシ而シテ石垣港內ノ潮汐、干滿（ヒソコリ、ダ、ヘ）ハ朔望ニ於テ大潮升約六呎ニ達シ小潮升四呎ナリ故ニ高潮時ニ在リテハ沿岸一帶海水充滿スルモ干潮時ニ際シテハ干潟トナリテ海底ヲ露出スルコト長時間ニ亘レリ地貌ハ蟲蝕シタル杓子狀ヲナス北東ヨリ南西ニ橫ハレリ北東ノ端ヲ平久保（ヒヤアブク）崎ト云ヒ南西ノ端ヲ富崎（フサキ）ト呼ブ幡名（バンナ）岳● 萬勢（マイセ）岳ノ山系遲透北東ニ走向ス蒼巒翠峰やぶれかさ羊齒ノ茂リ幽情ヲ添ヘ太古ノ昔ヲ語ル萬年（オモト）青岳（海拔千六百八十呎）ハ本島ノ最高峰ナリ。

四箇

四箇ハ綠被セシ石灰岩ノ最モ發育シタル地則チ杓子ノ頭部ニ位スル狹隘ノ里邑ナリ古來島嶼ノ交通ハ主トシテ舟楫ノ便ニヨレリ隨ツテ部落ハ海岸若クハ河流ニ沿フテ建設スルガ爲メニ道路疎惡ニシテ開鑿ヲ見ズ自然ニ放置セラレ街燈ノ備ナク恰モ唐蜀●●●ノ道ト云フベキナリ運輸交通上未ダ不便ノ域ヲ解脫セズ現今物產ヲ追フテ日ニ日ニ內地ニ寸進シツヽアリ輓近有志協力海陸路ノ改善開發ニ努ムルヲ以テ完美ノ期必ズ遠キニ非ザルベシ如此ナレドモ人口稠密住居數二千四百三十二戶、常住人口一萬一千八百廿七人、體性別セバ現在本籍男四千二百五十八人、女四千五百三十人、寄留男一千九百十九人、女一千百十九人ヲ包容ス交通機關ハ大阪商船會社所屬汽船（千噸級）年計二十四、五回神戶、鹿兒島、沖繩、基隆線ノ便アリ該社荷客取扱所ヲ設ケ一般輸出入貨物ノ集散ニ從事シ貨客共ニ少ナカラズ其他各島嶼ノ連絡ハ八重山產業會社或ハ個人ノ帆船、發動機船ヲ就航スルモ運輸ノ完全ヲ欠ケリ四●●箇ハ商業ノ中心地、吐呑港ナレバ商舖ノ見ルベキモノ多クシテ日常ノ市況活發ナリ、

大津波

石垣島ハ乾隆三十六年（紀元二千四三一）陰三月十日（寶永四年富士山大噴火ニ後ルヽコト六十五年安永八年櫻島大噴火ニ先ツコト九年ナリ）陽四月廿四日朝五ツ時（午前八時）頃地ヤヽ強ク震フヤ海

潮遠ク退キ青●緑●紅●紫熱帶色ノ色彩眩ユキ大小ノ魚屬珊瑚樹(マドレポラ屬)ノ蟠窟セル根株ノ下ニ跳躍シ婦女小兒ニ捕ヘラレ海ノ秘密ハ悉ク白日ニ曝露シテ未曾見ノ奇觀ヲ呈セリ爲之衆庶驚異ノ念一層相加ハリ世界壞倒ノ暗示ナルベシト人心遑々皆ナ岸邊ニ湊フ斯ル處ヘ東方洋中ニ魔ニ似タル二條ノ黑雲ソノ一亘天ニ冲セリトミユルヤ碎ケテ激シキ暴潮漲溢、奔馬ノ如ク狂ヒ數回ノ大浪小波繰リ返シ一回ニハ浪高三十八丈、二回ハ二十八丈、三回ハ十五六丈ト三タビ魔手ヲ振ヒ又雲ハ低ク垂レ風ハ死シ天地暗憺トシテ妖氣滿チ大木巨樹ヲ劈ク響魂切ル響家屋ヲ破壞スル音叫喚シテ救ヲ求ムル聲等交錯シテ聞ユ實ニヤ此ノ慘劇ハ現世ノ地獄ト思ハレタリ海嘯ノ波ハ四箇半圓ヲ洗ヒ外十四ケ村ヲ湮滅シ溺死スル者九千四百八十八人(役人八十八人・人民九千四百人ナリ)家屋田畑ノ流失、牛馬ノ死傷夥シク部落闇黑、十日ノ月魂光リ蒼ク白キ死屍ヲ照ラシ累々路傍ニ委棄セラレ臭氣ハ全市ノ空ニ漲ヒタルモ何等應急ノ策ヲ案出スルモノナク茫然自失タリ又タ入リテ住ムベキ家モ、圃ニ一粒ノ穀ナキニ至レリ。

本島ヲシテ九天ノ高キヨリ九地ノ深底ニ拋墜サルヽ運命ニ逢着シタル絶望ノ天災ハ生計困憊ナラシメ猶シ悲歎ノ涙未ダ乾カザルニ疫厲(疫癘)蔓延シ加之飢饉荐リニ臻リ人口著シク減縮セリ乾隆四十一年(紀元二四三六)二月飢饉、疫病ノタメ死者三千七百三十三人、嘉慶七年(紀元二四六二)八月疫病流行シ死者四百二十五人、道光十五年(紀元二四九六)猖疹流行シ死者六百五十五人、咸豐三年(紀元二五一三)惡疫流行シ死者一千八百四十三人、昔日ノ繁榮ヲ失ヒタリ然ルニ康熙年間(紀元二二二三八二)ヨリ酸鼻スベキ一陣ノ蠻風津々浦々ヲ震撼シタリ這ハ隨胎滅シ子(生兒壓殺)公然ト行ハレ、其ノ蕃殖ヲ妨ゲ、又乾隆十五年(紀元二四一〇)琉球藩百方支吾長壽ノ老人ニ賜賞シテ敬老ノ範ヲ示シ充滿シタル腐敗墮落ノ空氣ヲ清新センコトヲ計リ遂ニ咸豐九年(紀元二五一九)多子免稅ノ法ヲ布キ多產ヲ奬勵セリ幸ヒナルカナ此ノ健全ナル方法ヲ待ツテ始メテ子孫振々ノ慶福ヲ贏チ得タリ。

註　多子免稅法ハ男女兒五人以上ヲ男兒四人以上ヲ產生養育セシ夫妻兩人ニ對スル恩典ナリ諸上納物ヲ免ゼラレ夫ハ筑登之(ツクトレ)(位階)ヲ賜ハリ妻ハ日常傘携帶外出スルヲ允サル又妊孕婦ハ分娩前後二ケ年間(ヽヽ)御用布ノ調布(トヽノカタ)方ヲ免ゼラレ孰レモ名譽ヲ表彰ス茲ニ旅妻(アレマ)トナリシ婦ニ擧ゲタル子(ボウ)女ハ父籍ニ編入スルヲ禁ズ最モ父ニ伴隨シテ出產地ヲ離ル、能ハズ失禁シテ旅行シ若シ搭乘ヲ承諾シタル船主船長ハ罰金三千貫(一貫ハ金二錢)三十日間入牢ニ處分セラレタリト云フ。

海嘯波ノ傳達區域　八重山列島中黑島(クルシマ)・新城(アラタスク)兩島災害大ナリシモ史乘ヲ逸セリ與那國島ニ微ナル有感地震アリシモ海水ノ動搖ナク平穩ナリ宮古島列島下地村字宮國(ミヤクニ)・新里(アラサト)・友利(トモリ)・砂川(ウルカ)ノ各沿岸地方特ニ多良間島ハ激烈ナル津波ニ襲ハレ擧家全滅ノ例多クシテ之レヲ葬ムル術モナケレバ有司自ラ役シテ是等ノ死屍ヲ取集メ下地村字與那覇(ヨナハ)ノ前山ニ綿羅供養ノタメ塚一基ヲ建テ無影樹(ムヤエ)下之合同船(ツカ)(無緣塚)ト云フ。

南國ノ日ヲ浴ビ海ノ香ノ溢ル、瀕氣ヲ吸フテ銀眞砂ヲ踐ミ濱ニ足心ヲ痕シ汀線ヲ搖々ト洗フ波濤ニ愕イテ翔ブ白鷗ノ美シサ石灰藻ヤ硨磲貝ノ遺殼ヲ裏ム烏帽子草、濃婉ノ姿、艶麗ノ花、吾人ノ前ニ代謝シテ賞觀ヲ深カラシム立チ昇ル陽炎ノ碧瑠璃ノ蒼穹ニ溶ケ入ル裡ニ三々五々群ガリ集マルやいま乙女ノ喃々斡旋ニ嬲ラレツ、鄙シキ里落衢街ニ兒女雞犬ノ相嘻遊スル狀ヤ遮光防風兩用ノ綠葉樹暗キ福樹ノ葉隱レニ投グル梭ノ音調、海風ニ誘ハレ高ク低ク糸ト細リテ響ク凉シサ亞熱帶ノ苦熱モ和グラレ蒸熱ヲ感ゼザルナリ四圍ノ光景神氣自カラ舒ビ文人墨士ヲシテ憧憬タラシム。

官　　衙

八重山島廳

往昔藏元ハ公事所トシテ竹富島ニ置カル地域狹ク地理僻在ニヨリ石垣ニ移轉セリ康熙三十六年(紀元二三五七)瓦葺建トナス各役座ヲ併合セリ海嘯ノ後、文嶺(ブンチエ)ニ移轉長サ十一間、横三間ノ假屋ヲ造リ乾隆四十年(紀元二四三五)現在地ニ轉ゼリ歲月ノ久シキ幾多ノ變遷アリシガ明治三十八年六月中旬新築開廳セリ本島ニ於ケル出色アル建物ナリ

沿　革　石垣島ハ洪武二十三年(紀元二〇五〇)庚午ヲ以テ中王山ニ朝貢スト記サレタリ琉球藩ハ八重山列島ノ政務ヲ掌ラシメ藏元ト號ス頭職ヲシテ之ニ長タラシム其威タルヤ赫々烈日ノ天ニ繫ルガ如ク島内聲ヲ收メテ皆ナ緘默ヲ守レリ弘治十三年(紀元二一六〇〇)庚申「オヤケ、アカハチ」ノ反逆アリ賊徒全ク討滅ノ當時忠節ト武勳トニヨリ長田大翁主、古見首里大屋子仰付ケラレタリ是レ本島人頭職ノ鼻祖トナス崇禎十四年(紀元二三〇一)薩摩藩士、竹内備前、在番トシテ駐劄シタリ大和在番ト云フ明治十二年三月十一日廢藩置縣ト共ニ沖繩縣廳出張所ヲ藏元内ニ設置シ八重山島役所ト稱ス同二十九年四月八重山島廳ト改メ同三十年三月藏元廢止吏員閑散ノ身トナリシガ間切(マキリ)役場ヲ置カレ島廳ノ主管ニ屬セリ。

舊藩時代役人ノ階級　役人卽チ在番(頭)一人、在番筆者二人ニシテ三ケ年在勤交代ト定ム藏元ノ事務ヲ指揮監督シタリ部下ニハ本島出身ノ間切頭(親雲上(ペークミ)ノ)首里大屋子(オホヤゴ)・與人(ヨンチ)・大目差(オホメザシ)・大筆者・脇目差・脇筆者・目差・若文子(ワカタコ)・假若文子(二十一年三月廢止同八月藏元屋)杣山筆者・杣山假筆者・耕作筆者・耕作假筆者等總人員二百餘人ナリ同三十年三月更ニ村頭・村雇・役場雇ノ間切吏員ヲオキ同四十二年四月失職セリ。

註　頭ハ諸役人ノ投票ニヨリ選擧セラレ藩政府詮衡ノ上任命セシトカ其弊害ヲ謬メ咸豐六年(紀元二五一七)九月擧選ノ制ヲ廢止ス。

諸役人ノ履歷ハ勤星(クンボシ)ト唱ヒ累計二萬星ニ達シテ採用セラルモ、役人ノ死亡・轉職等ノ空位ナキトキハ就官ノ途ナク終身無勤タル人多シ。又

タ米百二十俵ヲ納メ仮筆者・同二百俵ヲ納ムレバ本筆者・後チ執レモ百二十俵ト更改ス。

舊藩時代役人ノ服制　頭●首里大屋子ハ黄色帽（八ツ巻ト云フ）黑色ノ服、緞子ノ大帶、白足袋ヲ用ヒタリ與人以下脇筆者ハ赤色帽、黑色ノ服、緞子ノ大帶●目差ハ青色帽、紗綾ノ大帶●若文子以下ハ帽子ナク服ハ淺黄色、木綿ノ大帶ヲ用ヒタリ。

註　雍正十年（紀元二三九二）服装公定セリ、系圖持ニシテ無役ノ士族單片髪ヲ結ビテ八ツ巻ナシ、乾隆二十九年（紀元二四二四）四月二十八日ヨリ青色帽ノ使用ヲ許サレタリ。

八重山郵便局

舊藩船手座ニ目差ヲ長タラシメ船舶ヲ管理ス、郵制ナク、局ハ陸軍省元臨時電信建設部ノ設計ニシテ明治三十年七月一日八重山通信所トシテ公衆電報ヲ取扱フ同年九月一日遞信省之レヲ引繼ギ八重山電信局ト改メ同三十一年十一月三等郵便局（島廳書記局長兼任）ヲ合併ス大正七年三月改築セリ。

電信線路

架空線（單長）		海底線
八重山局ト測候所間	弘 六・〇〇町	八重山局ト淡水間　一六三海里
同　上ト崎枝間	四・二二・五三	同　上　那覇間　二九五海里
西表島局ト外離間	一・〇九・五一	同　上宮古島間　八六海里
宮古島局トカデカル間	二・三五・一三	同　上西表島間　三二海里

八重山島警察署

舊藩小與座（コクミザ）ニ與人ヲ長タラシメ部下若干ノ袖結（ソデツケ）ヲ指揮ス探偵警邏ノ任ニ當ラシメ專ラ村内ノ靜謐ヲ保クシム廢藩置縣ノ際明治十二年九月二十四日那覇警察署八重山分署ヲ設置シ同十六年六月八日廢止八重山島役所ニ於テ警察事務ヲ掌リ同十九年三月十二日八重山警察署ヲ設ケテ島役所長兼任タリシガ同二十六年六月十二日專任署長ヲオカルト云フ。

註　舊藩刑罰ノ種類　乾隆十七年（紀元二四二四）七月五日御物奉行ニ報告シタルモノ寺入・科栲、水問・科籠（籠舍・籠込）流罪・居住替・日晒シ（罪狀ヲ板札ニ明記シ罪人ニ持タセ日ニ晒セリ）科鞭・科米等ナリ、流罪・籠込ハ藩政府ニ經伺セザレバ執行スルヲ得ズ。

明治十六年十一月太政官達

沖繩縣人徒流刑處分法

沖縄縣人民ニ限リ徒刑流刑ニ處セラレタルモノハ縣下八重山島ニ發配スルヲ得ベシ此旨相達候事

但シ囚人取扱方ハ舊慣ニヨリ沖縄縣令コレヲ管理スベシ。

平良區裁判所八重山出張所

明治三十三年一月一日新築開廳シテ八重山區裁判所ト稱セリ同三十九年七月一日登記所ヲオク大正二年四月二十一日廢止、那覇區裁判所八重山出張所ヲ設ケ登記事務ヲ取扱ハル同六年九月十五日、平良(宮古島)區裁判所ノ設置ト共ニ其管轄トナレリ。

沖縄監獄署八重山出張所

明治三十三年十二月開廳セリ大正二年四月二十一日廢止。

八重山税務署

舊藩ハ仕上世座(シノブセザ)、所遣座(トコロツケザ)及ビ勘定座ヲ設ケ與人之レガ主宰タリ直税トシテノ人頭税ソノ操業ノ力役(二度夫賃)ニ附加スル税率ヲ協定シタリ兎角人情納税額ノ輕キヲ希ヒタリトカ署ハ明治二十九年十一月開廳、同三十六年一月地租條例實施アリ同三十六年六月現在地ニ新築移轉セリ。

註　康熙五十年(紀元二三七一)人頭税ヲ四階級ニ別チ分子割(ブンパリ)ト云フ男女子十五歳ニ達スレバ新附(シンツキ)納税(資格)ノ祝宴ヲ各會所ニテ内法(ナイホウ)拜(オレ)廟(孔子)ノ式嚴肅ニ行ハレ酒肴ヲ供設ヘ仲師(ナカシンコウ)匠座長トナリ宣誓セシム(女子除外)而シテ年齢十五歳ヨリ二十歳ノ六ケ年ヲ・下下(ギモケア)・同二十一歳ヨリ四十歳ノ二十ケ年ヲ・上・同四十一歳ヨリ四十五歳ノ五ケ年ヲ・中・同四十六歳ヨリ五十歳ノ五ケ年ヲ・下(ギ)・ト稱ヘリ通計三十六ケ年間ニ渉リテ專制ノ桎梏ニ對スル苦闘更ニ優ナ自然ノ零圍氣ニ養ハレズ眩惑混沌タル病的氣質ニ馴致セラレタリ、最モ病者・不具・廢疾者・心神耗弱者タルモ免税ノ事ナク外ニ夫賃米(フウチンマイ)トシテ雍正四年(紀元二三九六)一人ニ付八合四勺四才强宛附セラレ同七年(紀元二三八九)ニハ八合二勺九才ニ減セラレタリ(所遣夫六萬五千十六人)若シ家族中ノ一人・與人・或ニ脇目差ノ官職ニ就テハ嫡男次男二人・仮若文字以上ノ官途ニ奉職セバ三代ノ間夫賃ヲ免セラレタリ、然ルニ三代無役ノ家族ハ二度夫賃(農民)ヲ課セラレヌ時ニ又タ夫賃米ハ米穀ニ限ラズシラ大豆・木綿花・同布・菜種子・胡麻等ノ代納ヲ許セリ。

當島ニ配流ノ囚人ハ到着日ヨリ起算三年後ヨリ課税ス故免ノ年ハ課税セラレズト云フ上納米一俵升量三斗二升ニシテ間切貯蓄米一人ニ付三合ヲ納メ村貯蓄米・御加勢米ノ如キ名アリ。

定納布并ニ御用布ノ名稱ハ乾隆四年(紀元二三九九)改正アリ御用布座公事帳同治十三年(紀元二五三七)ニヨレハ御足袋用三反、大和献上二十反、御用意物五百七反、御手形表五十反、御殿用六十二反、年頭祝儀献上百五十反、御褒美用二十五疋ナリ御用布納期ハ五月十日、貢布納期ハ六月十五日、御用布割符(税額告知)ハ四月十日ヲ限リトセリ總テ納税告知ノ方法ハ板札(イタフダ)ニがいだあ字ヲ書シテ結繩法ヲ併用シタリ、

御用布御手形表即チ意匠圖案ニシテだけのふし、たあふ、うめの花ノ類例多シト云フ染料ハ木藍、山藍、紅露芋ナリ、

御用布ノ荷姿、包裝ハ蒲葵(クヅ)ノ葉ニ、さみんノ繩ニヨリ美麗ニ結束セシトカ、明治三十五年石垣島ニ於ケル納税人員七千五百十三人、税額金壹萬四千九百八拾七圓九拾參錢六厘、貢納布一千八百一反也、

補記　御用布納付期日ニハ各村落ノ女頭(ブナヅ)(女世話役)數十人(勢頭、舟子ト云)ノ婦女ヲ引率シテ早朝ヨリ役所ニ群集ス、灼熱タル心事モテ製作シタルモ貢納布一點ノ非難ナク納付濟ミト宣セラルレバ一同感極マリテ泣クモノ、卒倒スルモノ、雀躍スルモノ、千姿萬態ヲ演出ス夕刻歸途中目出度〳〵ヲ連呼亂舞シツヽ村ニ入ル、夜一家團欒小宴ヲ催ウセリト云フ、

乾隆十四年(紀元二四〇九)芭蕉布、織維製法、芭蕉株栽培、當地ニ初メテ行ハルト、

鹿兒島專賣支局八重山專賣官吏派出所

明治三十一年三月設置セラレタリ當島ニ煙草ノ種子ハ候鳥ニヨリ傳播サレタルヤ將タ若クハ黑潮ニ沿フテ南洋諸島ヨリ漂流セシヤ口碑ニ傳ハラズト雖モ尙寧王十三年、萬曆年間、琉球國人、某初メテ日本國ヨリ輸入セリ(寛文八年(紀元二三二八))二月德川家綱天下ニ令シテ煙草栽培ヲ停止ス)ト云フ爾後國分(コクブ)煙草ハ舊藩之レヲ褒賞用トシテ諸役人、民衆ニ賜與ス當島ニアリテハ無役ノ士族獨リ煙草耕作ニ從事シ一斤金四錢ノ割ヲ以テ未進布(ミシンフ)(夫賃代價)即チ民費ニ上納ス。小濱島ノ大豆、綠豆、黑島、新城兩島產ノ香料「ヒハチ、モドキ」等ノ特產品ト彼我交易セリ然ルニ專賣法實施ト共ニ耕作地限定セラレタリト云フ。

註　大正六年度煙草元賣捌人一名小賣人五十九名ナリ、煙草耕作者六百四十人、賠償價格一反歩金貳拾七圓六拾七錢六厘見當ナリ明治三十八年一月據專賣法實施サル元賣捌人一名小賣人四十一名ナリ煙草專賣法未施行地ハ與那國島波照島ニシテ據專賣法未施行地ハ竹富、小濱、西表鳩間、新城、黑島、波照間、與那國ノ諸島ナリ、

中央氣象臺附屬石垣島測候所

埠頭ヲ距ル北東約九丁開濶ナル糸數原ニアリ所ハ明治二十九年十二月一日登野城百二十七番地ノ民家ニ中央氣象臺石垣島出張所ヲ創設セラレ氣象觀測ヲナス後チ石垣島測候所ト改稱セリ同三十年六月一日現在地東經百二十四度九分、北緯二十四度二十分乃チ夏至線ノ北方僅カニ五十分ノ地(海拔七米突)ヲ相シ新築移轉ス同四十二年三月煉瓦建二階造ニ改メラル。

石垣村役場

明治四十一年四月二十日八重山村役場設置事務ヲ取扱フ大正三年四月一日八重山村役場ヲ廢止ス、石垣・大濱竹富・與那國ノ四ヶ村ヲ新設セリ。

八重山通俗圖書館

八重山郡教育部會附屬トシテ大正三年六月十三日開館式ヲ擧グ前部會長安東重起氏ノ祝辭ニイヘリ「我ガ八重山通俗圖書館創立ノ目的ハ素ト君國ニ對スル忠愛ノ心ト鄕黨ヲ思フ至情ノ發露ニ外ナラザレバ將來本郡有志ノ熱誠ナル援助ノ下ニ逐年堅實ナル發達ヲ遂ゲ以テ本郡文敎上偉大ノ功果ヲ奏スルニ至ルハ余ノ確信シテ疑ハザル所也」同年七月一日雜誌「八重山」ヲ發刊セリ。

先島新聞社

社長松下晩翠翁、管城ヲ携ヱ八重山ニ遊ビ大正六年四月十五日創始及ビ經營セリ。

商業

先島ノ商賣買ハ古來物々交換ニシテ特種貨幣的ノモノヲ有セズ沖繩島ニ融通シタル鳩目錢（ハトメゼニ）、琉球通寶ノ片影ダモナク凡百ノ事物米穀本位ニ則リ、牛馬一頭米何石ト換算セリ、置縣後收稅部ハ何月某日ヨリ某日迄三日間那覇市場ニ於ケル賣買相場ノ平均價格ヲ算出シテ公定相場トシ米穀上納標準價格トナセリ、明治十六年御商方（オシタイホウ）トシテ舊藩士丸一商店ヲ開業セリ當時、間切吏員卽チ下役（シモ）人監督シテ商運ヲ圖リ店ニ通勤スルヲ無上ノ光榮トナ

セリ同二十一年下役（シモ）人、直接商業ヲ處辨スルハ其ノ權威ヲ失墜スベキモノナレバ絕對ニ禁止ノ旨八重山島役所長ヨリ訓セラル、爾後商手代ヲ常備シテ店務ヲ整ヘタリト云フ、然レドモ商品ノ販賣滯ル時ハ役人ハ身分ニ相應シ購買セリ是レ一ハ奉公心ト、一ハ諸役立身ノ基ト解セリ同二十四年白銅金五錢貨初メテ通用ス俗ニ一升錢（ゼニ）ト呼ブ。

八重山支金庫

第百四十七銀行出張所ニシテ明治三十三年四月開店ス、

無限責任八重山村信用組合

明治四十二年一月設置ス一株金五圓、出資株數若干アリ、金融界ノ革命兒トシテ年一分五厘ノ低利資金ヲ組合員ニ通用セリ存立期限十ケ年ナリ。他ニ無盡講盛（モアエ）ンニ行ハレ質屋業ヲ營ムモノ四、五アリ

沖繩縣支金庫

農工銀行出張所ニシテ同四十五年四月開店ス

八重山產業株式會社

資本總額金三十萬圓ヲ以テ大正五年八月十五日創立ス。

東洋製糖株式會社 八重山製糖所

宮古島、八重山島ヲ併セ製糖ヲ開始ス當島大濱村ベーキナアー草原ヲ拓キ大正七年三月二十一日開業ス五百噸級ノ器械ヲ備フト云フ。

育英事業

藏元所在地ハ學府ナリ四箇奉公人ノ童子（就學年齢八歳ヨリ十四歳迄）青二歳（十四歳以上）ヲ育英薫陶セシ寺小屋ヲ會所（クワイシヨ）ト名ヅケ觸筆（フルビツ）者（シヤ）（小使）相附（アヒツケ）（助手）講談師匠二人、仲師匠二人ヲ置ク師匠ハ本島出身ノ秀才ニシテ那覇久米（クメ）ニ游ビ修學シタル士ヲ任ゼリ師匠ノ弟子ニ對スルハ宛モ慈父ノ情ヲ以テシ造次顚沛ソレカ提撕扶掖ヲ怠ラズ初メ朱文公家訓、大、中、小學、論語、孟子、古文眞寶ノ素讀講義ヲ敎授シ編文、賦詩、球算ヲ習得セシメタリ道光十五年痳疹流行ノタメ會所ヲ閉鎖ス道元二十四年（紀元二五〇四）四月廿八日復興セリ明治十五年八月七日石垣島南小學校ヲ藏元附屬地囚人處刑場（郵便局用地）ニ設ケタリ同二十七年四月高等、尋常科ヲ併置シ同四十年四月登野城尋常高等小學校、石垣尋常小學校ノ二校ヲオキ大正六年四月與那國尋常小學校ニ及ビ同七年四月大濱尋常小學校ニ就レモ高等科ヲ增設シ

タリ敎育ノ事業愈々トシテ日ヲ趁フテ改善セラレントス。

登野城村會所條々（原文）

一、每朝髮結身奇麗ニ而早天罷出當番人ハ座中見繕庭迄被拂除各座相附事

但遲成罷出候方ハ見合ヲ以科鞭（手掌ヲ鞭ニテウチ）可申付事

一、何連（イツレモ）茂罷出次第仲師匠一禮ニ而讀書取附退座ノ節同斷

一、書物讀覺次第則々空復（ソラチヨー）仕師匠引合ヲ以罷歸次日ニ茂彌空復イタシサセ師匠承屆ノ上ヲ以讀書サセ可申事

附朝ノ間暇ノ方ハ何時ヨリモ罷出讀書方右同斷

一、二才童子共朝ノ間ニ讀書、四時ヨリ八時迄ハ手習、七時ヨリ暮六時迄惣復可致事

一、人之書物讀掛候內側ニ而列讀（ツレトク）イタシ候得バ當人覺兼專竈禮ノ儀ニ而候間左樣ノ儀曾テ仕間敷事

但爲覺仲師匠ヨリ差免方ハ格別之事

一、仲師匠人數ハ講談師匠之所ニ罷出讀書又ハ講義不審相晴可申事

一、於會所何連茂律儀可相勤之候高笑雜談又ハ腕立徒事共イタシ候ハヽ見合ヲ以拾才以下科策可申附事

但會所ニ而ハ不及申何方ニ茂無調法之儀有之候ハヾ科策同斷ノ事

一、讀置候書物忘候ハヾ字數應科策可申付事

一、會所又ハ何方ニ而茂書物、書狀、手本ノ類不案內相伺又ハ手習具ノ類取散候儀無禮ノ儀ニ候間可相禁事

附違背ノ者見合ヲ以科策可申付事

一、於宮寺或樂書或殺生又ハ境內荒候儀一切令停止候事

附違犯之者有之候ハヾ見合ヲ以科策可申付事

一、於村中或礫打、からまはし、或ハ石垣ニ登或ハ花木之類折取或人ノ草履踏替候類至極故障ノ儀候間都而可相禁事

附相背候方有之候ハヽ右同斷

右通聊無疎意可相守候若違背ノ者有之候ハヾ腰書ノ通科申付候以上

乾隆四十五年(紀元二四四〇)三月四日

惣下知役若文子　大濱ゟや

同　横目仮筆者　幸地ゟや

同　同　柚山筆者　宮良ゟや

同　同　若文子　豐川筑登之

大濱親雲上

宮良親雲上

石垣親雲上

名渡山筑親雲上

翁長里親雲上

與那覇親雲上

右個條之通可相勤者也

子三月四日

登野城村　會所

當嶋之儀遠境相隔諸事城下ノ樣ニ□無之積ニ候得バ彌以學文、文段、算勘、相嗜不申候而ハ御奉公方

差支候付此節仲師匠定役被召立稽古事被仰付候付締方之次第申渡候條々

一、學文之儀日用之勤第一ニ而候家中ニ而ハ孝弟於外ニハ忠儀官長禮對朋友之交行住座臥ニ茂聊無疎意心頭掛可罷在事

一、村中和睦ニ而風儀能相成候儀專要候間不行跡之者有之候ハヽ何レ茂ニ而直面可申談候影事ヲ申候而人々ノ非法ヲ申披間敷事

一、人々不相知事ヲバ下部ニ而茂可問習旨有之候得バ貴賤老若無疎退可相學候少茂耻辱之儀ニ而ハ無之候件之心得ニ而罷在候儀專要ニ而候事

一、仲師匠人數ハ早朝師匠之所エ罷出講談相濟次第早速會所エ罷歸讀書致サセ可申事

一、毎月二日、十六日書物讀覺候分ハ惣復サセ承屈可申候事

一、惣下知共事公隙之時ハ幾度茂會所見廻諸事勤方之次第可申談事

一、二才、童子共以前ヨリ讀置候書物一帳ニ面立左記書物讀終次第惣下知ニ而承屈同帳ニ仕次可申候事

一、御奉公人之儀學文、手習、筆談、算勘、相嗜不申候而ハ不忠不幸之儀ニ而此節被爲御氣附稽古事被仰渡御事候間何レモ銘心肝盡粉身可相勤候自然及異變候者出來候ハヽ村中役々ニ而致教訓乍其上承引不仕候ハヽ及披露御奉公一切御召留逼塞(士族ノ禮遇停止ス)可被仰付事

一、二才、童子共相勵候儀ハ第一親共進次第之事候間隨分懈怠無之樣堅教訓可有之候無據用事之節ハ仲師匠エ可申出候尤自分用之砌ハ會所エ罷出仲師匠、直面暇可有之事

但暇ナシ之者有之候ハヽ見合ヲ以科可申付事

一、四書小學講談仕程之者出來候ハヽ御褒美被仰付筈候間老若貴賤無構精ヲ出相勤候而嶋中之名聞相立可申事

一、仲師匠共勤方疎念ニ有之候ハヽ惣下知ニ而能々致相談乍其上不締相見得披露申出候ハヽ御吟味之上科被仰付候事

一、手習ノ儀二十五歳以下一所エ二十六歳以上ハ最寄次第參會ニ而相勵申事候間是又惣下知ニ而猶以怠無之樣毎度可申渡事

一、歳比相應ニ相成候二才共ハ折々文談相綴サセ惣下知ニ而添消之上ヲ以存念ノ方エ茂相談可仕事

一、渡合ノ諸役人ハ不申及無役老躰ノ者共迄各子孫之爲候條切々會所エ罷出手習學文相進可申事

一、二才、童子共毎月廿日上字、文談、算術可仕事

一、二才共公事差當候砌茂讀書方無懈怠相勤可申候無左候而何願ニ事寄讀書不仕油斷之者ハ吟味之上科鞭可申付事

一、二才、童子共於何方ニ茂徒事有之見當候ハヾ構之仲師匠エ申達其科可申付事

右通堅固相守嶋中引進精ヲ出可申候少茂退轉有之候間敷候以上

午三月四日　　惣下知役若文子　大濱　ゟや

同　横目仮筆者　幸地　ゟや

同　柚山筆者　宮良　ゟや

同　若文子　豐川筑登之

右個條之通可相勤者也

午三月四日

大濱親雲上

宮良親雲上

石垣親雲上

右之通遂披露其通被仰渡候間各可被得其意候以上

子三月四日

名渡山筑親雲上

翁長里親雲上

與那覇親雲上

登野城村　會所

○

明治天皇御製

學校

今はとて學びの道に怠るな

ゆるしの友を得たる童は。

教育

山を拔く人の力もしきしまの
大和こゝろぞもとゐなるべき。

御嶽の由來

藏元火の神

天地剖判ノ初メ惡鬼納加那志（琉球王ノ敬稱）羣神ヲ會セラレ夷師加紀ハ邪神、姦鬼、嘯聚シテ息マズ、之レヲ蕩平センタメ、今歸仁（沖繩島）ヨリ、おたいかね神、降臨シ島内守護ニ顯ハレ給フ、崇敬シテ藏元火ノ神ト奉祀セリ。正月元日、十五日冬至ニハ大安母司祭タリ。

註　康熙十七年（紀元二三三八）大安母（神職）ノ位階ヲ定メ、女座頭ドナス、金簪、美玉ノ使用ヲ許サル、供夫男女各四人、毎月正米一石五斗、外ニ五かや刈田（一十五俵）ヲ賜與セラレタリ、堂ハ海嘯ノトキ流失後チ新ニ造營セリ、

美崎御嶽

大美崎どうは神ト唱フ、昔シ大明洪武初年惡鬼納加那志ニ朝貢セシ以來、歳々貢献怠ラザリシガ大濱村ニ「オヤケ、アカハチ」「ボンカワラ」ノ二人反忠ス、力役納税ノ酷、民ノ枉屈ヲ救ハント欲シ、曩キニ琉球王ニ納ムベキ年貢ヲ廢シ料地ヲ奪ヒタリ、亂民之ニ披靡シテ氣勢決河ノ如ク、堂々タル勇決他村ニ殊絶シタリ。長田大翁主西表島古見村ニ遁避シ、貪婪ニシテ鄙吝ノ賊ヲ討滅セント、日夜義膽ヲ練磨セリ。偶々琉球王、兵船四十六艘ト精兵ヲ搭乘シテ石垣島ニ到着シケレバ大翁主、王軍ヲ導キ賊塞ヲ掃蕩其ノ首魁ヲ馘シタリ時ニ、大翁主ノ愛妹眞乙姥、王師凱旋ノ日、海上安穩ヲ美崎山ニ七日七夜斷食祈願セルニ始マレリ。毎月酉寅ノ日、大安母司祭タリ明治三十六年他ニ奉移セリ、水路圖ノ美崎泊ハ卽チ是。

註　海嘯ノトキ流失ス新ニ造營セリト云フ

南海山權現堂及ビ桃林寺（臨濟宗妙心寺派）

萬歷三十九年（紀元二二七一）大和座ヨリ檢使ノ巡回アリシ際、八重山群島ニハ妖巫ノ符呪、魔術布衍シテ衆庶共威ノ光耀ナク正道ヲ沒却シテ、自然亂心ノ徒トナル。要ハ一ノ宗旨ニ歸依信仰スルコト能ハザルニヨレバ、須ラク堅實ナル信仰ヲ樹ツベキニ力説シ同四十二年（紀元二二七四）波ノ上宮座主、三光院快雄和尚ニヨリ神躰、寶鏡參個ト熊野權現ヲ分靈奉祀セリ。又桃林寺一宇ヲ建立ス權現堂ニハ毎月朔日、十五日、在番、頭、以下諸役人參詣、大琉

球國内ノ安穩、諸病調伏ヲ祈願セリ。島民ハ外人ノ神ヲ信奉スルヲ屑シトセズ、率先シテ改宗歸依セントスルモノナク、是レいりきやあまり神ノ怒リニ觸レ地上ノ生物、一瞬ニ死滅セント嘆キ、犧牲ヲ供ヘ祭祀絶タズ。

康熙十七年(紀元二三三八)恩納親方巡視ノトキ辞色ヲ勵マシ、該神ノ祀ヲ峻嚴ニ禁止セリト云フ。

註　海嘯ニ流失シタル神鏡ハ、寺院境内ニテ發見、文殊菩薩一躰ハ崎枝村前濱ニ漂着ス、御誕生佛一躰、阿彌陀佛一躰ハ流失セリ、依テ同年十一月十二日眞言宗護國寺覺昇座主、諸佛躰ノ開眼法會ヲ修行シ、權現堂ハ、波ノ上神社圖式ニヨリ改メ造營ス、同年十一月二十日、宮屋鳥御嶽神苑ノ假宮ヨリ奉遷セリ

宮屋鳥御嶽

土俗おれはな神ト尊稱ス、天蒸民ヲ生ズ、其始メ無知無識、弱ノ肉ハ强ノ食、種々殘忍非道、墮落日ニ甚ダシ中ニモ、神ニモ似テ柔和忍辱ノ相アリ、清淨ニシテ邪意ナキ兄タマネ、弟マシス、妹ナタハツ、ノ三人住メリ神彼等ヲ嘉ミシ愛デ給ヒ、或ル寅ノ日鷄鳴曉ヲ告ゲテ東天、微光ヲ潮スル頃、天界ヨリまさしもどたい神顯ハレ其妹ニ神託アリ。神トハ人祖ニシテ父母ナリ、人々ハ神ノ子孫ナレバ邪曲ノ心ヲ捨テ、貧民孤獨ヲ救ヒ、同胞相愛セヨ。兄弟相鬩ギ鬪爭殺戮ハ神慮ニ不叶、汝克ク萬人ノ罪障ヲ悔恨セシメ誠意、神ヲ推尊スベシト優シク誓ハレタリシカバ、兄弟屢々一同ヲ警メテ内部ノ紛亂ヲ止メ、一致協同シテ耕作ニ營々タリ家屋ヲ建テ連ネ公平ナル主宰者トナリテ新ニ石垣、登野城ノ二ケ村ヲ建テヌ。

註　規模帳ニヨレハ戸數三十戸ノ村落ニハ必ス御嶽一社建立スヘキ事ト定ム、

觀音堂

四箇ノ西方約一里强、富崎ニアリ緩キ傾斜ノ丘陵、濃緑ノ草原相連リ賤家點在ス途ニ磐石疊出、廈屋ノ如キ舟路石アリ平ナルモノ、隆起シタルモノ、中陷スルモノ縱横亂整各々其態ヲ異ウシ。近ク眉睫ニアル西表島其ノ積翠、倒影ヲ支那東海ノ浩波碧藍ヲ湛エタル中ニ浸シ風光眞ニ掬スベキモノアリ章魚洞、貝底丘アリ時ニ蜃氣樓現ハレ神ノ渡御行列ヲ拜ミ、或ハ金殿玉樓ヲ、或ハ徒歩ノ人々、或ハ騎馬ニシテ且出デ且入ルト見ル瞬間、忽然トシテ消ユ奇觀ナリ。堂ハ桃林寺ノ長老義翁禪師、衆生ノ寧靜、海路平安ヲ祈願スルタメ妙法蓮華經全部ヲ謹寫奉納シ讀經塚ヲ建立ス、乾隆七年(紀元二四〇二)順天氏首里大屋子、堂ヲ營ミタリ爾來善男善女毎月八日、十八日二十八日參詣スルモノ多シト云フ。

註　乾隆三十六年末竹富島ヨリ五百五十人ヲ富崎ニ寄セ宇良村ト稱セリ、沿岸ニ鰹魚製造納屋六、七軒アリ毎年四月ヨリ十一月中旬迄、魚揚ク

場ノ砂濱ニ漁獵タル經魚ノ山ト積マレ、節ニナルマデ獨特ノ製法見物ニハ最妙、

名藏（那藏）

四箇ノ北西約一里二十丁ニアリ川良山ノ峽ヲ經テ十七町ニシテ名藏ニ入ル、峽ヤ朧月尙ホ花卉紅ヲ逗メ、濃淡相暈シ、イハサキ木葉蝶、妻紅蝶ノ翩々トシテ舞ヒ洵ニ幽景ニシテ塵世ノ外ニアリ、著者假借シテ春秋ノ峽ト唱ヘリ。名藏ハ康熙二十五年（紀元二三四六）本那藏ヨリ潮嶺ニ村敷ヲ移シタリ。風水法ニ適セシ所ト記サレタリシガ、今ヤ昔日ノ繁盛ナク、萬象眠リニ落チテ寂然聲ナシ、明治二十七年頃阿讃ノ國人地ヲ芟斬シテ移リ住ミ、幾多ノ辛酸ヲ經驗シツ、甘蔗耕作ニ黽勉シタリ天蓋ゾ無慈悲ナルヤ、同三十年十一月三日稀有ノ颱風（風向、北東、風速度七〇・七米秒）一過シテ家荒レ、草伸ビ以前ノ面影ヲ止メザリシガ、同四十三年川勝富四郎氏ニ嫁セリ、更ニ大正六年東洋製糖會社ニ轉嫁シタリ、里落ハマダラ蚊ノ哀話アリ。乾隆十八年（紀元二四一三）四月、御物奉行ニ報告シタル文書ニヨレバ現人口六百八十二人ナリ、今ヤ戸數三十戸、人口本籍男女五十一人、寄留男女六十九人ナリ。

名藏七瀧

黑岩恒先生ノ先達サシタル七瀧ハ蕭瑟ナル林ノ裏、名倉川ノ流レヲ遡リ二里許ニアリ、怪石、奇巖、壁ノ如ク立ツモノニ抵ル、鑿シテ川トナル、水其上ヲ行ク川甚ダ窄ク水益々驕ル、或ハ間花幽草ノ石罅ニ點綴スルヲ見ル、山水清音アリ其風景言翰ノ及ブ所ニアラズ一日ノ清遊ヲ試ミルニ足ル。

名藏御嶽

おもとあるじ神ト申シ奉ル。往昔、名藏ニ「ハツカネ」「タマサラ」ノ兄弟ト妹ニ「ヲモトオナリ」ノ三人住メリ、「ハツカネ」生來邪心深ク强暴ナリ妹常ニ兄ノ不行跡ヲ諫ムルモ馬耳東風ト聞キ流ガシ、順ハザレバ女性ノ身トテ覺エズ熱涙一滴又タ二滴、美シキ頰ヲ霑シタリ。或ル蒲葵樹下ニ憩エケルトキ、清艶慈眼ノ天神現ハレテ「オナリ」ヨ神ハ汝ノ辛苦ヲ能ク知リテアレバ必ズ汝ヲ助ケ得サセン、神ノ姉妹三柱這度大和ヨリ琉球國土守護トシテ鎭座ス、姉神ハ首里、辨ノ御嶽ニ、妹神二柱ハ久米島ヘ渡御サレシガ、山淺クシテ境俗ニシテ森嚴ナラザレバ八重山萬年青嵩ノ神靈地ニ移御、島内ノ諸惡諸病ヲ退ケ、五穀豊饒、民ヲ餒ンズベシ、村民崇敬怠ルベカラズトノ神託アリキ「ハツカネ」不逞ノ徒神託ヲ蔑視シ、斯ク法力宏大無邊ナラバ我レニ海產ノ巨、陸棲ノ大動物ヲ現示サレヨト慢言セシヤ語、尙ホ唇ヲ離レザルニ七尺ノ野猪、毛ヲ逆立テ、狂奔殺到シキタレバ、不思議ノ獲物ヲ雀躍シテ擲チ殺シ肉一片ヲモ剩サズ食ヒタリ、神再ビ海濱ニ導キ給ヒヌ。濤俄カニ起リ丈濤ノ裡ニ長サ十

丈ノ鯖潑溂タリ、彼レ喜ビテ赤手以テ捕殺シ喰ヒ盡シタレバ慢心益々驕リ、オモト嵩ニ登攀セリ神、天使ヲ隨ヘ前ニ現ハレ心地好ゲニ饗應シ玉ヒ、玉音朗カニ糠ヲ食ハセヨト命ジヌ、忽チ糠霏々トシテ雨ノ如ク天空ヨリ降リ地上ニ堆積「ハッカネ」ノ身体ヲ埋沒セリ彼レ愕キ僅カニ面ヲ擡ゲテ仰ギ見レバ神天使ヲ先立テ、一朶ノ白雲ニ躍リ乘リテ蒼空遠ク消エ去リ玉ヒヌ。彼レ其奇蹟ニ感ジ正シカラザル心、汚穢キ行ヒヲ悔ヒ、畏懼ノ念萌芽シ、下山スレバ惡シキ病ニ罹リ耳目鼻腔ヨリ早手突發シ苦痛甚敷、假死人トナレリ、彼レ妹ヲ怨ミ遽カニ飛ビカヽリテ打殺セリ、ソノ瞬間頓カニ死シ遺骸名藏野ニ石トナリテ横ハレリ妹ノ死骸ニ諸神降臨シオモト嵩ヘ運バル。村人茫然トシテ夢ノ覺メタル如ク、神託ノ靈驗ヲ崇ビ御嶽ヲ創建信仰セリト云フ。

崎枝（サキエダ）

四箇ヲ距ル北西三里二十丁、屋良部半島ニアリ、卽チ蚊ニ泯サレタル村ニシテ戸數十二戸、人口男女三十四人ナリ。途ニ本那藏ノ村落、今ヲ去ルコト未ダ二百歳ナラズ祭祀既ニ絶エ、居宅圮廢、江邊ニ朽老シ後世不聞ニ終レリ徒ニ鳴禽流唱スルノミ。明治三十九年崎枝牧場ノ移轉其他ノ事故ノタメ村民糊口ノ道ヲ失ヒ四方ニ散亂セリ。海底線陸上室ハ村ノ西方約半里ニアリ伊良部鰻ハ茲ニ產ス。

川平（カヒラ）（嘉平川平）

四箇ヲ發シ高低起伏行クコト四里强ニシテ達ス、本那藏ヲ過ギ臥牛ノ如キ一字引石ニ杖ヲ停ムベシ、猶ホ古道ヲ尋ネテ進ム卽チ川平口ナリ一株ノ松樹アリ、曰クおまた松ト名ヅク、晢ラク松根ニ踞シ心目ノ聘スル所ヲ恣ニスベシ、夫レヨリ山腹（海拔四十米突）ニ循テ紆回、圓礫累々磊々トシテ坂路險惡顚踣セント欲スルモノ數々、行頗ル艱ム、著者新稱シテ「乙女轉ばし（メドナアコロ）」ト云フ旋ツテ隴ヲ過ギ林ヲ穿チテ東シ則チ、川平ニ抵ル、字ハ喬木蔽蔽、たかさご櫻ノ萬株、松葉ヲ粧飾スル萬年青岳ノ北西麓ニアリ住居數九十二戸、人口本籍男二百十八人、女二百四人寄留男十八人、女十一人、合計四百五十一人ナリ。邑ノ北方八町ニ「シシ岡（モリ）」「ガアナ岡」アリ、石器時代ノ遺趾遺物存ス、五世紀頃馬來人種居住セリ（三十九年七月鳥居龍藏氏踏査）川平灣ヲ經テ北東洋間ニ斗出シタル平久保崎、船越（フナコチヤ）ノ縱谷青天一柱ノ野底富士（スヘイ）ヲ指點シ灣內ニ七島アリ、小蜆ノ如ク、浮龜ノ如シ州嶼ノ麗アリ

註　灣內ニ三重縣御木本（ミキモト）眞珠養殖場出張所アリ大正三年五月十七日名倉灣ニ赴メタリシカ、同五年五月移轉シタリ技師長竹內久吉氏助手蜑ヲ監督從事セリ氏ノ談ニヨレバ颱風ノ襲來、魚介ノ害ヲ被ル事アレド未ダ赤潮ヲ見ズト、列嶼近海ニ養殖母貝タル黑蝶介ノ產出少ナカラサレバ將來有望ナリト、

「山はり」ニ大和墓アリ、やしま人別ニ一世界ヲ創建セシ華胥郷、よつんニ河流ヲ作リ大和川ト名ヅク、是レ池溝開鑿ノ始源ニシテ農耕法ヲ土着民ニ敎ヘタルベシ。（三十九年二月菊池幽芳氏、四十年三月伊波物外氏踏査）

節の祭

陰暦八、九月中ニテ己亥ニ相當スル日ニ行ハル、歳ノ干支ニ縁アル青年假裝シテ猫トナリ、まやあ、どもまやあト呼ビ林投ノ簑ヲ着ケ、蒲葵笠（ビロウ）ヲ面深カニ戴キ戸毎ヲ訪問シツ、明年ノ幸福ヲ齎ラシタル御使ヒナリトシテ芭蕉葉ニ包ミタル餅ヲ供スル風アリ。

豪族なかまみちけ

なかまみちけハ長田大翁主帷幄ノ裡ニアリテ内外ノ事ニ鞅掌シテ屢々功ヲ樹ラタリ。生來質素筒朴尚武ノ生活ヲ續ケ凡容凡俗ヲ脱シタリ、彼レ川平ナカマ岡（モリ）ニ居ヲ定メ民ノ疾苦ヲ忖リ、緩急ソノ中庸ヲ得タレバ民畏服セリ彼レ日々「シシ岡」ノ頂ニテ腕ヲ練リ武術ニ勤ム、或日オヤケアカハチ敵ノ虚實ヲ探ランガ爲メ、訪ヒシニ優秀ナル武藝ヲ傍觀シ思ヘラク、又ヲ以テ之レヲ解クベキ武士ニ非ラザルヲ知リヌ。兩三日ノ後アカハチ長田大翁主ノ使者ト伴リ同伴ノ途、伏兵蜂起要擊セリミチケ身ニ寸鐵ヲ帶セズ扇子ニテ兵刃ト挑戰ス、舉動、輕捷、出沒自在寸毫犯カスベカラズ彼レ背後ノ敵ヲ防ギツ、後退スルヤ陷穽ニ落ツ亂刃ノ下ニ殺サル。長田聞イテ愁然稍々久ウシ人ニ語リテ曰ク余ガ右手ヲ切斷サルト仲間（ナカマ）ノ後庸詳カナラズ

海（カイ）浮

川平ヨリ馬ニ賃シ仲筋ヲ經東方二里強ニアリ仲筋ハ往古、石垣島各村落ノ住民、木綿花栽培シ蒲採收ノ季節ニハ老少男女群聚シ花摘ミノ風情温雅ナリト傳ヘラル。現時、神戸市範多商會營林所ヲ設ケ琉球赤松ノ製材（四十噸級ノ器械）ニ從事セリ、戸數二十六戸、人口本籍男三十七人、女四十五人、寄留男四人、女一人、合計八十七人ナリ

節の祭

陰暦八、九月ノ中ニテ己亥ニ相當スル日ニ行フ、猫ノ假面ニ芭蕉葉（重量約六十斤）ヲ編ミ上着トナス、雌、雄二匹、各戸ヲ訪ヒ明年ノ幸福ヲ祈ルナリ此ノ前日、觸（フレ）使者タル猫來タリ、明日、眞猫（ホンマヤア）御入來ナルト告ゲ、種々ナル問答ヲ交換シテ使者去ル、當日村民一同盛裝シテ眞猫ヲ歡迎ノタメ集マルト云フ。

野底

野底富士ノ聳エテ天ニ屬セル美容ノ麓ニアリ乾隆十八年ニハ人口五百十五人アリ殷盛タリシガ今ヤ草木ノ茂生スルニ任カセ禽獸ノ蹂躙スルノミ。

裏石垣島ノ海岸地方ハ概シテ海ニ向ヒテ急斜セル丘陵性ノ部落ノミニテ平夷ナラズ、故ニ本島特産トシテ稱セラル、倭少ノ猪夥多シ川平灣口ニアル越間島ハ猪獵地トシテ嘖々タリ。

大濱村役場

四箇ヲ距ル北東一里十二丁計リ一路坦々タリ村總面積一萬二千九百五十町歩ニシテ内牧場三千六百八十二町四反歩、原野村有二千六百七十二町歩、私有原野一千三百六十二町歩也。總戸數八百十八戸、人口四千六百十人ナリ民物富庶農業及ビ牧畜ヲナス、字平得外八ケ字ニシテ盛山、桃里、伊原間、平久保ノ四ケ字ハ一目千里沃土膏腹ナリ、然レドモ「マラリヤ」病地帶ナルヲ以テ甍破レ軒朽チ草木深ク人烟稀レニシテ老鼠灯ヲネブリ、睡猫蝶ヲツカムノ光景アリ戸數七十六戸、人口二百八人ヲ算スルノミ。

平得

四箇ヲ距ルコト十六町ニアリ戸數百六十一戸、人口八百七十九人農業ニ勉メリ。

かたばる馬

籾播キノ日妙齡ノ娘子、盛粧ヲ凝ラシ赤紐ノ花笠ヲ戴キ、下着ハ純白、友禪染メノ上着ヲ重ネ、右肌ヲ扱ギ肥馬ニ跨リ、數十ノ乙女、朝暾ニ御スル狀恰モ壘地ヲ踏ムニ擬ス、窈窕タル艶姿、楚々トシテ人ヲ動カス趣アリ此式終レバ直チニ苗代田ニ向ヒソノ業ニ服スト云フ。

結願の祭

歳豐カニ稔リヌ、新穀ヲ神ニ捧グ男女老幼、御嶽ニ參籠シ歌舞ヲナス。

註　曾テ役人小濱島ヨリ豆類ヲ移殖シ、暴力以テ民ニ勸メタリシガ三ケ年連續シテ凶作トナル、爲之諸上納物ヲ怠リ且飢餓ニ類シ已ムヲ得ズ煙毒霧ヲ厭ハズシテ深山幽谷ノ間ニ其影ヲ隱シタリ當時ノ役人失脚シテ新ニ就仕スルヤ村落ノ寂閑ナルニ驚キ殘餘ノ民ヲ御嶽ノ城内ニ集メ日夜舞踊セリ其鉦鼓ノ響キニ應ジテ深山ヨリ復歸スルモノ日ニ多カリケレバ豆類ノ耕作ヲ禁ズ米作ニ專心銳意タラシメタリト云フ遊ベ働ケ是レ祭ノ起源ナリト傳フ、

大濱

村役場所在地ニシテ戸數二百三十七戸、人口一千四百九十人ヲ有セリ農、牧ヲ業トナス富メルモノ多シト云フ

崎原神根付神ナリ古昔大濱村ニ「ヒルマクイ」「コウチタマカチ」ト云フ兄弟二人アリ常ニ思ヘラク島民ハ未ダ鋤、鎌等ノ鐵器ヲ知ラズ、荊棘ノ地、芟伐スルニ石斧、獸骨ヲ竹木ノ先ニ結ビ用ユ、勞役ノ苦、終生樂ヲ享クルコトナケン、是等ノ器具ハ自國ニ需ムル能ハザルモノナレバ兩人額ヲ鳩メ日夜憂悶セシモ鳥ナラヌ身ノ翼ナク如何センヤト或日海濱ヲ徜徉ヘシニ巨木ノ漂着アルヲ拾得シテ試ミニ船ヲ造リ海上ニ浮ベヌ操縱ノ手練ナキモ浮動シテ笠覆ノ虞ナケレバ兩人喜ビ之レニ乘リ艮ノ方ヘト船ヲ航セリ水天茫々際涯ナキモ企テタル大事業ヲ貫徹スル迄決シテ初一念ヲ飜サヾリシ、數十日ノ久シキ、一日小鳥群ヲナシテ頻リニ丑ノ方ヘ飛ビ囀リテ船邊ニ舞ヒ來レリ、近日海岸ヨリ流レ出デタル如キ青草水上ニ浮ベリ、船ノ進ム方向ヲ瞬キモセズ見詰メ居タリシガ彼方ニ歴然ト陸地ヲ認メヌ、遂ニ旭日ハ東天ニ昇リタリ、唯見ル眼前ノ一大美島廣袤數十里ヲ知ラズ、兩人船ヲ岸ニ泊シ薩州坊泊、下町ノ陸ニ上ルヤ自ラ跪座シ滿腔ノ喜悅ニ泣キタリ、時ニ白髮白髯ノ老仙忽然トシテ其前ニ現ハレ兩人ノ生國、何處ノ船ナルヤ又タ用務ノ始終ヲ聽取サレタル後チ汝ノ島ニテ崇信スル神ノ有無ヲ尋ネラレヌ老仙、神筴一個ヲ授ケ玉ヘ洋中ニテ蓋ヲ開ク可カラズト嚴シク戒メラル。神筴ノ鳴音ニ注意シテ其方向

ニ船ヲ進ムベシ歸島セバ汝ノ伯母、妹奉戴開蓋セヨト命ゼラル。兩人謹ミ畏ミテ船ノ中央ニ奉移シ南風ニ帆ヲ揚ゲヌ果シテ洋上ニテ鳴音ヲキヽ老仙ノ戒ヲ忘レ、開キ見ント欲スル心抑ヘ難ク細目ニ蓋ヲ開キケルニ其刹那ニ一抹白雲騰ルト見レバ何等風モナキニ狂瀾怒濤湧キ船逆航シ復タ坊泊ニ到レリ、老仙現ハレ二人ノ薄志弱行ヲ誡メラレ再ビ嚴緘シテ神筴ヲ賜ハル、渺茫タル洋上筴ノ鳴ル音ヲ指南トシ神明ノ擁護ヲ得テ故郷ノ土ヲ踏ミ則チ伯母、妹ノ身邊ヲ清メ、恭シク神筴ヲ奉迎セシム、而シテ筴ノ緘ヲ解キ開蓋スルニ神託アリ村人、新神渡御ヲ敬ヒテ篤ク信仰ス「ふしかうかり」ト申シ奉ルト云フ。

「オヤケアカハチ」ノ堡趾

字ノ巳方二町ニ豪俠兒「アカハチ」ノ居趾アリ、彼レ意氣衝天闘フヤ一騎打ノ强勇、阿修羅王ノ如ケン、征討軍士卒ノ死傷ヲ懼レ持久戰ヲ策セシカバ烏合ノ賊勢、首魁ノ叱咤、勵聲ニ耳ヲ借サズ、軍容俄カニ振ハズ運命盡キテ海ニ逃レントシテ濱ノ岩石ニ佇ム、王軍追躡シ來リソノ首級ヲ見ザレバ甘心セザル報ヲ聞キ、殘念ト叫ビ力ヲ入レ踏ミシ足跡ヲ石面ニ印シ行跡ヲ晦マシタリ。堡塞ノ跡ハ飯匙蛇ノ穴トナリ、點存スル礎石ニさくら蘭世相ノ變遷車輪ノ如ク人事常ナク、幸運長ク一人ノ上ニ留マラヌヲ囁クニ似タリ。

河流ハ大濱、宮良ノ中間ニアリ水清ク魚躍ル源ヲ萬青年岳ノ東麓ニ發シ、綠青滴ル裾野的草原ヲ灌漑横斷シテ所謂八重中ノ渦ヲ醫ヤシツ、東流、宮良灣ニ朝宗ス。(灣ハ彼理提督浦賀ニ航スルノ時碇泊、數月ニ亘レリ島内外ヲ測量ス幕僚ノ一士官、石垣島占領ノ議ヲ建テタリ提督從ハズ曰ク禽ノ餌料ヲモ收ムル能ハズ、占領ノ價値ナシトテ放棄セリト傳フ)河口ニ古キ三稜州ノ遺跡アリ又タ畵趣ヲ添フル常綠樹「マングローフ」自生繁茂セリ干潮ニハ紅白ノ招潮子根株ノ下ニ顯ハレ餌ヲ漁ルアリ舞踊スルガ如シ。滿潮ニハ海中ノ森林トナリ影水中ニ落チ其奇觀コソ常夏ノ鄕ノ代表者ナリ、流域ニハ牧場アリ數百千ノ牛馬悠々タリ鴉ソノ背ニ翼ヲ休メ毛根ニ潛ミ血ヲ吸フダニヲ餌ンデ反哺ノ孝ヲナシ牛馬喜ビ神氣恍惚トシテ眠ルアレバ樵童ノ口笛、乙女ノ歌喉ニ暖カキ夢ヲ破ラレ耳ヲ欹ツ鴉モ亦人ヲ見レバ身ヲ飜シテ凝視シ、乍チ又空ニ飛ブ其狀、良ニ理想鄕タルベキカ。

河ニ架スルニ宮良橋アリ順治十五年(紀元二三一八)人馬通行ヲ便ニセンガタメ架設セリ、爾後風水害ヲ被リ修築ス康熙三十八年(紀元二三五九)改築セリ高浪ノタメ流失シタリ、然ルニ咸豐五年(紀元二五一五)故仲尾次政隆翁國禁ヲ犯カシ眞言宗ヲ信仰シテ當島ニ配流トナル、偶々宮良橋落チテ渡舟ナク民庶ノ通行困難ナルヲ悟リ同治元年(紀元二五二二)十一月自費ヲ投ジ修築セリ藩ソノ善行ヲ表彰シテ赦免ノ身トナレリ、村人翁ノ德ヲ頌スルタメ渡橋式ニ歌曲ヲ作リ舞踏セリト云フ。

宮　良　橋

(天與君ニ據ル)

一、仲尾次主のおかげに、宮良大川や、寶橋かけて見事でもの。

一、寶橋の上から、通ゆる人々や、目眉打ち晴れて、踊て通ゆさ。

一、橋の陰德や、何時代までも、百果報ごみせる幾世までも。

明治十七年故西村沖繩縣令一行渡橋シテ一詩アリ

珊瑚疊作五橋材。　鶴葉千株短似苔。
莫是神仙下遊處。　萬年青髻映流來。

宮良

「マツキー」性海岸樹叢ノ濃綠鬱紆ヲ風防林トナス民居路ニ沿フテ相望ム、戸數百三十七戸、人口八百九十一人ナリ農牧ヲ業トナス、小濱島ヨリ移住セシト云フ。年中行事ニ穗利祭(祈年祭)アリ三日間擧行シ字民歡呼シテ

之レヲにうろぴと一名あかまたト謂フ。

あかまた祭ニ就テノ私見

世界ニ於ケル動物信仰ナルモノ、起源ニ遡及スレバ、原始ノ初ヨリ人間種族ニ行ハレタルモノナラン。其特徴トシテハ生キタ人間ガ、卽チソノ地方ニ固有ナル動物ニ變形スル力アル點ニ存ス、人類學者之レヲ根本的トーテム崇拜ニ歸セリ。抑モ原始時代ノ人類ハ敵視スベキ動物ト接近居住セリ、故ニ大ナル動物(敵)ハ彼民ノ常ニ嫌惡ト恐怖トナリシナランモ、併シ食物トシテ肉、被服ニ毛皮ヲ要シタルハ明カナリ、依テ衣食ヲ獲得スルタメニ敵(動物)ヲ誘惑陷穽シ及ビ狩獵ニハ種々幼ナキ腦漿ヲ絞リ動物ノ姿態ヲ假裝スルニイタレリ。宮良ニ行ハル、あかまた、川平、浮海ノ猫等ハ動物信仰上亦併セ考フベシ。

穂利祭

第一日ハ粟米ニテ芭蕉葉サミンノ葉ニ包ミ蒸籠ニ蒸シテ新穀ヲ神ニ捧ゲ親類知己ニ送レリ、第二日暮色蒼然タルノ頃(月明ヲ忌)あかまた、くろまたノ二躰「ナアビントウ」ヨリ現ハル形態ハ或ル動物ニ因緣アリ、あかまたハ巨眼、巨口、頭髪長ク垂レ顏面赤泥ヲ塗レリ、怪惡優ニ敵ヲ威嚇スルニ足ル。くろまたハ顏面漆黑、眼口稍々柔和

ナリ此等ヲ假面スルモノハ品行端正ノ輩ヲ撰ベリ、身ハ毛皮ニ擬シ草ヤ茅ヲ纏ヒ、竹杖二本ヲ左右ニシ上下ニ振リ拍子ヲ整ヘ歌ヒツ、各戸ヲ歷訪セバ香ヲ炷キ九拜恭シク敬意ヲ表シテ之ヲ迎フ、恰モ何物カヲ得ンガ爲メコノ目的ヲ達スル手段トシテ人間ハ動物ノ所作ト、其叫聲ヲ模倣スルニ似タリ、あかまた、くろまた戸口ニ立ツ一家ニ發リタル年中ノ禍福吉凶ニ對シ興味ヲ添ヘテ慰藉ス明年モ五穀豊稔、村ノ人々皷腹ノ兆アリト、アラユル全敵ヲ調伏シテ神ニ頌詞ヲ奉ルガ如シ丑滿ツトキなあびんどうニ秘納ノ後ハ不問不語、住民ハ之ヲ神聖視シ崇リヲ怖レ歌詞ノ低唱ヲ許サヌ、且他村ニ口授スルヲ首肯セズ。第三日、ぼうばな祝ひトテ全字民老ヲ勞リ幼ヲ扶ケ家族ト共ニ各自行厨ヲ携ヘ綠ナル草原ニ參集シ、林投葉ノ蓆ヲ敷キ蠻酒野肴ヲ献酬、舞踏、歌舞シテ盛宴ヲ催フス、杯盤狼藉タルモ長幼序ヲ失ハズ、仇恩相忘レ、一種族ノ親ミ勸笑沸ク天眞爛熳情誼甚ダ濃カナリ。サレド他村ニ婚嫁シタル男女ハ宴席ニ就クヲ得ズト云フ。此式典ハ一見陋習ナルモ村内ノ風敎、個人的ノ道德家庭ノ美風ヲ調和スベシ、斯クシテ永久ニ部落的制度破壞セラレズ、長閑ナ神代ニ囚ル、西哲言ヘルアリ村ハ神之レヲ作ルト。凡テ吾人ノ慣習ハ古今ヲ通ジテ我國神代ヨリノ接頭語ニ於ケル同一ノ性質ヲ有スルモノナルベキカ。「あかまた」ノ分布地ハ小濱、古見、新城也。

動物ノ假裝ヲナス換言スレバ動物ニ變形ヲナスハ其地方ニ屢々出現スルモノニ限ラル（人類學雜誌ヨリ轉載）ルガ如シ。

一、亞弗利加國　獅子。
一、印度國　狼、豹、虎、蛇。
一、ラプランド及ビフインランド　熊、狼、馴鹿、魚、鳥。
一、北方亞細亞民族アメリカ印度人　熊、狐、狼、七面鳥、梟。
一、最モ普通ナルモノ　犬、狼。

結願の祭（陰八月中、戊戌、或ハ丙午ヲ撰ビ行フ）

六合吉ノ幡（ハタカシラ）ヲ先頭ニ行裝人ニ劣ラジト、皆、美ヲ盡シ花ヲ飾ッテ前後ニ支ヘ、長路ニ繼イデ、仲嵩岡（ナカタケモリ）ニ詣デ棒舞數番ヲ進メ宮良乙女ノ手踊ヲ催興セリ。太鼓、笛、蛇味線ノ鳴ヲ添ヘ舞踊狂言ニ夜ヲ明カシ群客口ニ涎ヲ流ガシ冠ノ落ツルヲ知ラヌ、天亦是ニ感應シ四轉五復ノ風落テ災怪退散スベシ。

仲嵩御嶽（ナカタケ　ミタケ）

昔シ其昔シ「ニシカワラ」「ヒカシカワラ」ノ兄弟、居ヲ水嵩ニ構ヘ骨肉睦マジク日ヲ送レリ、夫レヨリ「セワコマ」ニ移リ、マタ「フタラマ」ニ遷レリ、村人モ各所ニ家ヲ作リテ離居シ互ニ異ナレル種族ト見ラレキ。漸ク原始狀態ヲ擺脫セシモ信愛スル念薄シ、荒ミテ一家内ノ平和、爭論絶ユルナク殺戮ヲ持續スルヲ兄弟其ノ情ヲ憐ミ人々ヲ厚ク遇シタリシモ、惡習芟除セザルヲ憂ヘタリシガ牧畜ヲ知リ農業ヲ營ムニ及ンデ兄弟ノ行動ニ感化シテ敬慕セリ、當時遊牧的生活ヲ棄テ、定住的生活ニ入リシヲ慶ビス、兄弟ハ其頃ヨリ既ニ首領ト立テラレテ能ク衆望ヲ維グヲ得タリ。時ニ野猪牛馬等ハ恣ニ出デ來リテ額ニ汗シテ耕ヤセシ田畑ノ耕作物ヲ害シ大ナル損害ヲ招ク事殊更ニ尠少ナラザレバ、防禦ノ方法ヲ究メ村人等ト力ヲ協セ、白保東表川尻ヨリ宮良西表高山マデ延長二里餘、高サ五尺ノ石垣ヲ圍繞シ終レリ、竣工ノ祝ヒヲ「ナカタケモリ」ニ擧行セリ、酣ナルトキ「さかいかね」「おれまさり」「あしひやかり」「いりきかね」「やとりかね」「みものかね」ノ六神、六人ノ女子ニ託宣サセ汝等ヨ隣人ヲ愛セヨ。懶惰放蹤ヲ戒メヨ。陽ニ人ニ厚意ヲ表シテ、陰ニ其人ヲ害セント思フナヨ。妖氣ヲ掃盪ノタメ「おもと大あるじ」神降臨シ給フト參集ノ老若男女隨喜シ、御嶽ニ勸請シテ信仰セリ逐年民草榮ヘ、宮良、白保二ヶ村茲ニ始マルト傳フ。

白保（シラホ）

字ハ大津波ニ洗ハレ人畜殆ンド絶滅シタリ溺死一千五百四十六人、生存者僅カニ二十八人ナリ依テ波照間島ヨリ寄百姓（ヨセヒヤクシヨウ）シテ村ヲ建テタリト云フ、戸數百五十四戸、人口八百七十七人、農ヲ專業トナス牧畜盛ンナリ、由來石垣島ハ山紫水明、大氣清澄ナレバ狩獵ニ適セリ。

明治十七年故西村沖縄縣令一行白保ヲ過ギテ一詩アリ

漠々瘴烟脚底生。　著花異草不知名。
縱横有路無人導。　百里郊原信馬行。

轟川

白保ノ東方約二十丁ニアリ、河身短ナリ迂回百折、田圃ノ間ヲ縫フ、石橋ヲ架シ、橋ヲ踰ユレバ盛山野トナス。河ハ懸崖トナリ概ネ皆ナ奇峭崭絶、牙角發露シ林投樹罅ヲ穿チテ生ジ虬騰ス磵流激シテ瀑ヲ成シ奔シテ湍ヲ爲シ潺緩ノ流ヲナシテ澤湖口ニ入リテ海ニ注グ。鯉魚ヲ放養セリ、小鴨、鴨、青頸鴨其中ニ點在ス。「ヘーキナア」草原ノ鶉名天下ニ冠絶ス。

盛山

字ハ乾隆五十年（紀元二四四五）富崎宇良村ヨリ桃里村屬地タル盛山野ニ移轉セリ現今戸數二戸、人口五人ナリ。

桃里

桃里及ビ仲筋（川平）地方ハ木棉花栽培適地トシテ並稱セラレタリシガ、乾隆六年（紀元二四〇一）耕作地域ヲ指定縮少セシヨリ生產率俄カニ遞減シ奉公人、百姓ノ貧シキ輩ハ綿布ヲ需メ難ク紙衣裝ヲ着用スルニ至レリトカ、有司之レヲ憂ヒ乾隆十八年（紀元二四一三）耕作地ノ制限指定ヲ解キ無役ノ二才、百姓ニ自由耕作ヲ許セリト傳フ。

伊野田の里

大濱村役場ヨリ東行スルコト大凡四里許リ沃土多シ、菊池八州氏開拓調査シ棟いぬまき、樟屬ノ造林並ニ柑橘ノ試殖ニ熱中ス謂ユル異草僻遠ノ地ニ生ジ琨玉交趾ノ海ニ產スルモノ果シテ然ルカ。

牧場

牧場ノ草創年代測ル可カラズ嘉靖年間、阿蘭陀（オランダ）船一隻漂着シタリ村人慰問トシテ牧牛五、六頭、米穀二、三石贈與トナス又船長其贈物ニ酬ユルタメ、犬雌雄二頭ヲ返禮セリ、是レ本島ニ犬族ヲ輸入シタル始ナリ。周歲山靑キ

ノ郷ナレバ牛馬ヲ放牧シタルベシ、逐次人口増進、生活ノ向上ニ伴隨シテ牧場ノ制度勃興セシ所以ナラン。現今ノ牧場ハ六、七十人ノ組合ヨリ成立ス牧人數ト稱セリ、新タニ加盟セント欲セバ金五圓乃至金二十圓ヲ出捐シテ自己所有ノ牛馬ヲ放飼セリ管守者ヲ牧役者ト云ヒ部下ニ牧番、夫佐ヲオク。

牧の祝

毎歳陰暦二月又ハ九月ニ「牧當リ」ノ祝ヒアリ壬丑ノ日ヲトセリ、曩牧場ノ牛馬ヲ一ケ所ニ聚メ、各々所有主ノ目印ヲ附ス、卽チ耳朶ヲ剪ル習風アリ、年中ニ於ケル増減ヲ計上シ別ニ牛馬ノ籍ヲ記帳セザルナリ。此日御酒（婦女ノ口腔ニテ米ヲ嚙ミ碎キテ造ル）ト牛一頭ヲ屠殺シ供饗ス其ノ景況極メテ奇且ツ快絶ナリ元來八重山列島ニ生息スル陸棲動物ハ克ク粗食ニ堪エヌ。牛疫、炭疽ノ發生流行ヲ知ラズ、耕農用トシテハ頗ル温順ナレド肉食用トシテハ佳美ナラザル也。

傳說の夷師加紀島

多數ノ血液ヲ混濁シテ形成サレタル石垣島ハ太平洋ノ孤島ニ僻在スルヲ以テ其ノ歴史、口碑、概ネ島國臭味ヲ帶ビ大陸トノ交陟太ダ少シ故ニ傳說ノ生ナルハ却ッテ趣味アリ古人曰ク山、島ニ據ッテ居ヲナスト誣言ニアラザル也。

巨人傳說

昔シ石垣島ノ中字「ウラタバル」ニ「オナチラ」ト云フ身材九尺、大力無雙ノ女傑棲メリ、彼女ノ麾下大凡三百人隷屬セリ。又タ平久保崎村ニ「カナアチ」トテ軀幹長大、丈ケ九尺、臼大ノ塊石ヲ毬ノ如ク弄ベリ猛威輝キ島ノ半バヲ管セリ。豪雄、女傑自ラ勇ニ誇リ怪力ニ慢心シ所領ヲ廣メント反目格鬪世情騷然タリ、良民爲メニ苦境ニ呻吟ス兩勇和親ヲ約シ富崎ヨリ平久保崎マデ石壁ヲ築キ、東西ニ分劃シ互ニ境界ヲ犯サズ、夫レヨリ稍々穩カナリシガ「カナハチ」武勇ニ傲リテ、女傑ニ對スル宿約ノ一片ノ反古紙トナシ全島ヲ掌握セント暗ニ挑戰ヲナセリ。女傑彼レノ罪ヲ聲シテ再ビ戎馬野ニ亘リ世情騷然タリ、時ニ「慶來度日城」ト呼ベル武士倏忽「カナハチ」ノ柳營ニ到リ、彼レニ尺參シテ射手タルヲ乞フ、然レドモ蔑侮シテ其ノ乞ヲ許サズ、剛强萬人ノ雄ト謂ッベキ武士、顏色ヲ和ラゲ怡々トシテ辭去セリ竟ニ敵ノ愛妾ト情ヲ交ヘテ動靜ヲ偵知シ、一日熟睡ヲ窺ヒ隱シ持チタル匕首ヲ扳キ胸部ヲ刺貫シテ殺戮セリ、元凶斃レ、疾風霹靂、甚雨一時ニ落チ萬里雲晴レ白日卒ニ現ズル如ク膝下ニ拜伏シテ恩寵ヲ希ヒ島内漸クニシテ紛局ヲ結ビ萬民モ驚眉ヲ開キタリ。

天然傳說（山ニ關スル傳說）

其の一

古昔石底丘（イシスクモリ）ニ「イシスク●オフムシャラ」ト云フ膂力無比身ノ丈ケ九尺、島民威武ニ悅服セリ、卯方二十丁ヲ離レ名倉灣ヲ抱擁シタル貝底丘（ミナスクモリ）ニ「フサキ●ガバネノ」居住ス身長八尺、弓術ニ巧妙ニシテ驕慢放肆人ヲ凌駕セリ、常ニ灣內ヲ航走スル船舶、ソノ居堡ニ表敬ノタメ、卸帆ノ禮式ヲ行フ、若シ式禮ヲ欠ケバ强弓ヲ曳キ絞リテ人命諸共覆沒シタリ、性質貪悍、石底丘ノ威名ヲ猜忌シテ掠奪セント苦肉ノ計略ヲ行ヒタリ各自對峙シテ決鬪戰ヲナス、貝底丘ノ「ガバネノ」牛革ノ弦ニ新ラシク矧イダル强矢ヲ番ヒ、滿月ノ如ク引絞リテ矢ヲ放ツニ弦音凄マジク空ニ響キテ飛ビ行キ「オフムラシヤ」ノ心ヲ串キ黑血迸リ腰ヨリ下ハ唐紅ニ染メ倒レ又妻女、夫ノ拙ナキ武運ニ歎キ號泣シ敵ノ意ニ從ハズ貞操ヲ守リ同及ニ斃レタリト云フ。

註　此附近一帶ノ地質構成ハ大古代層ニシテ片狀ヲナセル硅岩或ハ「アシオラリヤ」板岩露出セリ。（黑岩先生ニ據）

其の二

野底富士　丘ハ富士岩ヨリナリ海拔九百五十一呎ヲ算ス、土俗單ニ「マヘイ」ト稱ヘ山頂ハ巉岩ノ直立スルコト二百尺、嶄然頭角ヲ顯ハセリ、昔シ野底村ニ「マヘイ」ト云フ女子、天ニ上ラン事ヲ希望シ此山ニ入リテ還ラズ村民今尙ホ山容ノ婦人ニ類スルヲ說キ崇畏セリ。

島に行はるゝ慶事と凶事集

其の一（原文）

一、諸島、嶽々、二月たかへ（祈願ノ意）作物ノタメ。

註「たかへ」ハ土俗、古史及ビ古祝辭ニ因ツテ祭ル、

一、諸島、嶽々、十月たかへ、村中火用心ノタメ。

一、美崎、宮島、長崎、天川、糸數、名藏、崎枝、此七嶽每年上國役人、立願結願仕候、是ハ定納船貳艘、上下、海上安穩ノタメ。

一、地域（ヂスク）嶽、在番衆、代合ノ時、初而嶽ヲ、たかへ候而、勤被付候也。

附、御使ヲ以有之候節モ右同斷。

註　地域嶽ノ由來ハ沖繩本島ヨリ、神石（イシ）、飛ビ來リテ鎭座シ玉フトナリ、在番新任奉告祭ヲ神前ニ行ヘリ、其時地域「マカリ」ト名ツクル黑

色ノ陶器一個ヅヽ、諸役人ニ贈リタリト傳フ、舊記ニ曰ク、神石天降リ白霞無數ソノ上空ヲ翔リ去ラズト、地域又坤底也、

一、五月ニむたゆま祭、稲、粟、苅始ノ時、初トシテ其在所々々ノ嶽ヘ、祭、伯母、姉妹ヲ遣候也。

一、美崎崎幷權現所ヘ毎月朔日、十五日、在番、頭拜參仕候、是ハ首里天加那志、長久島中作物豊饒、上納船、上下安穩ノ爲。

一、美崎嶽ヘ毎月酉日、寅日、大阿母拜參仕候是モ右同斷。

其の二

一、正月元日、十五日、冬至、藏元在番、頭、諸役人、朝衣、八ッ卷御拜仕候、此時、規式酒、御物ト被下候也。

附、大阿母、藏元火の神たかへ有之候事。

一、三月三日、八月十五日、九、十月種子取。

此折目祝ヒ物、三月三日ニハ蓬餅、八月十五日ハ吹上餅、種子取ニハ飲物初ト申シテ、赤飯ヲ握リ、親類中送替シ候也。

一、三月物忌、是ハ稲、粟、虫付不申爲也。

一、四月物忌、是モ稲、粟、糠、虫付不申爲也。

註 大正六年九月末、夜盗蟲ノ一種Catephia Acronytoides Guen方言「スル、虫」大發生ス、芋然タル甘藷畑ヲ喰盡シ、慘狀筆紙難盡各字共同驅除ヲ施行シタリ、御嶽ニ祈願シ芭蕉葉又ハ蒲葵葉ニテ舟形ヲ作リ、四、五頭ノ害蟲ヲ乘セ海ニ放流ノ後、一同海濱砂上ニ足脚ヲ海ノ方ヘ伸ベ熟睡ノ態トナル暫時ニ、一人鶏鳴ヲ擬セバ一齊ニ驚起シテ結願トナシ奇ナル哉、

一、三月十五日ヨリ五月十五日迄、山留トシテ、木、草ヲ切不申候、又ハ女人、海邊ヘ不行、鳴物禁ジ、慎候是モ作物ノタメ也。

一、七、八月中己亥ニ節仕候、是ハ年迎トシテ家、内外掃除仕、家藏ノ辻改、芝(三味線草ヲ用ユ)ヲ結ヒ若水ヲ取浴申候也

註 黄昏ノ頃、家門ニテ爆竹三聲起ル、歳新ナリト云フ、男女節ノ變化物ヲ觀ル、墓守トテ郊外ニ出デ、己ガ墓所附近ヨリ一團ノ陰火飛上セバ凶兆ナリトテ慎ム、小兒等ハ樹ニ攀ツ上リテ展望セリ、(妖怪ハ壽老人ニ似テ山羊ヲ牽キキタル)

一、稲、種子蒔入候日ヨリ六十一日ニ「そうり」ト申シテ田植始仕候、此時二日ノ間、草木切、諸細工、稲舂、船等忌申也。

註 粳蒔ノ日ヨリ一週間ニ、七日、水トテ苗代田ヲ換水ス、四十九日、六十一日、七十三日ニ挿秧スレド六十一日ヲ最好時季トナセリ、天ニ旱霖アリ此ノ期ヲ失スレバ、稲作不能ナラズト雖モ收獲不良ニ陷ルト云フ、粳播キハ陰暦十一月乙未ノ日ヲ擇ブ種子蒔キテ濃厚ナルヲ

「ニガサ」或ハ「カタサ」ト呼ブ淡ク薄キヲ「アマサ」又ハ「ピツサ」トテ忌ミ嫌フ是等ハ「カンミカイ」即チ神醫ナリト考エ「ユウドリ」トテ神爵宥恕ノ祈願ヲナセリ、種子ヲ下ロシタル日ヨリ一週間禽類ヲ殺生セズ、蛇味線彈奏セザル也、夕「ヨンゲ」ノ祝儀アリ男歌謡スルモ女舞踊セズ靜肅ニ愼ムナリ、

其の三

産室の事

孩兒、産生シ呱々ノ聲ヲ上グルヤ、母裙袴ニ包ミ、則チ初湯ニ浴サセ、額ニ鍋炭粉ヲ附ケ、産室ニハ七五三繩ヲ張リ、戸口ニ古草履（一本草鞋）ヲ提ク、蓐婦ニハ大湯トテ、米少量ヲ新ラシキ鍋ニテ粥ヲ煮、一粒ヲモ殘サズ、食セシメ、淨メ事アリ。薪木ハ樫木ヲ燃燒シテ産室ヲ温ム（昔日ハ産婦ニ投藥セズ）、四日間他ノ出入ヲ禁ジ四日ノ朝戸開キトテ干章魚ヲ削リ「スナノメイ」（方言、藥ノ一種、又ハ、ハンダマ）ノ葉根佳良ナルモノ三本ヲ撰ビ湯引トナス、御飯ヲ供フ、産室ノ愼ミ相晴レ候、其後庚ノ吉日ニ海下（宏大見物）ヲナス、男兒ハ東ニ差シタル桑ノ一枝ニテ弓、矢、刀ヲ作リ女兒ハ「ヱビラ」「カンシナ」（頭上ニ乘セ物ヲ搬ブ時、用ユ）ヲ持タセ海濱ニ出ヅ、小石一箇ヲ拾ヒテ歸宅ス、後チ蓐婦ノ前日ニ當ル庚ノ日ヲ撰ビ孩兒ノ初髮ヲ剃ル、尤モ此日蓐婦ハ割物（果物）ヲ食セズト云フ。

附、兒生レテ五日目ニ其兒ノタメ、九日目ニ蓐婦ノ爲メ愼ミ事アリ。

註「ヒヤアタ」附ノ傳說、古昔孝行人某ナルモノ一夜山中ニテ歉雷閃電、豪雨ニ遇ヒ鬱蒼ナル大樹傘ノ如ケン根株ニ雨宿セリ、樹上ニ聲ヲ聞ク、今夜某家ニ嬰兒生ル捕獲シテ食フベシ、一聲亦起ル、兒ノ額ニ「ヒヤアク」附レバ毒手鋭爪ヲ恣ニスルコト能ハズト某驚キ雨ヲ衝イテ歸レバ豈ニ圖ランヤ妻女將サニ分娩セントスルノ時ナリト云フ、從是習風大ニ弘マル、産室ニ猫ヲ忌ム也、

夜中兒ヲ背負ヒ、他出ノトキ額ニ黑點（ヒヤアク）ヲ附セリ、

産室ニテ火ヲ焚クハ沖繩ト臺灣生蕃ノ「パイワン」族トノミ聞ケリ、パイワン族ノ先祖ハ沖繩ヨリ到來セシト傳ヘリ、

其の四

命名式の事

兒生レテ四日、若クハ一週日ニ命名式アリ、高祖母、祖母、舅母相會集シ兒ノ發育佳良、無病息災ヲ祈願ス、系脉相續キ繁榮ヲ祝セシタメ、長男ニハ直系祖父ノ童名、長女ハ直系祖母ノ童名、次男ハ傍系祖父ノ童名、次女ハ傍系祖母ノ童名ヲ襲名シ是ノ如ク展轉、祖先ヲ追遠スルニ至レリ。（此ノ式典ニ男參會セズ）

覺　（光緒年間ニ行ハレタル、出生届ナリ）

光緒何年何月何日爲本室所生　何男　何名

右何氏何名、名乗何々、系圖ニ仕次候樣仰付可被下候以上

何　月　　何氏　何　某名乗

右通相違無御座候以上

何　月　　一門　何　某

親類　何　某

隣所與　何　某

右通相違無御座候以上

何　月　　居村　兩役人

其の五

誕生日祝

此日六親九族(男ヲ除ク)ヲ招待シ祝宴ヲ開ク、先ヅ宗祖ノ靈牌ニ告ゲ擁護ヲ祈レリ。室内ハ裝飾ヲ盛ンニナス、軸物ハ山水、鯉魚ノ幅、常綠樹ヲ活花トシ、供物ハ花米壹重、五水(酒)壹對。盃ハ色ノ玉トテ白色ヲ忌ム、男兒ニハ鏡餅(ガンカモチ)三ツ重、書籍、硯、算盤、蛇味線、琴、大鼓、笛等。女兒ニハ鏡餅三ツ重、機業道具、紡車、蟠車、籠等ヲ座中ニ列ベテ周歲兒ニ試周ヲナス、取物ヲ觀テ將來ノ目的立志トヲ豫知スルト云フ。十三歲ノ誕生日ヲ生年トテ祝フ四十九歲、六十一歲、七十三歲、八十三歲(米壽又ハ槃ノ祝ヒ(トカク))九十三歲ヲ風車ノ祝ヲ行フ也。

其の六

元服の事

男十五歲ニ達スレバ福祿壽ノ人ヲ烏帽子親トナス、吉日ヲ撰ビソノ家ニテ祝言ス。

但シ烏帽子親ハ五水、御花米ヲ贈進シ兒家ニテハ親類知己ヲ招キ祝宴ノ事アリ。

其の七

婚禮の事

昔ヨリ許嫁ノ習熾ンニ行ハレタリト聞ク、先ヅ嫁娶ノ約束相整フ、婿方(ムコヅカ)ヨリ媒介人トシテ福祿壽ノ仁ニ依賴シ結納酒ヲ贈ル、又黃道吉日ハ何月何日ト確約ノ上、案内酒ヲ送レリ。當日ハ媒人規式酒ヲ携ヘ嫁(アイヅマ)ヲ迎フ、嫁方ヨリハ嫁引トシテ果報ヨキ人、土產酒ヲ持參シ、婿入リノ式ヲ擧グ、嫁方ハ媒介酒、案内酒ノ送與ヲ受ケタル

トキハ近親之レヲ納メ婚禮ノ日親類相揃ヒ媒介人及ビ其他古實式禮ヲ定メ、又兩親膝下ニテ娘ヲ誡メ盃ヲ献酬シテ夫家ニ適ク。（時刻ハ午後十時頃）

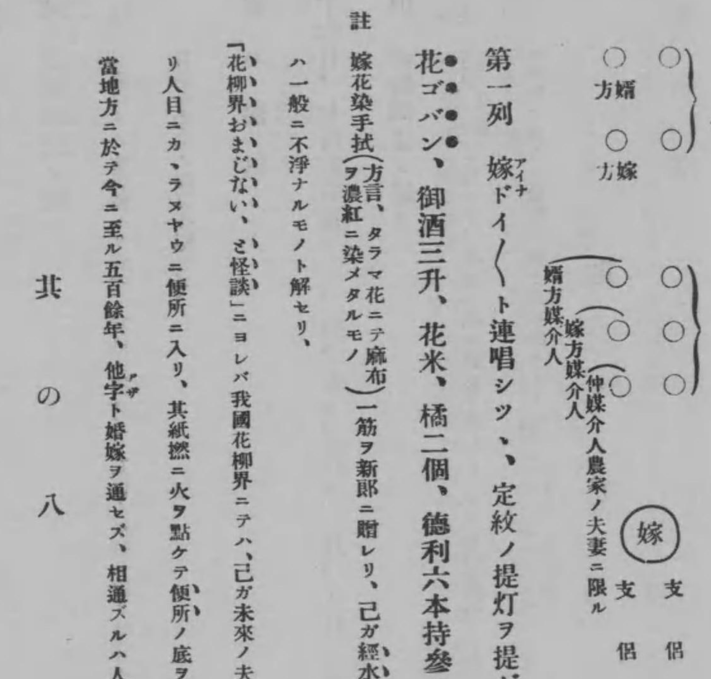
註　婿親儀ノ當日、嫁方ニテ父母ト相見エ親言ノ宴ニ列シ、祖先ノ靈牌ニ香ヲ薫シテ九拜ス、後サ臺所ナル竈ニ燒香セリ、火焔灼々濛燻シテ眼ヲ朧ラシト云フ終リテ歸宅ス、蓋シ婦ヲ娶ルニ昏時ヲ以スルハ陽往キ陰來ルノ義カ、

婿方ニアリテハ正門柱ニ祥瑞ノ聯句ヲ赤紙ニ書シ貼付シ、夜ハ松明ヲ二ケ所ニ焚ク、嫁門ニ到ルヤ爆聲三タビ起リ嫁玄關ニ近ケバ「サカムカイ」人之ヲ迎ヘ、婿ノ母、嫁ノ手ヲ執リテ座ニ導ク、座ノ願事アリテ「花ゴバン」ヲ聞キ舅、姑、兄弟、親類ト盃ヲ献酬シテ儀式全ク畢ル。嫁ノ盛服ハ下着、赤色「イツスデナ」白無垢「ロンテウ」黑裙（クロカカン）袴ヲ用ヒタリ。

註　女嫁シテ三日豆腐ヲ自製シ生家ニ往キ、父母ニ食ヲ餉ル新付振舞（シンツキフルマヒ）ト名ツク、又女ノ朋友等日ニ三食ヲ送リテ慰藉セリ、婚禮ノ御祝儀ニハ針七本、丁子、洗ヒ粉ノ三品ヲ送贈セシト云ヘリ、

婚儀（嫁入）行列

第一列　第二列



第一列　嫁（アイナ）ドイ〳〵ト連唱シツヽ、定紋ノ提灯ヲ提ゲ、途中持手ヲ交ヒ火ノ滅スルヲ忌ム。仲媒人ハ花ゴバン、御酒三升、花米、橘二個、德利六本持參ス。

註　嫁花染手拭（方言、タラマ花ニテ麻布ヲ濃紅ニ染メタルモノ）一筋ヲ新郎ニ贈レリ、已ガ經水ニテ染メタルモノニシテ春季發動期ヲ暗示ス甚ダ理由アリ、經水ハ一般ニ不淨ナルモノト解セリ、

「花柳界おまじない、と怪談」ニヨレバ我國花柳界ニテハ、已ガ未來ノ夫ヲ前知スル法トシテ、月經ニ使用シタルモノニテ紙燃ヲ八十本作リ人目ニカヽラヌヤウニ便所ニ入リ、其紙燃ニ火ヲ點ケテ便所ノ底ヲ注視スレバ、未來ニテ夫タルベキ人ノ顏ヲ見ルヲ得ベシト云フ當地方ニ於テ今ニ至ル五百餘年、他字（ドザ）ト婚嫁ヲ通セズ、相通ズルハ人情ノ最モ之レヲ醜トナシ唾罵ス、故ヘナキ也、

其の八

葬禮の事

死者ヲ行水シ白衣裳ニ改メ西枕ニシ供物ヲ備ヒ祭ヲ爲シテ棺ニ收ム、子孫近親棺側ニ通夜ス、日ヲ撰ミ葬禮ヲ

行ヒ後チ墓前祭ナス累七齊ヲ終リナバ蛤ヲ美ニシ、米少量ノ糊ヲ煮其汁幷ニ和物、肉ノ干物、神酒、少々食ヒ初メ皆別レ申候也。

但シ禮格御法ノ通リ

註　五歳以下ノ幼兒死セリ葬式ニ僧侶ヲ招カズ、五色ノ紙幣ヲ飾リ營葬ス、父母其他ヲ埋葬セハ追薦供養ノタメ、墓側ニ小屋ヲ作リ、七七日忌中念佛ノ鐘日夜絶エズ、

先祖の佛事

正月十六日、七月盂蘭盆十三、四、五ノ三日。二月、八月ノ紙燒、十三年忌マデ弔フ事。

但シ禮格御法ノ通リ

註　白道（大谷文庫）ニ曰ヘリ、紙燒ハ紙ニ錢形ヲ印シタルモノ香香爐内ニテ燃ク、宣鬼ノ用ユル錢ナリ唐ノ玄宗ノ時詞祭主王嶼ガ詞禱ヲ行フ毎ニ紙錢ヲ焚キテ福佑ヲ祈リシニ始マルト云フ、（今ヲ去ルコト千六百年以前）

其の九

洗骨の事

埋葬後三年又ハ五年ヲ經ナバ子孫墓前ニ假屋ヲ造リ、慟哭シツヽ納棺ヲ移セリ、死體ヲ清潔ナル水ニテ洗ヒ骨ヲ紙ニテ拭ヒ厨子甕ニ納骨ス、僧侶ノ讀經ナク三世相家ニヨリテ式ヲ行ヒ、土公ヲ祭ル其供物ハ燈明一對、御酒一對、甘蔗二飾、餅二飾、生魚一籠、豚肉一切、雄鷄一羽、九年母二飾、御茶湯一對、御香、貝ノ類一鉢、（但シ一色）塩一包、ワラ唐紙拾枚（分形打付）御盃膳組ニテ一對（御汁、菜、御食いり物色々盛）等ナリト云フ。

其の十

諸惡病除ケ

ユウトウ、バアレー。アンガリ。バアレー。ヲ三タビ唱ヒツヽ、鐘、太鼓、銅鑼ヲ搏チ又「トヒラノギ」「ダデフ」（方言）ニテ柝トシ擊ツ惡病ヲ退散セシム、村道ノ辻街並ニ家門ニハ七五三繩（チヒナーツナ）ヲ張リ、牛血ヲ藁ニ浸タシフ「シマフサラサアー」（牛骨）蒜根ヲ結ビ繩ノ中央ニ懸垂ス、以テ流行病ヲ豫防ノ呪符トセリ。

註　七五三繩（チヒナアーツナ）ノ由來　字登野城小字天川原ニ御嶽建テリ古イ海波ソノ原頭ヲ打ツ、日々釣魚ノ樂ミナシ人多シトカ、某老人一日岸岩ニ跼シテ糸ヲ垂ル、モ一魚ヲ獲ジ練達ノ老翁大ニ怪ミタリ、時偶々珍ラシキ船一艘淺礁ニ坐シテ動カズ、老人其ノ苦難ノ狀ニ同情シテ協力上陸ヲ容易ナラシム、仰ギ見ルニ一眼ノ魔神殘忍猛惡ノ相アリ、開口火焔ヲ吐キ曰ク我ハ人界ノ者ニアラズ八重山生靈ヲ剿滅センタメ來

冠セリ、汝ノ勞ニ謝ス依テ門柱ニ「チビナアー」繩ヲ引ケバ病覔回避スベシト影立ロニ消散シタリ、老人驚キ釣竿ヲ捨テ、歸リ親族朋厲ニ相傳シテ颶風ノ暴ノ如クニ猖獗シタル疫痢ノ災厄ヲ免ルヲ得タルニ起源スト傳フ。

ファア鳥(方言)夜中屋上ニ鳴聲ヲ聞ク。

「ナーマ、ヤード。エセイラ、ヤード」又「ナ1マ、ヤーノ。マリヒキドウ」ト唱ヒツ、臼ヲ敲キ三タビ唱ヒテ鳥ヲ追フ也。

火(ビエー)の玉(ダマ)

メジロ、ウ、バアレー。チヨイ、チヨイ」ト口誦シツ、颶籃、鐘ヲタ、キ追フ。

コイナア鳥(方言)

夜陰南方洋上ヨリ鳴キ渡ルアレハ世果報ノ吉兆トシテ松明ヲ焚イテ迎フルノ狀ヲナセリ。

諸鳥室内ニ入ル凶事トナス、陰陽家ニ就キ占フ。

其の十一

魂(ヤマシヒ)落(オト)シ

群童某所ニ遊ビ、不測ノ變ニ遇ヒ喫驚シ、夜俄然劇熱ヲ發シ顏貌削瘦、屢々夢中ニ起坐スルアリ、父母疹斷シテ魂落シト云フ、其場所ニ至リ魂付(タマシヒツ)ケトテ香、御酒ヲ捧ゲ、小石一個ヲ拾ヒ歸リ病兒ノ枕邊ニオケバ、熱減退シ神氣爽快トナリ病苦ヲ忘レ離床セリ。

魂迎ひ

遠地ニアリテ死去シ遺骨到着ス、先ヅ假埋葬ヲ營ムヤ海濱ニ於テ小石一個ヲ拾得シ納棺シテ其式ヲ行フナリ。

石縛(イシスバ)リ

足部ニ傷害ナクシテ、水腫レテ痛甚シケレバ是レ火ノ神ノ罰(火の神ヲ下足ニ掛)トナス、燧石(火の神ナラン)一箇ヲ拾ヒ嚴シク縛

繩シ樹枝ニ懸垂ス、平癒ノトキ其縛ヲ解クト云フ。

其の十二

夜半(ヤハン)詣(マイ)り

丑滿ノ頃御嶽ニ祈願ス、男子ノミ之レヲ行フト云フ。

籠(コモ)り

祈願ノトキ女群、一日一夜御嶽ニ參籠スト云フ。

栲の水

隣家ニテ或物ヲ遺失シタリ、近隣ノ家族ト寺ニ至リ栲ノ水一杯ヲ嚥下シテ慊疑ヲ解ケリト云フ。

御嶽の奥殿

大鳥毛ノ如キ蒲葵ノ下ニ石ヲ祀ル奥殿ト稱ス、大阿母並ニ女人ノ外、出入ヲ禁ズト云フ。

神鳴除け

雷雨ノトキハ絨口シテ皓齒ヲ露サズ又タ桑製ノ梭ヲ簷ノ一角ニ差シテ避クト云フ。那覇ハ「桑ノ叉植テアル」ト唱フ也。

地震除け

地强ク震フヤ「キヨウ、ツカ〳〵」ト唱ヘ桑樹ノ根株ニ避クト云フ。那覇ハ「キヨウツカ〳〵」ト誦セリ。

火斷塩斷

宗教信仰上、天神地祇ニ祈願スルモ鳥獸魚肉ヲ禁忌セザルナリ。唯ダ與那國島ニ於テ「ドリムヌ祭」獨リ異彩ヲ放

テリ。

其の十三

泰山石敢當

石ニ刻シテ標立ス、玉匣記廣集ニヨレバ高サ四尺八寸、濶サ一尺二寸、厚サ四寸、埋入土八寸也。冬至ノ日ニ鑿スルヲ吉トナス、丙辰、戊辰、庚辰、壬辰、甲寅、丙寅、戊寅、庚寅、壬寅ノ十二日ヲ成就日トセリ。除夜ニ生肉三片ヲ供ヘ祭祀スト。輟耕錄其文ニ曰ク、今人家正門適當ニ巷陌橋道之衝ニ立ニ一小石將軍ニ或植ニ一小石碑ニ鐫ニ其上ニ曰ニ石敢當ニ云云。（羽州、秋田市内ニ石敢當存在シト大正四年一月中央氣象臺長理學博士中村先生ヨリ拜聽セリ）西遊記ニ言ヘリ、昔シ京、高辻天滿宮ノ社前ニアリシト。

焚字爐

道光十八年（紀元二四九八）十月十六日御使林大人、民情視察、琉球國ニ渡航サル街頭路上ニ散亂投棄スル字紙（文字ヲ認メアル紙片）夥多シク敢テ拾集セザルハ德教ノ萎靡退嬰シテ敬惜ノ念乏シキニ依ルベシト歎ゼラレ惜字ノ勸諭アリ、其原文ノマヽヲ記スルニ前略兎角字紙ノ内ニハ聖賢々傳ノ文字亦ハ日用肝要ナル書記モ段々有之ベシ、是ヲ取散シ候

テハ寔ニ大ナル不敬ナリ、不敬ノ罪ハ神怒ニ及ブヨシ古ヘノ人字紙麁相ニイタシ、癩病ヲ煩ヒ、或目瞽ト成リシ例モ有之候下略苟クモ文字ヲ認メタル大小ノ紙片ハ盡ク爐中ニ拾集シテ燒化シ後チ之レヲ海河ニ放流ス決シテ疎略ナク取扱フ可シ該爐捐建スル料銀三十兩ヲ寄進サレヌ。因テ三司官之レヲ各在番ニ周知セシガ如シ。

達ニ曰ク

一、焚字爐ノ儀學校ハ勿論寺院其外所々番所等ニ各一爐宛仕立可置事（添付ノ圖面ヲ欠ク）

一、字紙速ニ燒收、灰モ麁相不仕、半手亦ハ一手後取出包候而海中可收入事

一、焚字爐損壞有之節者萬々修匍可致事

註　渓人ハ敬字亭、一ニ惜字亭、又ハ敬聖亭ト云フ是レ儒學的德教ノ感化ヲ享ケタルコトノ久シキ結果、自ラ尙文崇字ノ俗ヲナセル所以カ。

其の十四

家屋構成法

家屋建築設計ハ一定ノ制裁アリ瓦葺建ハ假屋（元藏）、寺院等ト局限セリ槻木ハ禁止シテ民衆ニ伐採使用ヲ許サズ。

建坪數ハ家屋ノ大小ニヨラズ、六間（母家）、別ニ臺所一棟ヲ增築セリ、雖然逐次儉素ノ美風亡ビ驕者ニ流レ、禁ヲ破リテ瓦葺建トナシ、剩サヘ槻木ヲ亂伐濫用スルニ至レリ。廢藩置縣、積弱ノ空氣、全島ニ漂ヒ、人心動搖シ二千浬ノ波濤ヲ隔ツル島嶼ニテハ風聲鶴唳ニ驚カサレ、瓦葺建ハ課稅高率ナリトテ急遽瓦ヲ草葺ニ改メ甚シキハ屋上ニ屋ヲ加ヘ、瓦ヲ覆蔽センガタメニ草ヲ其上ニ葺キテ自他ヲ欺キ得意タリトカ。

建築法の慣習特色。

新築小屋組ノトキ、棟木ニ天官賜福紫微盞駕ト書シ、棟支持杜（ウダヂバラー柱立）二丁ノ右柱ニ「霜柱貫氷雪桁」左柱ニ「雨棟玉露葺草」、若シ瓦葺建ノトキ「玉露葺草」ヲ「潤土葺瓦」ト淸書ス。上棟式ニ塩一包、蒜根一顆ヲ棟ニ垂ル、中柱礎石ノ下ニ土公神ヲ祭祀ノタメ、蛤、蟹、生卵、反物（スノヤル代用白紙）苧麻（スチヤル）、「クバン」（牛肉蘆）摺米（ミンヤク）、御酒、鐵類（カヂヤル）ヲ供ヘ土中ニ埋メ、除災求福ノ祓トナスト。

家根葺キ終レバ農家ヨリ福祿壽ノモノ二人ヲ招聘シ「よいぴど」（四尺程ノ棒ヲ草茅ニテ包ミ繩ニテ堅ク縛シタルモノ也）ヲ捧持サセ家根裏ニ刺シ祝言ノ始マルヤ「よいぴど」ヲ壇上ニ移置ス式無事終了スレバ再ビ家根裏ニ納ム。

甲「アアラヤ、ノゴシ。　甲「オエサ、ナアラ。

乙「ウウ。　乙「トウラレ、ルンユ。

甲「ワヌ、オイショウナラ。　乙「バヌン、トウラレ、ルンエ。

甲、乙兩人左ノ歌ヲ高誦シツ舞フ

アアラヤノ、ヨイ〳〵。カアラヤノ、ヨイ〳〵。

ヨイピト、ミーレ。　バヌム、ミーレ。　スツトイ、スツトイ。

佛壇の設計及び前石垣（マイクスク）。

佛壇ハ二番座ニ設ク、眞直門ニ面シ其正面ニ恰モ屋外衝立ノ如クニ立ツ者ヲ前石垣。磚ヲ疊ミ外面ニ靭土ヲ塗リテ壁ヲナセルヲ「ピーフン」竹或ハ木垣ヲ「マイマージ」ト云フ。

註　前石垣ハ我國神社ノ古式ニ見ラル、蕃垣ト同ジキカ將タ渼人ノ照牆即チ辟邪ノ厭勝タル意義ヲ有スルガ姑ラク後日ノ研究ニ待タン耳。

鑿　井　其　他。

飲料水ハ雨水ヲ用ユ、井水ハ鹹苦ナレバナリ。井戸掘鑿ノ際土公君、水公君ノ兩神ニ御香一結、御活花一對、御燈明一對、御茶湯一對、洗美花（洗米）一對、御茶之粉（鏡餅）一對、御酒一對、御花米一籠（ロウ）、百田紙一帖、鉛十斤、扇子一本、白糖一鉢、九年母二篣、豚肉一切、狄（甘蔗）二篣、鷄一羽、蛯二甲、蛤一鉢、魚一尾、重盆一通、小刀一乃ヲ供ヘ祀ル。厠（フロ）（養豚ニ兼用ス）塋域造築ニハ甘蔗、團子、御花米、御酒、御香ノ種々ヲ設ケ祟神ス。

祈　禱　符（板札）

正門ニ　　魁魁魓魒魓魖魕帝。　　門釘桃符嗈々如律令。

同　　七難卽滅七福卽生。　　應無所住而生其心。

宅地構内ノ四隅ニハ左符アリ。

東隅ニ、　東方持國天王。　　西隅ニ、　西方廣目天王。

南隅ニ、　南方增長天王。　　北隅ニ、　北方多聞天王。

厠、墓所ノ符呪ハ略ス

註　墓所ニ、指さゝじ、人ニ指敎スル時、拇指ヲ用ユ、食指ヲ誤用セバ其ノ指ヲ嚙ミ、三度左ニ回ルト云フ。

其の十五

發　火　の　法

火ハ人類ノ地球上ニ出現シテ、久シキ後ニ發見サレタルモノナラン。當地住民初メテ炊、煮ヲ辨別スルヤ樹ト

幹ヲ六、七寸ノ長サニ伐リ摩擦シ火焔ヲ燃シクリト遺風尙ホ存ス。

其の十六

先島列嶼ハ熱帶性颱風頻リニ襲フ。故ニ諸般ノ建築物ニ對シ專ラ風難、雨難ヲ避ケン爲ニ柱梁ノ構造、按配ニ留意セリ。加之、家白蟻(イエシロアリ)加害劇烈ナレバ材料撰擇、殊ニ數月間海水ニ浸漬シテ蟻害輕減ノ一良法トナセリ、建築工事中ハ白蟻談ヲ忌ムガ如シ、然レドモ風土、多濕、高熱、涙菌併發シ易ク、木材腐朽ノ源因ヲ沮止シガタク當地方ニ五、六十年代ヲ經タル建築家屋ナク、記錄古文書ヲ藏スルコト絕對ニ不可能ナリ畏ル可キカナ。

白蟻の分類學的研究。

當島ニテ發見採集シタル白蟻類ヲ岐阜市名和昆蟲研究所長名和靖先生ニ呈シ檢定ヲ得タルモノヲ揭グルニ左ノ如シ。

一、(コウシボン、シロアリ) Coshunnensis(Neoternes) Koshunnensis, n. sp. 琉球、石垣島、臺灣。

二、(サツマトシロアリ) Satsumaensis(Glyptotermes) Satsumaensis, n. sp. 九州、臺灣、石垣島糸數原。

三、(カタンシロアリ) Hozawae(Glyptotermes) Hozawae, n. sp. 小笠原島、琉球、石垣島、臺灣。

四、(ダイコクシロアリ) Formosae(Cryptotermes) Formosae, n. sp. 同上。

五、(ヤマトシロアリ) Eperatus(Kolbe) 北海道、本州、四國、九州、琉球、石垣島、臺灣。

六、(イヘボシロアリ) Coptotermes formosae Holmgren. 本州、八丈島、四國、九州、琉球、石垣島、臺灣。

七、(ニトベシロアリ) Capritermes Sulcatus, n. sp. 石垣島、臺灣。

八、(タイワンシロアリ) Odontotermes formosanus, n. sp. 琉球、石垣島、臺灣、支那、暹羅。

九、(タカサゴシロアリ) Eutermes(Eutermes) Piciceps, n. sp. 琉球、石垣島、臺灣、クリスマス島。

學者ノ發表シタル日本產白蟻ハ十二種ナルガ其中九種本島ニ產セリ、各々生活狀態並ニ蝕害作用ヲ異ニシ完全ナル防蟻法ヲ講ズルハ至難ナリ、唯ダ眞ニ恐ルベキ種類ニ對シテハ極力驅除豫防ノ方法ニ腐心ヲ要スベキナリ

石垣島ハ白蟻棲息島トシテ世ニ喧傳セラル、名和先生曾テ島ニ新爾附セラレ白蟻島ト言、簡ナリト雖モ至言ト謂ツ可キカ。

註　白蟻群飛期ハ例歲殆ンド日ヲ同ジウセリ、五月下旬風力概ネ微弱ノ時、夜陰ニ乘ジテ趨光飛來セリ、約二時間持續シテ止ム。彼族ノ移轉之レヲ新婚旅行ナリト敎ラル。

雨乞ひ祭。

州南諸島原來水ニ乏シク雨水ヲ潴留シテ飲料トナス。農界ニハ五風十雨ヲ歌ヒ、單ラ天惠ノ搖籃ニ眠リ爲之、人情時ニ激變シテ反覆定マラズ、剛强雄邁ノ性格ナシ、故ニ產業多種多樣ナラザル也。寄語ス、北方文明ノ積極的タルニ反シ南方文明ノ消極的ナル所以カ。左ニ雨乞ヒノ歌詞ヲ錄セン寧ロ哀調ナルモ簡淨素撲ノ點ニ於テ雄篇タルベキモノナラン。

雨乞の調

第一　前山(バンナ山)ニ水ヲ酌ム時

一、シキモト、拜ムンユウ。　囃子。イーヤー、アーミ、イーユウダボラ、ラウリ。
一、水モト、拜ムンユウ。　水源ノ神樣ニ。川ノ神樣ニ。
一、スバ川ニ、拜ムンユウ。　拜ミ白シ。
一、雨フシヤヌ、ナラヌユウ。　雨ノ欲キ事ヨ。
一、水フシヤヌ、ナラヌユウ。　水ノ欲キ事ヨ。
一、雨サアリド、育ツアリユウ。
一、水サアリド、育ツアリユウ。　雨ガ降ラネバ、水ガ無ケレバ衆生ハ育ツ事ナラヌ。
一、アンバシイ、ナラヌユウ。　斯樣ナ苦シキコトヨ。
一、クリバシイ、ナラヌユウ。　堪エラレヌ辛キ事ヨ。
一、家ノミイカヅ、出テ立チ。　家々、軒々ノ者。
一、キブリノミイカヅ、出テ立チ。　總出ニ出テ。
一、願フタコト、アラシタボウリ。　合掌シテ願ヒ白シ。
一、手ツル事、アラシタボウリ。　事ヲ叶ハサレヨ。

第二　南ナアラ　御嶽ニテ捧グ

一、ハイナアラヨ、島カラ世バナウライス。　南ノ國ニ在ス、豐年ノ神ヨ。

一、黒ミヤア、カラウオル雨。
一、青ミヤア、カラオウル雨。

黒イ雲ノ上、青イ空ノ彼方ニ在ス神ヨ。

一、メウド雨、ウチグ雨。

白雨ノ男神、春雨ノ女神ヨ。

一、雨ノフンカラ、オウル雨。

雨ノ國ニ在ス神ヨ。

一、風ノフンカラ、オウル雨。

風ノ國ニ在ス神ヨ。

一、我島(ペカシマ)ノ上カイン、オウリ給リ。
一、親島(ウヤシマ)ノ上カイン、オウリ給リ。

八重山ノ上、大石垣主(ウフイシヤキアルシ)、島ノ上ニ來リ御慈悲ヲ垂(タレ)マセ。

水撒の時

第三

一、クバント、イヤナシ。

囃子「ハアリショウ、ガナシ。

一、イヤナシド、水主(ミヅヌシ)。

久場本(ハモトノ)御嶽、イヤナシ御嶽。

一、タンデトウド、モウシン神。

イヤナシノ。マウシン神ノ水ノ主ヨ。

一、ガアラトウド、タルフワイ。

タルフワイ神ハ。大石垣ノ主ヨ。

一、大石垣(ウフイシヤキ)タルフワイ。

モウシン神、タルフワイ神ニ願ヒ白シ。

一、雨フシヤヌナラヌ。

雨欲シクテ。

一、水フシヤヌナラヌ。

水欲シクテ叶ハヌ。

一、雨サアリド、育ツアリ。

雨ガ降ナケレバ。

一、水サアリド、育ツアリ。

水ガ無ケレバ育チナラヌ。

一、ニカノ夜(ユー)ノ明ケルケ。

今日ノ夜ノ明ケルマデ。

一、ユサノ夜ノナミルケ。

ヨモスガラ。

一、ドウル、ドウル、ケ、給ラル。

沛然降ッテ。

一、バリ、バリン滿シヨウリ。

谷々ノ田毎ニ。

一、マシマシン、ンツアシヨウリ。

溢レル程ニ。

註　大安毋、香ヲ炷キ御嶽ニ祈願ス、神域内ニテハ婦女皆ナ白衣ヲ着ケ、苧繩ノ鉢巻、帶、襷ヲナシ、「クロック」(桃榔)ノ葉柄ヲ持チ、大

蛍ノ周圍ヲ歌ヒツヽ、水ヲ潔シテ雨ヲ請フ、悲哀ノ調ナレド其性質ハ脅迫祈願ナリ。

前山（幡名山）頂ニ柴薪ヲ堆ク積ミ火ヲ焚キ雨ヲ祈レリ。

其の十八

石垣船の由來

古代竹富島ニ「島仲」トテ七歳、妹「アハレシ」五歳ノ兄妹共棲ス、一日「ホサキ」ニ遊ビタリ、時ニ三日月形ナル船ヲ、兄「シマナカ」拾ヒ之レニ模倣シテ船ヲ造ラントテ、日夜勞ニ服セリ、妹「アハレン」兄ニ食事ヲ餉リタルトキ兄、妹ニ言ヒケン「汝、黑白ヲ辨ツ歳比ナレバ此ノ新造船ニ命名セヨ」ト妹之ニ順從ヘテ神ヲ念ジケルニ託宣アリ「五包七包船ト名ゲラル、海上交通ニ資セヨト」兄大ニ欣喜シ、海ニ浮ベ磯ニテ魚介ヲ漁リ遊ブ折リ、一波來リテ沖ニ運ビ去ル、其不注意ヲ嘶チタリ、數月ノ後黑島ノ人船ニテ竹富ニ航セリ、島仲形狀ノ流失シタル船ニ似タルヤ驚キテ糺シタリ、彼答ヘラク過般漂着セシ船形ヲ則リ造船シタル始末ヲ知悉シテ竹富ニ「スラシヨ」ヲ建テ後世石垣ニ造船所ヲ移サレタリト云フ。

註　造船ノ祝。船材ハ「フネノイタ」ト云ヒ、山ニテ伐採運搬ノ際ハ農家ノ夫婦音頭ヲ執リ、夫ハ枕椰ヲ鉢卷ニ頂キ囃ヤセリ、船材過重、搬出困難ナレバ勢子、人夫）ハ白米ヲ路上ニ撒布シテ率ク、奉公人（士族）山海ノ珍味美酒ヲ馳走ス、進水式擧行ノ場所ハ石垣「フノウラ」ト定メタリトカ。

其の十九

暦法

四季ノ感情ハ深ク天然ヲ直讀シテ眞旨ヲ悟リ、或ハ星辰ノ高度ヲ測知シ、深思熟慮シテ播種シ寸毫モ季ヲ誤ラズ乾隆三十七年（紀元二四三二）大和（ヤマト）暦始メテ頒布セラレタリト傳フ。

其の二十

風水法

乾隆三年（紀元二三八八）初メテ當島ニ傳來ス、陰陽家ノ說ニシテ墳墓ノ地ヲ相スル迷信也。家運ノ隆替存亡ヲ律スル者ト思フ、巫覡輩ハ愈々之ヲ神秘ニスルタメ、種々ノ神慮ヲ布衍シテ畏敬セシムルナリ。

島の春風萬花咲く

今ヤ歴史的傳來ノ琉球式精神タル、結髮ト長袖、大帶トノ變俗トナリタルモ女子ニハ及ボサズ、曾テ明治二十

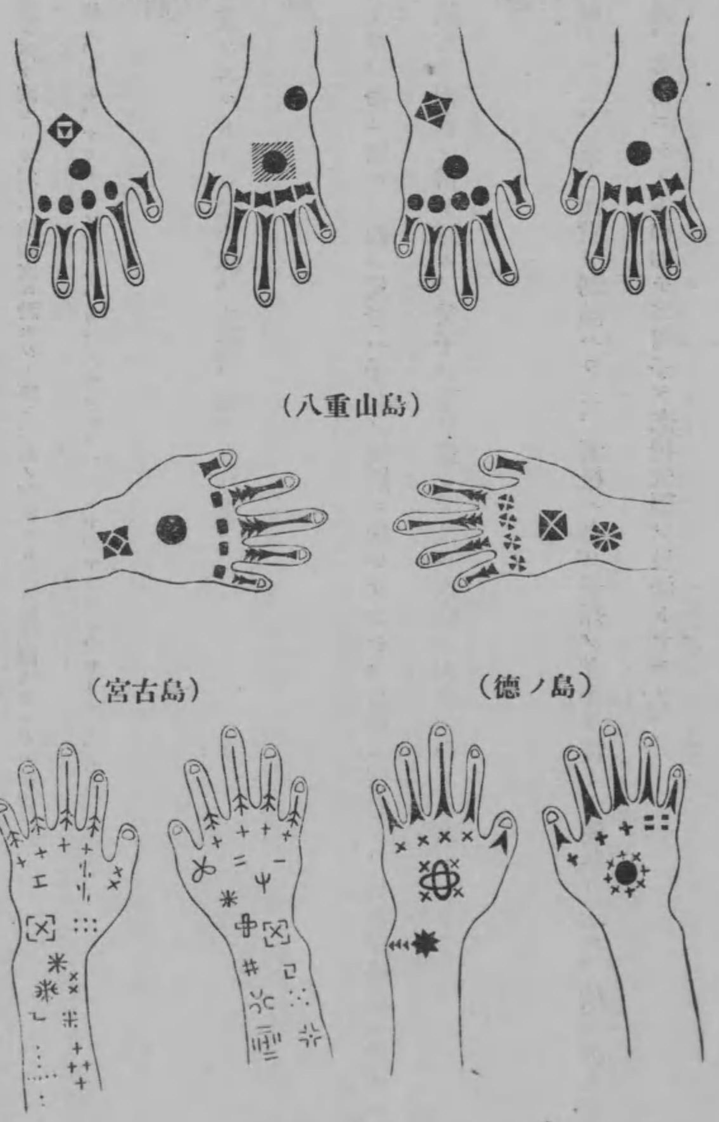
八年小學校兒童修學旅行シ竹富島ニ宿ス、夜將サニ三更、熟睡ヲ窺ヒテ敎師剪刀ヲ執リテ散髮ヲ決行セシヤ父兄沸騰、士族ノ體面ヲ凌辱セシモノトナス、兒童ヲシテ退學セシメノミナラズ行政機關ヲ停止スル三日ナリ。世運駸々乎タリ、同三十六年一月地租條例實施ヲ記念トナス、擧島散髮(六歳以下)トナレリ、然レドモ死者ハ固ヨリ論外ナルヲ以テ殯發入棺ノトキハ、琉族舊來ノ衣冠ヲ著セシメ其靈ヲ喧セシム、如斯ナラザレバ九泉ノ祖ニ見ユル能ハズトノ守節ナルベキカ。

入墨の俗

婦女ノ嫁娶ノ約確立スルノ日、婦禮ヲ尙ビ自然ノ姿ヲ損ヘドモ左右ノ手甲ニ黔シ、曲玉(カワラタマ)、管玉(クダタマ)ヲ佩キ身邊ノ粧飾トナス、浮華虛榮ハ婦女子ノ常習ナレバ曲玉二十五顆ト米穀四石交易セリ、琉球藩ハ康熙三十二年(紀元三五二)五月禁止令ヲ布キタリト云フ。「南洋チムール島ニ佩玉習風現存ス」。明治三十年頃入墨ヲ嚴禁セシ以來遂ニソノ跡ヲ絕チタリ。

註　入墨ノ傳說、何某二、三名歸島ノ途上、一天墨ヲ流シ、狂風吹キ怒濤咆哮シテ木ノ葉ノ如ク一小舟ヲ掀飛ス、數日漂ヒツ、食人島ノ海岸ニ膠礁シ操縱ノ自由ヲ失フ、食人種ノ襲擊ヲ窺知スルモ、虎口ヲ躍脫スル脫ハズ恐怖錯愕卒倒セントス、偶々一婦人現ハレ船ニ衝動ヲ

型の墨入



與フルヤ離璃シテ洋上ニ浮ビ、航走速カニシテ災難ヲ免レタリ。婦人ハ鈴狀ノ笠ヲ戴キ其顏面ヲ鑑別シ得ザルモ、手甲ニ黔セシヤニ記臆セリ、生還ノ恩ヲ謝センガ爲、一般婦女ニ黔セシト傳フ。左ノ俚歌ハ入墨ト姉妹關係アルガ如シ。

沖繩ニテ、「船ヌ、トム、ナカイ、シルドヤ、カ、イチヨン、シルトヤ、ヤアラン、ウミナイ、ウシジ」。

德政の制

孝道ハ琉人ノ最モ重ンズルトコロ、愼終、追遠、祖先崇拜也。

婚姻の制

子女ノ婚姻ハ必ズ父母ノ命ニ由ル、而メ父母ハ子女ノ婚姻ニ後レザラシメン事ニ留意シ、男女早婚茲ニ於テカ起リ、伉儷ノ歡ヲ結ビテ兩親ノ情ヲ慰ム、父子ノ樂ヲ盡シ、是レ人倫ノ大經ニ合スル者トナセリ。

福祿壽

現時貯金ノ法未ダ精ナラズ、養老保險ノ制備ハラズ、老後ハ必ズ子孫ノ孝養ヲ恃ミテ晩年ヲ送ル、故ニ琉人祝禱ノ辭ハ多福、多祿、多壽ニシテ多福卽チ多男子ヲ老後安樂ノ良法トナセリ。

言語

土語ハ日常ノ通用語ナリシガ、藩政時代ハ兩屬政略上、大和口上(普通語會話篇)支那語(官話)ヲ修得セリ、廢藩ニ際シ專ラ普通語ノ普及ヲ圖リ、到ル處學校ヲ設ケ、大ニ努メタル結果著シク進歩セリ、然シナガラ土語ハ商用語タリ、普通語ハ官廳用語トシテ使用セラル故ニ、二語相俟ツテ初メテ諸般ノ事ヲ辨ズ可キ也。八重語ハ優美ナリ沖繩語中ノ白眉ニシテ、佛蘭西語ニ似タリト、伊波月城氏ノ談片

海の幸、陸の幸

氣候好適、綠蔭蓊薈相交リ冬ハ寒カラズ夏ハ酷ダ暑カラザルナリ。陸ハ土壤膏瑰(地質構成多種多樣)沃野千里、尙ホ未ダ鋤犂ヲ加ヘラレズ、惡雰毒氣天ニ滿チ、ハマダラ蚊族ノ鋭嘴人ヲシテ意氣沮喪セシメ赫灼タル日光ヲ浴ビ、沃土ヲ開墾スルノ壯志ナカラシム、更ニ生活ハ自然ノ狀態ニアリテ、生產ニ勞セズ自ラ足ル一般ノ產業勃起セザル素因ナルベキカ。

海ニ漁利饒多ナルニ水產業微々振ハズ、沿岸ニ木垣(タイラアク)(延長十間)ヲ樹立シ、ソノ上ニ座居シ四ツ手網ヲ用ユ、或ハ一本釣、投鎗、毒流シ(方言、魚草(イズクサ)ノ液汁)ノ類、漁撈法極メテ消極的也。蓋シ康熙四十一年(紀元二三六二)二月當島民ノ漁リヲ禁止セリ、以來海ニ對スル思想著シク萎縮シ民族ノ經濟的活動力減退シ、自給自足ニ甘ンジテ自然ノ開發利用ヲ怠リ

單ニ閑眠ヲ貪ルニ至リ、陸ニ親ミ海ヲ疎ンズル情緒萠起セル所以カ。當群島沿岸二、三浬以内ニ鰹魚ノ大群湧クアリ將タ浮魚ノ海中ニ黑線ヲ引クガ如キ狀ヲ見ル、況ンヤ鰹魚ハ年々彌リテ、全ク絶ユル事ナシ、鹹水漁業ニアリテハ潮汐ノ干滿以外ニ魚群ノ移動ヲ促ガスモノナク、又タ海流ノ影響少ナキヲ以テ漁獲ノ多寡ヲ左右スルハ專ラ天候、風雨ニシテ回遊魚ヲ除クノ外ハ殆ンド一定セリ。輓近八重山ニ於ケル水產家科學的ノ研究ニ歩武ヲ進メリ將來ノ斯業活目シテ可ナリ。

鹹水鮮魚ハ主邑及ビ附近ノ部落ニ供給スルノミ是レ氣溫高キタメ遠方ニ輸送スル能ハザルト、製造法行ハレザルニヨリ價格亦廉ナリ矣。

註　木垣（タイラアク）ハ脚柱式ニ、海中ニ突出シテ建立ス、是レ先住民水上生活ノ遺風ナルナランカ。

漂流船舶の史實

崇禎十二年（紀元二九九）八重山島、波照島ニ唐人二人漂着ス。

同　十三年（紀元三〇〇）西表島ニ南蠻船漂着ス。

順治　八年（紀元三一五）古見村内赤離ニ唐船漂着ス。

同　十七年（紀元三二〇）與那國島ニ阿蘭陀船漂着ス。

康熙廿四年（紀元三四五）屋良部崎ニ小唐船漂着ス。

同五十七年（紀元三七八）桴海ニ唐人漂着ス。

乾隆　四年（紀元三九九）奥州仙臺人漂着ス。

道光二十四年（紀元五〇四）八重山島ニ阿蘭陀船漂着ス。

咸豐　二年（紀元五一二）阿蘭陀船崎枝沖ニ泊シ、唐人三百八十人、阿蘭陀人一人ヲ上陸セシメ出帆セリ。

同治　元年（紀元五二二）米國帆船一艘漂着ス。

慶應　元年（紀元五二五）五月一日英國帆船一艘漂着ス。

明治　七年（紀元五三四）二月十六日堪北國（國名不詳）帆船一艘漂着ス。

同　十年（紀元五三七）五月一日マニラ帆船一艘漂着ス。

ひるぎの一葉附錄

與那國島ト波照間島及ビ光閣列島

概記

積水迢々、天ハ長ク海ハ濶シ浩蕩ノ波浪島ニ碎ケテ吼ユル黑潮ノ衝路ニ介立スル丘陵性島嶼、乃チ一ハ陸島ニシテ一ハ洋島ナルベシ。姿態雄々敷、亂濤ノ間ニ怯マズ、卓然ト立テル與那國島ハ恰モ勇婦巴女(トモエ)ノ臂ヲ振フテ奮鬪スルニ似タリ。島波照間ハ北東ニ西表、石垣ノ二大主島、其餘武ニ逼迫セラレ沈勇毅然、克ク心中ノ秘密ヲ守ル古武士ノ如ケン、孤タル尖閣列島ハ尖々頭角ヲ呈シ、氣骨稜々老仙ニ彷彿セリ、彼ノ確豪、是ノ壯快ニ接觸シ孰レモ床シキ古趣味ニ富ム、眞ニ好イ島、好キナ島。古人曰ク民性ハ風土ニ因ツテ變ズ民牧タルノ士心ヲ此ニ留メザル可カラズト。

與那國島

平家渡來ノ傳說

平家、壽永ノ秋ノ一葉ニ棹差シキタル萠黄緘、小櫻縅花ヤカニ鎧ヒタル武者又ハ綠ノ狩衣、香染ノ袴着ケタル眉目秀偉ナル若人等西海ノ波濤ニ漂ヒ浮沈ノ流ニ身ヲ寄セシモ哀レ也。字祖納(アサソナイ)ノ東方一里ニシテ「アダネバナ」ニ達シ「サンニノダイ」ノ高地ニ登リ容姿貴美ナル上蔦、秋ノ月影清キ夜、雲井ヲ渡ル雁ガ音ニ都ノ空ヲ偲バレテ人目ヲ耻ヂズ涙滂沱タリト云フ。天涯ニ孤客タルノ身轉タ望郷ノ念ニ堪ヘザルナラン、盛者必衰ノ夢ノ中、一逢ノ滴露涙タリ。

外敵鬼人傳說

時ニ潮氣ニ誘フテ氤氳タル蒼氣天然ニ靉靆タル、西域ノ獰猛、慓悍ナル蠻族屢々來寇シテ財寶ヲ掠メ殺戮シ且ツ婦女ヲ强奪セリ、邊彊ノ守備全カラズ住民日夜戰々兢々タリ。一老翁アリ多大ナル草鞋ヲ作リ海ニ投入、彼ノ敵地ニ漂流セシメ勁敵ヲ畏怖シタリ。爾後敵ノ口笛ヲ聞カズ島内平穩其堵ニ安ンズルニ至レリト。

註　此傳說老少ノ口耳ニ相傳ハラズ、古ヲ談ズルヲ好マザル類ニアラザルベシ、要ハ好事者ノ臆度タルベキカ。

「サカイ、ソバ」ノ物語

勇婦「サカイ、ソバ」ハ筋骨逞シク偉大ヲ凌過シ女俠ノ名喧シ。某日島ノ東岬(アカサキ)ニ一隻ノ船ヲ着ケ、屈强ノ壯男一

人上陸セリ。途ニ「ソバ」女ト遭遇シ女親ノ在否ヲ問ヒ、其ノ家ニ到リ慘殺ス勇婦聞イテ復讐セントテ追跡太ダ急ナリシガ敵纜ヲ解キ漠氣ニ沒シテ去レリト云フ。

島ノ發見

八重山列島西表村ニ自然ノ巨童慶田城用庶(クダシスタ)、童名石戸能(イシトノ)、成化十三年(紀元二三七)中山尙圓王、八年ニ生ル、身幹長大、精悍無雙ノ勇士ナリ、遺波嵩ノ森林中ニ居ヲ作リ住ム、日毎ニ狩獵、乘馬ヲ驅リ兵法ヲ自得セリ。一日天氣清明雲翳ナシ、山谷ヲ狩リ野猪ヲ逸シ谿間ヲ辿リ落葉ニ印セシ蹄跡ヲ追ヒツ、山頂ニ達ス、暫時岩石ニ憩ヒ右顧左眄遙カ洋中ヲ見渡セバ其前方ニ當リ、宛然瞳大ノ黑一點ヲ認メヌ、彼レ興ヲ催シ快心ノ笑ヲ禁ジ得ザリシガ家ニ歸リ直チニ猛士十數人ヲ引率シ船ヲ發セリ。暴濤ヲ蹴破、島ノ海角ニ上陸セントスルヤ蠻民武器ヲ鳴ラシ、石ヲ飛バシテ敵ヲ拒ミケレバ少時ハ近ヅク術モ知ラザリキ、石戸能勇ヲ皷シ挺身進擊シケレバ强暴ナル「トナウ」人面縛降伏ス、酋長二三人ノ俘虜ヲ得テ凱旋ノ飾トナシ中山王ニ護送セリ。正德五年(紀元二一七〇)勳功ヲ賞セラレ與那國與人ヲ拜命シ政務ヲ掌レリ。是レ同島ニ於ケル吏員ノ初ト稱ス。嘉靖年間、大膽不敵、鬼虎ナルモノ地ノ天險ニ據リ反旗ヲ上グ、中山王追討ノ水軍ヲ宮古島仲宗根ノ豐見城玄雅ニ授ケ征セシム、衂ラサズシテ

賊魁ヲ生檎、陣營ニ斬殺シテ軍門ニ梟首ス亂民震慴シテ罪ヲ乞フ皆ナ赦サレ良民トナル、雲蒸セル禍根ヲ一掃シ得タリト云フ。該島ト石垣島間ヲ必過ノ船舶ハ西表村ニ寄泊シ慶田城家ノ火ノ神ニ米、粟ヲ以テ報賽シ崇信セリ後チ遠波嵩根所ヲ建立セリト傳フ。

與那國富士（海拔七百五十七呎）

島ノ中央ニ位シ蒲葵林繁茂シ喬樹寡ク貧弱ナル雜木林ニ隱レ喈々タル聲ヲ弄スル「ヨナクニメジロ」アリ。世界一ト呼バヽル、大綾錦產ス。

一升田（トシダ）

島仲ニアリ、積五百坪餘ニシテ深サ纔カニ附踝ヲ沒シ昔日、島民ノ增減ヲ調査シタリ、全島民ヲ田ニ密集シ排除サレタル民ヲ殺戮セリ俗ニビトハカリ田ト云フ、

コブラ、ホウシ

巖岩峽江ヲ夾ンデ峙立シ、欹側シテ傾カント欲ス、人ヲシテ目眩シ氣奪ハシム、昔シ懷胎婦ヲ跳飛サセ一跌スレバ身ヲ窮谷ノ底ニ墮シ無慘ノ死ヲ遂ゲタリ、幸ヒ其險ヲ免脫スルヲ得テ村民タルノ慶ヲ受クト

註　在勤ノ役人、横暴ヲ極メ、信用ヲ失シタル際ハ、村民彼レヲ誘引シ酒杯狼藉ノ頃、役人ヲ拋落セリト傳エラル。

濱崎船の由來

當地老舗主濱崎莊市氏ノ嚴堂、帆船ニヨリ島ト商取引ヲ開祖セリ日用品其他木綿糸、酒、素麵ヲ鬻ギ物々交換ヲナセリト帆船ノ往復該船ニ始マル其後、帆船ヲ稱シ濱崎船ト呼ブト云フ。左ニ象形文字ニテ記サレタルモノヲ掲グ

山原船

今ハ濱崎船ト唱フ

是ノ判ハ濱崎店ノ記ナリ（笹森氏ニヨル）

象形文字（ガイシンモジ）

文字ヲ知ラザル人々ノ習用シタルモノニシテ備忘ニ供セラル。日記帳（ソー）ヲ綴リオキ記標シテ後日ノ便ヲナス結繩（サレ）ハ官廳ニテ用ヒタルガ如シ。

機業

織物ハ纖細ナル技巧ヲ加ヘラレ、所謂ヨヌン花手織（パナヌ）、芭蕉布ヲ產ス。

婿娶　婿ヲ約二十五坪ノ畑ニ案内シ牛背ヲ農具ニ供シ耕耘ソノ勤怠ヲ試ミルト云フ。

婚儀行列　行列ニ交リ「ボト、モテ、ウタ」(夫持つ歌)ヲ高唱シ嫁ヲ戒メツ、婿家ニ到ルト云フ。

産室ノ事　産室(オツテ)ノ處理ハ群島其ノ輙ヲ同ウシ産婦、孩兒ヲ温ムル爲メ十日間木理滑カナル「黑木」「トシキ」(方言)ヲ燒キ生兒ノ皮膚柔美ナラシム。産室ノ入口及ビ門ニ枕榔ノ七五三(チビナー)縄ヲ張ル、縄ノ央ニ黑縄モテけまん結總角結ヲ垂ル。若シ家ニ不吉ナル事發スレバ當日七五三縄ヲ除キ翌日亦タ縄ヲ張ルト云フ。生兒ノ臍帶ハ一握ノ寸法ニテ剪リ(竹ノ表皮ヲ用)初髮ト共ニ保存ス。

「ドリ、ムス」の祭

年中行事ニテ最モ莊重ニ行ハル、例歳十月頃二十五日間獸類ヲ殺生セズ。牛馬豚ノ肉ヲ斷チ齋戒ス、魚肉、鳥ハ食スルモ神恕アリト神人(カンビト)(大阿母ニ同ジ)ハ百日間斷肉シ謹愼セリ是レ謝肉祭ノ一種ナルベキカ。

「ドンタ」の踊

祭祀無事ニ終了セシ夜、乙女(ミヤラビ)粉黛ヲ裝ヒ青春男(ヒラマ)輕舌ヲ弄シ男女相抱擁シテ舞踏ス、太鼓、鐘ノ響勇シト云フ

花酒(ハナサケ)

島ヲ艶稱シテ女護島ト云フ、自家供用ノ花酒芳香醇烈、神ニ捧グル嚼ミ御酒(ミキ)アリ。

風土病　花柳病多シ、輕微ナル「マラリヤ」症流行ス。

波照間島

石垣島南西洋上二十八浬ニ一ノ孤島存在ス。民醇朴、力田服農、深耕播種、終歳勤勞シテ息マズ稼穡ノ術ニ秀デタリ、耕地礫岩ニシテ土壤甚ダ乏シケレバ一種特異ノ農具ヲ慣用ス。其習ノ懷シサ吾々祖先ノ遊牧的生活ヲ見ルガ如シ。殊ニ秋冬ノ兩季、怒濤岸ヲ嚙ンデ白浪掀天シ海上多風、交通自由ナラズ歳ニ風災、早殃不慮ニ處スル貯蓄米ヲ行ヒ盜賊ナク道ニ遺ヲ拾ハズトハ列島中稀レニ觀ル美俗タラン。又タ農耕ノ民ハ夙ニ起キ農具、漁網、釣竿ヲ牛脊ニ載シ日昏午ニ近クヤ海ニ投網漁撈シ綠樹ノ蔭ニ班々タル日影ヲ受ケ魚ヲ炙リ介貝ヲ膾トナス學校ヨリ晝餉ニ歸リシ兒童ト愉快ニ會食ヲナシテ耕作ニ從フ、而シテ星ヲ戴キ家ニ歸ル。此ノ天眞流露可憐ト云フベシ

天火降リ焦土トナリシ傳說

太古島民漸次惡風ニ浸潤シ劫盜、殺戮、骨肉相屠リ其肉ニ飽キ非行背德ノ巷トナリヌ、神、憂慮措カズ常ニ敬神篤信ノ念深カキ兄妹二人ヲ幽暗ナル洞窟ノ奥ニ潛マセ白金ノ鍋ヲ以テ屋蓋ヒタリ、須臾ニシテ油雨沛然歇マズ、雨收マリ續イテ火ノ霰天ヨリ落チ凄マジキ風起リ血紅色ノ雲、狂ヒ飛ビテ島ハ火ノ海ト化シ了リヌ、火ハ三日三晩全島ヲ甜メ盡シ滿目荒凉唯ダ白煙ノ立罩ムルノミ、住民悉ク灰燼トナル、神二人ヲ洞窟ノ口ニ誘ヒタリ地ニ一枝一葉ノ生存ナキニ驚キ、彼レラ平生神ヲ尊崇セルタメ自カラ加護ヲ得タルナリト再生ノ恩ヲ謝シケル。神二人ヲ產石(シラ)ニ倚ラシム妹、產氣ヲ催フシ魚ヲ分娩セリ、ソノ魚ハ凡テ毒魚ナレバ兄痛ク心ヲ惱マシ神慮ニ苟合セザルモノトナス茅舍ヲ作リ移リ住ム、妹不思議ナルカナ兒女ヲ儲ケタリ其子成人ノ後多クノ子ヲ產ミ其子孫廣ガリテ多數ノ民トナレリ

註　火ノ雨ノ說石垣島ニモ傳ハル、波照間島ニ於テ產ハ不淨ナル者トシテ人之レヲ忌憚リ、見舞ヲナサズ。又タ驛婦ヲ溫ムルタメ薪木ヲ焚ク。初產婦ニハ四十日以後ハ四日或ハ五日ナリ、助產人ハ家族ニシテ產ノ標ニ古草履ヲ提ゲト云フ。

島民ノ亡命說

人頭稅率愈々加ハリ負擔ハ主トシテ中產以下ノ肩上ニ移サレケレバ村民ハ藩政ノ誅求壓制ヲ怨嗟セリ順治五年(紀元二三〇八)屋久村(一本平田)ノ「ヤクアカマリ」民衆ノ窮愁ヲ救ハント、密ニ南方洋海ヲ普ネク探檢シ漂渺ノ間ニ一ノ仙島ヲ發見シタリ、樓閣玲瓏、綽約タル仙子棲ム、南波(ハイ)照間ト名ヅク。諸人ト共ニ移住スベキヲ說ケリ。依テ老幼男女四、五十人一行ト暗夜ノ晴夜ニ乘ジ日用ノ道具ヲ山積シ將サニ解纜セントスルヤ一婦鍋ヲ遺忘シ倉皇トシテ陸ニ去レリ星移、轉瞬ナラズシテ曙天ナラントハ。舟人危懼婦ノ歸來ノ遲キヲ唧ツ捨テ、樂土ニ旅立チヌ。婦急ギ抵レバ船ハ順風ヲ孕ミテ航走セリ。婦息ヲ喘マセテ叫ベドモ呼應スルハ無情ノ潮、今ハ氣屈シ自ラ衣ヲ裂キ全身ヲ搔キ悶ヘ覺エズ手ニセル鍋ニテ砂上ヲ搔キツ、狂亂聲ヲ放ツテ泣キ心神喪失シ仆レタリ後世此處ヲ「ナベカキ」ト唱フト云フ。

註　島民南航ノ口牌ニヨリ討究セバ臺灣生蕃ノ或ル部落ニハ北方ヨリ移住セシト傳フ。

「オヤケ、アカハチ」ノ素性

野生ノ豪俠兒不遇ノ「オヤケ、アカハチ」生ル容貌魁偉、頭髮赤赭、長ク垂レ、齒ハ巳ニ成人ノ如ク生イ眼光人ヲ射殺ス產婦其ノ怪惡ノ形狀ニ驚キ哺乳養育スルニ忍ビズ、他聞ヲ憚リ裙袴(カカン)(湯卷)ニ包ミ夜初更窃カニ海中岩礁ニ捨テ、去ル、生兒ハ濤ノ韡々轟々壯烈ナル波ノ響、波シブキヲ眞額ニ浴ビツ、熟睡セリ、天明ケ漁舟岩礁ニ生兒ヲ認

メ拾收シテ育セリ。長ジテ筋骨逞シク鐵ヲ鍛ヘタルガ如ク威名隆々タリ、彼レ小島ニ蟄シテ小事ニ齷齪スルハ男子ノ屑シトセザル所、聞ナラク石垣島ハ原野廣濶沃土相連リ蒔カズシテ生ヘ耕サズシテ實リ無盡ノ寶庫ト稱セラル、割居ノ群雄ト角逐シ一層自己ノ野望ヲ成就スルノ便宜多カルベシト思ヒ單身空拳侵略セリ、島民彼レノ壯舉ニ蟻附蔟集シ日數ナラズシテ優勢ナル兵力ヲ具備シ一島ヲ披靡ス、獨リ長田大翁主難ジテ盲從セザリシガ妹「コイツハ」姿色アリ明眸人ヲ魅スルモノアリキ「アカハチ」早クモ之レニ想ヲカケ戀々禁ゼザリシガ、戀ハ思案ノ外トテ相思ノ情相通ジ兩人ノ婚姻日出度ク整フノ日、長夜ノ宴ヲ張リ大翁主ト兄弟ノ義ヲ隱約シ中山王ニ反抗セントセリ。夙ニ俠勇ノ氣ニ富ミタル大翁主既ニ彼ノ胸底何物カヲ洞察セシカバ孤忠ヲ守リ不俱戴天ノ仇敵トナリテ戰塵ノ間ニ馳驅シタリ、一族與黨賊手ニ死セリ彼レ重圍ヲ脫シ辛ジテ古見村（西表島ノ内）ニ退キ徐々ニ再擧ノ機ヲ待ツ、率然中山王ノ精兵討伐ノ爲メ名倉灣ニ假泊ス、彼レ喜ビ一隻ノ輕舟ヲ南西ノ風ニ乘ジテ來リ武威殆ンド地ニ委セントス此ノ重大變事ニ處スベキ準備ヲ献策シ先導トナリ賊ト戰フ、王軍太鼓ヲ鳴ラシ笛ヲ吹キ凜烈ニシテ營寨ヲ圍ミタリ。賊擬兵ヲ作リ猪勇ヲ以テ迎擊セント兵ヲ鼓舞セシガ令行ハレズ支離滅裂セリ、王軍肉迫、賊ノ雄闘挫ケ寨ヲ逃レ泥深キ蓮田ニ潛伏セシモ遂ニ誅セラル大翁主ハ中山王ニ寵用セラル、狼煙立

チ去ツテ忽チ天地富樂ノ色見ヘ萬歲ノ春ノ花發ケタリ

「ほたかり」家ニ秘藏ノ古文書

しりのおんみことのり

やねままきりのあらもとめさしはあらもとつくねたまはりまうす

天啓六年（紀元二八六）八月二十八日

譯　首里ノ御沼　八重山間切ノ新本日差ハ新本筑登之給リ申ス。

神田遊ビ

神樂ニシテ曲玉、玉飾ノ鉢卷、羽二重ノ帶ヲ裝シテ舞フ也。

家屋ノ構造

南方ノ廂ヲ最モ低ク垂ル、曰ク坐居シテ南方ノ星ヲ眺ムルヲ忌メリ。

地方病　頑癬ナリ

野鼠

穀倉及ビ耕作物ヲ食害シ繁殖旺盛ナリ。

光閣列島（通稱クバ島又大正四年十月刊行水路圖、尖頭諸嶼ト記ス）

光閣列島（黒岩恒先生ノ新稱）ハ那覇三重城（ミエイクスク）ヲ距ル西七度、南二百三十海里、清國福州ヘノ距離亦略ボ相似タリ、而シテ西表島ノ北方凡ソ九十海里、地貌齵齒ノ如キモ氣品、風手神仙ナル哉。

列嶼ハ釣魚（ヨコン）嶼、光閣諸嶼（近古代水成岩）及ビ黄尾（クバ）嶼（火山岩）ヨリ成立シ渺々タル蒼海ノ一粟ナリト雖モ奈良原岳（海拔一千百八十一呎）參差直立シ笈乎トシテ墜落セントスル狀アリ、其東方ニ屏風岳ノ峽崖、草樹ナク岩層煉瓦色ヲ呈シテ甚ダ美觀ナリト云フ、島ニ松樹蘇鐵ナキモ、道安（トウアン）溪（故野村道安先生仙臺人）ノ源泉長ヘニ混々タリ、時ニ赤尾熱帶鳥頻リニ群ヲナシテ飛ビ來リ景色佳絶ナリ

黒潮ノ奔流激衝スル列嶼一帶ノ海岸ハ到ル處岩礁散布シ最モ航行ニ危險多シ、寒暑ノ往來ニ「アホウトリ」「クロアシアホウトリ」ノ大群幾千萬、空中ニ飛翔スルヤ天日タメニ光ヲ滅シ、鳴聲全ク人ヲシテ聾セシム、先代古賀辰四郎氏開招ヲ企圖セシ初葉移民、無聊ヲ慰セント猫族ヲ伴ヒタリ繁殖力旺ンニシテ野猫ト化シ「アホウトリ」島ヲ離ルヽニ至レリ、無人島ヲ開拓セントスルノ人愼マザル可ケンヤ、嶼附近鰹魚群集スル「多ク現時六十九人

住ミ漁撈セリ、燐礦アリ蛇多シト。

琉球國志略卷ノ四

琉球在海中、與些岡地勢東西相値、但平衍無山、船行海中、以山爲準、福州住琉球、出五虎門、取雞籠山、花瓶嶼彭家山、釣魚臺、筡尾嶼赤尾嶼姑米山、馬齒山、收入那覇港、

尖閣列嶼附近ノ潮流

バシイ海峽、東經百二十度附近ヲ通過スル黒潮ハ臺灣西岸ニ向フ西向流ノ圏内ニ入ラザルガ如ク、北向シテ紅頭嶼附近ヲ通過シ石垣島北方北緯二十六度附近（尖閣列島）ニテ支那東海ノ稀鹽水ニ驅ラレ東北向シテ南西諸島ヲ洗ヒ九州南端ニ近ヅクヤ、本流ハ四國沖ヲ進ミ潮岬ニ接近シテ流レ伊豆七島ヲ通過シ其末流ハ外房州沖ヲ經テ少クトモ犬吠岬ニ達スト。（臺灣水產雜誌第三十一號ニ據ル）

衞生

光緒元年（紀元二五三五）十月十一日牛痘植付（種痘）ノタメ御雇醫、與那覇筑親雲上到着約一年八ヶ月滯島シテ牛痘ヲ强行セリ、古老ノ談ニヨレバ古來交通頻繁ナラザルニヨリ天然痘ニ罹リタルモノナシト、地方病トシテ「マラリ

ヤ」熱熾ンナルノミ、明治四十一年七月三日沖繩縣臨時縣會ニ於テ大濱用要氏該病撲滅策ヲ建議ス

「八重山ハ土地廣クシテ人口少キニ拘ハラズ產物多イノデ御座リマス、然ルニ風土病ノ爲ニ發達進歩ヲ見ル事難ク殊ニ目下ノ處風土病ハ十六ケ字ニ渉リ人民ノ苦痛少カラザルノデアリマス、病氣ノ爲メニ一家滅亡シタルモノ、廢村ニ屬シタル處モアリマスカラ慘狀見ルニ忍ビザル者デアリマス、此惡疫ハ一時モ早ク八重山ヨリ驅逐シ人民其業ニ安ンジ天與ノ產物ヲ獲收セシメタイト思ヒマス」

同四十二年來三箇年ニ亘リテ縣費一萬七千金ヲ投ジ種々ナル方面ヨリ調査シタリシガ途中ニシテ廢絕ス近頃民族衛生ニ就キ論議嘖々タリ、大正七年九月二日風土病撲滅期成同盟會組織シ會長諸久村正恭氏ナリ其他「フチジス」象皮病「レプラ」アリ或ハ熱帶性テンギュ熱ノ流行アレド衛生狀態敢テ不良ニアラズ、吾人心身營養ノ厚薄如何ニアルノミ。

動物學ト醫學ノ交渉

マラリヤ病ト蚊ノ關係

「クラッシイ」先生一千八百八十六、七年我ガ明治十九、二十年頃ノ研究ニハ「アノフエラス」ガ「マラリヤ」病ノ

原蟲ヲ患者カラ他ノ人ニ傳ヘルト、ソノ原蟲ガ人體ノ血球ヲ食シ大ニ成長シテ分割スル、其時ニ熱ガ起ルマラリヤ病ノ隔日ニ發熱スルノハ原蟲ノ分割ガ隔日ニ起ルカラデアル該蚊ノ刺擊ヲ受クルヤ六ケ月ノ長期間潛伏シ時ニ或ハ短期間ニ發熱スルコトアリ、臺灣總督府ハ「マラリヤ」病撲滅策トシテ多大ノ費用ヲ投ゼラレ「タプミノ」魚ヲ海外ヨリ輸入養殖シテ某地ニ放魚シ功果顯著ナリト傳フ。

病原不明ノ「デンキュ」熱

「ショキペ氏」ノ定義

デンキュ熱ハ熱帶及ビ溫帶ニ存在スル高熱劇甚ノ筋痛及ビ關節痛及ビ多形ノ發疹ヲ呈スル病源不明ノ急熱性傳染病ナリ。症候潛伏期ハ普通一兩日間ナリ(中暑)朝時ノ輕快ヲ示シ、通常三日後ニ下降スルヲ常トナス皮膚發疹ハ多クハ發病第四日ニ發生シ班ハ暗赤色ナリ疹ノ存スル期ハ多クハ廿四時間ニシテ班ハ萎縮シテ蒼白色若クハ褐色トナリ患者ハ平癒ス。鼻加答兒、結膜炎ハ殆ント見ス氣管支炎ヲ併發スルコトアリ。云々

助產婦

道光二十三年(紀元二五〇三)九月達生篇養幼篇ノ譯本當地ニ流布シ產婦ノ攝生之レニ則レリ。助產婦ノ養成ハ今ヲ去ル

事二十五年前ニシテ昔日老婦ノ經驗ニ一任セリ、四箇ニテハ助産婦ヲ洗母（ハナシヅルビト）。與那國島ニテ「アボ」「アカメ、ナシメル、ビト」ト唱ヘタリ、一朝逆産ニ遇ヘバ臨機應變ノ術ナク母子共ニ命ヲ失ヒス、臍帶ヲ處理セシ人ヲ臍ノ親ト敬フ臍帶ノ札絮又タ剪ルトキ剪刀ヲ用ヒズ竹ノ表皮ヲ使用スル習風ナリ。

食料タル甘藷

甘藷ノ栽培ハ極メテ易々樂々ニシテ質頗ル剛健ナリ、山角磽瘠ヲ撰バズ浸水ニ腐ラズ施肥ヲ要セズシテ歳二回ノ收穫ヲナス當島ニ傳來セシハ康熙三十三年（紀元二三五四）沖繩ヨリ歸帆ノ途、難船ノ厄ニ遭ヒ唐土ヘ漂着シ同三十四年歸島ノトキ齎ラシ「ハンス」芋ト呼ブ、逐年麥、粟、大小豆ノ種子輸入セシ甘藷凶作ニハ蘇鐵ヲ調理シ混食セリ。舊藩ハ甘藷栽培ヲ勸メ雍正八年（紀元二三九〇）十二月「ハンス」芋貯蓄方法高奉行ヨリ稽古スベキ旨各在番ニ達セラレタルト傳ハル。

沖繩縣教育會創立二十五年記念號偉人傳ニ曰ク

甘藷大主野（イモオフヌシ）團總管萬曆三十三年（紀元二二六五）尙寧王ノ世、初メテ甘藷（蕃藷）ヲ支那（萬曆二十二年（紀元二二五四）明國晉安ノ人陳振龍、呂宋島ヨリ其種ヲ獲エ支那ニ移輸ス）カラ輸入シ栽培ノ繁殖ニツキ儀間眞常最モ苦心ヲナス、僅カニ

十五年間ニシテ洽ク國中ニ分布セシメ五穀ノ補助ヲナサシム云々。

內地本土ニ輸入サレタルハ我寛永二年（紀元二三六五）薩州山川郷岡兒ケ水村ノ利右衞門ナル航海業者沖繩ヨリ甘藷ヲ盆栽トシテ持チ歸レリ、以後享保二十年（紀元二三五九）青木昆陽先生、幕府ニ建言シテ甘藷ヲ全國ニ弘布セシムト傳ハル。

甘藷ノ害蟲

甘藷ノ敵蟲、沖繩方言「スル、」蟲卽チ夜盜蟲ノ一種「ナカジロシタバ」次ニ「Myrmaciclus formicarius chev.「アリガタザウムシ」或ハ白蟻ノ蝕害アリ。

島の奢侈

四季差別ノ節物ナク珍膳ノ饗餐、萬錢ヲ失却セザルモ恒ニ新鮮ノ魚、垂氷烏賊、賽形冬瓜「ゐのこ」ノつくし煮ニ泡盛ノ淺酌ヲ試ミ、羞耻ニ包マル八重山乙女ノ謠フ、まめどうま、量、豊ナルニ陶然タリ、仙カ俗カ、若シ淡泊ヲ好マバ儒良方言人魚（ヂン）ノ差シ身、萬壽果（バンヤ）ヲ妻トシ生姜酢デ風味サレヨ、おほたにわたり、方言さるむしろノ吸物岩筍子方言アダンノ葉、眞ニ舌皷シ桑芽ノ茶、本耳（ミンダル）ノ天麩羅（ウラツケ）以テ富貴ヲ夢ミルノ人アレバ罪ソノ人ニアルベシ

ひるぎの一葉石垣島案内記終

八重山童謡集

序

岩崎君が「八重山童謡集」を出版すると聞いて、私は端なくも三年前八重山に遊んだことを想出した、八重山は宛然ホーマーのユリセスの中に書いてあるセースの島のやうな所だ、その音樂にはちょつと立寄つた旅人を永久に囚へる魔力がある、その無名の詩人はかつて「ばしの島」と云ふ調の高い立派な象徴をさへ歌つた、八重山は實に歌の國だ、私は今でもこのうるさい沖縄を去つて、あのうるはしい歌の國に一生を送りたいと思ふ位だ、しかし物質的文明は其處にも侵入していつて、南國の詩人の種を絶やそうとしてゐる、そして今はたゞ好奇心に富んだ幼な子の詩人たちがその美しい自然を見て歌ひつゝ躍り喜ぶのみだ、岩崎君がこの際無邪氣な幼な子たちの歌つてゐる歌を集めたのは能くその時を得てゐる、これから十年も經つて八重山島を訪つれる人はかういふ美しい歌を幼な子の口から聞かないで、この書から學ぶであらう。

明治四十三年十二月

伊波物外

緒　言

余の八重山童謡集を編纂し其原語を意譯するにあたり精粗行文格調其の軌を一にすること能はず之れ畢竟余が淺學寡聞のいたす處なりと雖も力めて原唱の意を失はざらんことを期せり故に其杜撰の點は充分叱正あらんことを希望す。

此編を草して之れを沖縄縣立圖書館長文學士伊波普猷氏に致して朱筆を請ひたりしに懇切なる校訂と特に序文を添へられたるは衷心感謝する處なり

本書初刊に關しては八重山島金城永本氏識名瀬名波兩氏及び仙臺の舊友岩崎波雲の諸氏に負ふ所少なからず書して其厚意を深謝す。

辛亥一月　　糸數原主人誌

八重山童謠集

糸數原主人編

○晝のうたの部

◉あめまあや、ふりたぼんな、ていだあ、まあや、ありたぼうれ、ひやよいさ、ぽんぽんぽん。

註　小雨は霽れよ、お日さまお出でなさい、さあ〳〵雨垂れ落つるをこわしましよう。

◉あめまあや、ふりたぼれ、こねま、の、やうゐ、ぽんぽんぽん。

註　新城島に流行する童謠なり南島由來飲料水に欠く、雨水を潴留せり故に小雨降る多量によ、坊やのお祝ひをいたしませう。

◉こねま、の、あつぱあ、づまかいど、おうるとう、おほはたげ、かいでどおうりとうるてふ、のふしなのふしなおほはたげおうるとう、おほはたけおうりふうあこんかみようりい、こねまのむんやみづくりばがし、あんまのむんや、しぢあこんばがし　ほういほうよ。

註　坊やの御母はどこにゆかれたか、大畑に行かれました、それは大なる甘藷を拉しきたり坊やには美味ものを上げ、姉(あんま)には不味ひものを煮て上げよ。

◉こねまのしゆやづまかいどおうるとう、ふううらかいでどおうりとうるてふ、のふしなのふしなふううらお
うるとう、ふううらおうりたあらあまあしようり、まいんたのしらうふしらなしようり、しんたのしらたかし
らなしようり　ほうい、ほうよ。

註　坊やのお父さんは何處に行かれました、藏元にお出勤れ、何の御用で藏元にお勤めか、米俵を給はりてお家の稻村を大形に積み上げ、家の後の稻村なも高々と積み上げますよ。

◉こねまのなあやのふでどたあぶられ、ふくれまでどたぶられ、すつちやらすつちやら、ふくれまたぶられ。

註　坊やのお名は何んと言ひますかふくれまと、命名されたと、羨ましいね、ふくれまと申されますか。

◉みちのやにのしやづまみちね、さつてもまりたるおんがんやのぞふあまたれよつふわ、したれよつふわ。

註　道路の悪しきはどこよまあ驚いたよおかん家の門。

◉みちのかいしやあづまみちねさつてもまりたるばんなやのぞうあまだれよつふわしたゞれよつほう。

註　通路の立派はどこよまあ美麗な事は幡名家の門前よ。

◉けふや、さんがつさにじ、はなぞめてさじやねゐらんば、そめやのあんまたのみ、そめてたぼうれ。

註　今日は三月三日よ花染手拭ないならば染屋の阿母に依頼して染めて貰ひなさい

◉いつちゆが、たつちゆが、じうよが、しひが、ちかまく、きんぼう、はありんとうま、はあるが、よいさ。

註　一二三四五六七八九十

起因　明治九年「マニラ」人六十四人漂着し久しく海岸に假居せしと云ふ同人等より數へ方を教示せられたりと傳ふ。

沖縄にては「いつちく、たつちく、じうにが、ひいがあ、つくむく、ちぶらが、お殿や、こしなち、ふうるが、やゐ」

註　或る日名護親方、具志堅親方、山田親方相携へて波上社に賽せり、偶々宮柱に裝置したる鬼面像に興し即吟の題となせり、三人互に相譲りしが齢尚ほ若かりし具志堅親方作歌したり。

「端座して居るか、立つておるのか、十二の木製の頭が並んで居るがお殿を後にして居る不思議だね」との意なり。

遊戯仕方　「へーシ」てんのぼうまぼうまに同じ

◉てうねんぼうじ、やまかい、つかいし、つかいし。

註　てられんぼうじ(Balanophora fungosh forst.)(リウキウツチトリモチ)山へ遣たか寺に遣つたか。

◉やまねんぼうじ、てうかい、つかいし、つかいし

註　前に同じ

◉ひやあしよふ、ねつ津りこう、いゐじようみゐ、たくのみゐ、ぴいじんとう、めんめんめん、ばなばなばな

くちくちくち、

註　ちやん〳〵〳〵にぎにぎ魚の目蛸の目肱ばんばん眼々耳々鼻々口々。

◉こねまのあつばあ、づまかい、どおうるだ、なかすじかいどおうりとうるてふ、のうしなのふしななかしじおうるだ、なかすぢおうりばなぶれうり、こねまのむんやばなぞめしめらり、あんまのむんやうすずみそめふり、ほうい、ほうよ。

註　坊やのお母は何處に行かれました仲筋（四ケ村を去る五里）にゆきました何の御用でゆかれましたか仲筋にて木綿花を摘み歸り坊やには濃染にして上げ姉には淡染をしてやりませう。

◉こねまのよゐながのうどすけようる、あはむりさけどしけおうるてふ、すつちやらすつちやらあはむりしきられ、ほうい、ほうよ。

註　坊やの御祝儀には何んなものが料理さるか泡盛酒をつくるさてもよきことよ泡盛酒が馳走さるよ。

◉こねまのあつばあづまかいどおうるだ、おふやまかいでどおうりとうるてふ、のうしなのふしなおふやまおうるだ、おふやまおうりおふきいかめふり、あすとゆやあはむりばがし、ゆうかゆうやこねまのよゐしようるん、ほうい、ほうよ。

註　坊やの御母は何處に行かれました大山に薪木とりにゆかれ大木を拉しきたり明後日は泡盛をつくり明後々日には坊やの御祝を催さる。

◉かんだんどうの、みちから、よゐしなよゐしな（大川、登野城）

◉かんだんどうかい、むちの、よゐしなよゐしな（石垣、新川）

註　手を引いて上げます御歩きなさい。◎圖の如く導くなり

◉とうみのみゐから、ふけだる、とうやま、とうやま、しさむち、あかむち、んぞさゐ、すつくるさあさ、うりとう、うみてうりむりこのばなとううみ、とううみ、むりくのはな

起因　大公望武王に從ひ紂王と交戰の日大公望の呪咀なりと傳へらる。

◉まあやあこつけい、まあやこつけい。

註　かくれんぼうの合圖なり。

◉おふせいばんのかねまあちや、ならあ、ふわやかざめつて、ひとのふわばつかいとうし、しんどうくいな、まんとくいな。

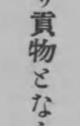
註　藏元の役人は御自分の小兒を隠しおき他人の小兒を使役してよ(星功をとるに他人をおとしいれるな)。

◉しゆのふわであんきつて、あつぱあふわであんきつて、うぬよふぬいのんざんむつぶさな、へよほうね、はいよほね。

註　御父さんの子ともあらふものが御母さんの兒ともあらふものがこれ位の砂さへも運べないとはなんとなさけない事ではないか。

◉こうじこう、こうじやのうしゆまい、いかしたかあしたねゐら、うしゆまいなまじまおうりた、ぱんなやのぞうおうりた、なまかちやぴきにびつた。

註　講義所の師匠の御影が見ゐませんか、おや幡名家の門前までこられたよいまは、はや蚊帳の内で熟眠さる。

遊戯仕方　多數相集り各々砂を運びきたり貢物となし  形に盛り一人犬に擬して貢物を護る他は盛上げし砂に「わな」をおき熟眠の態を示し鬼となりしもの盗むべくきたり砂を踏潰し去るを犬は吠へ眠を醒まして鬼を追跡するなり。

◉とうんまのらんか、やまとのつけ〳〵、ふゐだだ、ふゐだだ。

註　唐(支那)馬に乗ろふか、大和(日本)馬に乗ろふか、はゐどうど。

起因　八重山に在番設置前にして琉球の兩屬政策を曝露せしものならんか。

遊戯仕方　四人組の遊にて二人ならびの間に一人頭をさしこみ兩手を以て二人の腰帶をつかみ馬に擬し一人之れに乗りて歌ひまはる。

◉うらのしんばたんが、みしゆとんなあの、ふしようまれいだ、まれいだ。

うしだしのがらしん、かさしのがらしん、かかやあほうださあ、こうろろ、づつ、づつ、(登野城、大川)

註　藏元の旗竿頭に雀が糞せしを後差の笄にて拾ひ喰ひせしよと。

遊戯仕方　大勢魚貫して長列となり其首班(オヤ)大手をひろげ前に鬼をおき歌ひつゝ鬼が全線中の末列をつかむ首班これをふせぐなり。

◉うらのしんばたんが、みしゆとんなあのびりつて、ふしようまりつて、ちべゐのふなあ、とびはつたあ、みいだ。

あせゐ、

あせゐ、

うしだしのがらしん、ちびぐんぐるまあさばんゆう

あせゐ、

ころろ、づつ、づつ。

註　藏元の旗竿頭に雀が糞して、おしり、どうした、後差の笄で、おしりをいぢりしか。

遊戯仕方（前に同じ）

◉こねまの、んなしつか、あんまん、んなごす、こねまの、なくかあ、あんまん、なきごす、ほうい、ほうよ。

註　坊やが寢れば姉もねむり、坊やが泣けば姉も泣きますよ。

◉てんのすけすけ、やあもとうけとらんか、いつぽうかつぽう、かまめざしの、こうふつちや。

ねはい、しゆだなろうれ。

註　神の御掟には跡目相續は今も古も長男と定めあれば目差のあとめも長男たるべし

おめでたふ頭（カシラ）になりなさい。

起因　目差役ものに數子を擧ぐ長子白痴なれば廢嫡せんとせしを其不條理を訓せしと傳ふ。

遊戯仕方（次に同じ）

◉うしのばん、ぞれぞれ、うまのばん、ぞれぞれ、あければけんけん、もすんがね、つるんがね、ごつふね。

ねはい、あひやま、なろうれ。

註　牛の脚交々馬の脚交々明日といひやりしに今日花婿と花嫁が途中で出會した。

起因　昔し婚禮を擧る前日婿入りの儀あり婿入りさはりなくすみたるの翌日嫁輿入りの定めなりしを、花婿其日取り誤りて混雜せしを諷したるものと傳へらる。

遊戯仕方（次に同じ）

◉てんのぼうまぼうま、さんのけいじけいじ、いんぶや、まつのけや、まあじやのしゆや、とんがごうしゆ。

ねはい、しゆうだなろうれ。

註　年貢帳記入を明白ならしむるために◉◎㊀等の符號を用ひたりしがその計算にあやまりあれば曖役人（アツカエ）（眞謝の主）が罰をうくるがおめでたふと祝言するなり。

おめでたう、頭になりなさい。

遊戯仕方　大勢でする遊なり、其仕方は地上に坐列して各自銘々足を伸出し歌ひつゝ足を數へ歌の終結りたる番にあたればあまりのもの一同がおめでたふと祝言するなり。

◉しよんがつのぐりいごう。

註　正月の御禮

遊戯仕方　正月一、二、三日の中、小兒等紅黄の紙片に書し吹き飛ばし遊びたりと云ふ（今はなし）

◉こねまのおうでら、んなしごおうでいら、あんまのおうでら、もるごおうでら。

註　坊やの御勤は眠るがおつとめで姉の役は子守するのがお役なり。

◉ぴいふすだるひとのよふじやねにぬ。

註　放屁した人の舞がないよ。

◉たあぴとう、たあぴとう、なつかんにやのんめに、やりうづのみいから、ふきだるぴつてふ。

註　誰か放屁よなつかんにやの老婆が衣裳の破目より放てる放屁なそうだ。

◉いいしゆぬみいぬおんだあぎい、ゆだもちのちゆらさ、こういこうい、あやこい、あやこい。

註　海中に茂生する海松の繁茂の狀波に蕩さるゝを歌ふ。

◉かんたんていとなが、たあまありのしなしな。

遊戯の仕方　多數の小石をおきて歌ふ「かんたんてい」が其の石をまもるといふ。

◉なきてん、わらいてん(なきつてばあろふかあ?)しんやあまんやあ、こうにつちやま、なきふりかんて、いだありだあり。

註　隣三軒目の兒童の泣きを我子が引受けておると云ふ(たゞ泣く兒に言ふこと)。

◉むんそうまだいだい(たいたい?)まあそうまだいだい、したでゐまだいだい。

註　醤油もつと召上がれ盥めしあがれ醤油召上がれ。

◉しゆの、ふわあぬなくつかあ、おんぎひいり(しごやまい?)あふぢ、のふわあぬ、なくつかあ、いびらひいり。

註　役人の兒が泣けば扇を上げる、百姓の兒が泣けば大杓子をやるよ。

◉ああるほうね、こうせにやあさり、いいりほうね、なつかんやあさり。

註　東(アアル)の方に師匠あり西(イリ)の方には無學者がある。

◉ごんまごん、ごんまごん。

遊戯仕方　兩童板の兩端に跨りて相上下する頡頏戯の合圖なり。

百八十年前に冊封使として琉球に來りし清人徐葆光氏の「中山傳唐錄」には、この遊戯の畫を載せたり又百年前に冊封使として琉球に來りし清人李鼎元の「使琉球記」にもこの事を記せり、こは琉球にては「いたふるまひ」と稱して七八十年前まで盛に行はれし遊戯なり「中山傳唐錄」には板舞と譯せり。

◉ゆうねんはあねんくいごうし。

遊戯仕方　木に攀ぢのぼり枝を合圖しつゝ動搖かすなり。

◉てんのあぼぢやま、てんのあぼぢやま、ばあものとかいつかあ、ばああらきむと、わあやりきむと、かゐる

んどう。

註　天の貧しき老爺よ物を取替やうか爺の破衣と我れの新着とかへましよう。

物をさがすときに

歌ひつゝ左手掌上に唾し右手の指にて拍つ唾沫の飛び去りし方向へたりゆく一の占なり。

◉たけだおんぬこんこうま、おうりておうりようたにごりさ、あんだけまつだりあかいばち、あんだけまつだりしるいばち、びんとうくいな、ゆうばなうれ。

註　竹田お嶽の杜より飛び出た鷹よ、來年も種子とりに來て下さい、赤いばち、白いばち、が如何に待ち遠い事よ。

起因　毎年寒露の節になれば鷹(候鳥)北より渉り來る百姓は之に由つて季節を知り苗代を準備し日を撰みて下種し種子取祝を行ふ、當日母姉等は早く起き△形の紅白の握り飯「イバチ」をこしらへ之を家の周圍の石垣、稻村(シヲ)の上に点々置き鷹が落したる樣にして、子女等を起こして之を落はしむ兒等は右の歌を唄ひて祝ひ遊ぶ。

◉いいりほうね、まつかあよいさ、あありほうね、きいもち、よいさ。

註　東の組は劣敗た、西の組は優勝だよ、乃はち海砂を運搬ぶとき各組の競爭を謠ひしものなり。

○夜のうたの部

◉てらのふだんが、いちゆばなくんがねばな、さかりようり。　ほうい、ちようか

註　寺の符札には魔が除ける黄金の花が咲きおる、寺護符には神秘的意義を有するものとして尙ほ迷信す。

◉つくいでのばなもの、ばがけいら、あさびようら。　ほうい、ちようか

註　月涌き出ては美麗なこと私どもが一同あそぶときよ。

◉あんだぎなあの、つくいのよ、ばがけいら、あさびようら。　ほうい、ちようか

註　美しい月の夜御一しよにあそびませう。

◉あそぶけいどあそばり、あまいけいどあまいらり。　ほうい、ちようか

註　勢一ぱいに遊びませう。

◉あそぶばなびとばな、あまいばなふたばな。　ほうい、ちようか

註　あそびませう道化ませうよ。

◉ああるからありおるつきがなし(ふうもすんかに?)うきなんやいまんてらしようり。　ほうい、ちようか

註　東から上り給ふお月樣沖縄も八重山もお照し下さい。

◉ああるからありおるつくいのよ、ばんちやのつゞまでありたほうれ。　ほうい、ちようか

註　東から上り給ふおほ姫樣よ私の家根までお出で下さい。

◉つきのかいしや、とかみいか、みやらびかいしや、とうななつ。　ほうい、ちようか

註　月の美しいのは十三日乙女の美しいのは十七歳、こは内地にて歌ふ「お月樣いくつ十三七つまだ歳若いな……」との原歌なるべし、中央部にて意味を失へる歌が西南の孤島にてその意味を保存せるは注意すべきことなり、琉球群島は宛然古物博物館ともいふべきか?。

◉つぎどづまど、やどとうり、うらのまいどやどとうり。　ほうい、ちようか

註　どこが舟宿よ藏元のまいはまよ。

◉づまどづまどふなつき、みしやぎのまいどふなつき。　ほうい、ちようか

註　どこに船を碇繋ぐや美崎泊へ投錨せよ。

◉ぱてろうまのみんぴがあ、みゆうとかぬさあ、みんぴがあ。　ほうい、ちうか

註　波照間島の海中に突起する礁岩は可愛かなあ。

◉いりかいいきばあ、めやう〳〵〳〵、ありかいいきば、あがうがう〳〵。　ほうい、ちようか

註　西に行くと猫がおる東へ行けば鴉(クチブトカラス)がおる。

◉しきなやあのぢんぢんぢん、いしゆかゐおうらぢんぢんぢん、たいやねんばのうどし、よしきたいやあるもの、どう。

註　識名家の老人さん魚釣にお出でゞすか、松明がなければどうするよゝきのたいまつは何處にもあるよ。

◉あらやのあんまたがあんたんちよう、あかんにふなぐしたれんちよう、てゐが〳〵みだごうま、うり〳〵ばいのたんきようす。

原歌　あらやのあんまたがあんたんねゐ、あかんにくにぶのしだれんてふ、てゆか〳〵みたがうや、うりむいたんきようす。

註　新家の姉が失踪をなしたそうだが人が知らぬも草や木は知つておる(宮古島の人竹富に漂着して歌ひしもの)。

◉びらまのやあのうらざんが、やまとおんぎばいりとばし、うりとりなつけでいけ、びらまむみやあくう。　ほうい、ちやうか

註　新郎の裏座敷(寝室)に大和扇を投げ込みてよ。

◉びうまのやあのあんたんが、むるくばなさかりようり、ばなぶりなつけでいけ、びらまむみやあくう。　ほうい、ちようか

註　新郎の家の後庭に抹梨花が眞盛りだ。

◉ひらまのやあのぞうなんが、たまのぶうばつりおとし、うりとりかりとりなづきばし、ひらまのやあかい、ばなぶんな。　ほうい、ちようか

註　新郎の門前で聯球の糸を切り其曲玉をまきちらし、おもひおもひに拾ひ集むる科(シナ)にて門に入り咲き盛りの花を手折りしてきぬ。

◉かまどのふちのあばあま、かみのはたのあぼじやま、のうど〳〵、うまさある、たばくのしたばどんまさある、ふさばん〳〵けむさどある、のめばん〳〵んがさどある。　ほうい、ちようか

註　宿火を膝にしたる濕婆よ、茶水甕の側に坐したる貧しき爺よ、どんなものが嗜好まするか、煙草の泥葉が美味いよ、喫めば煙にむせる飲めば澁味が(茶)ある。

◉ゆのんやぬしんたぬ、しんだんきい、うやばしみうねぬしんだんぎ、うのやのみどなぬ、どうむたば、ひきだしすくいんひしひようり。　はうい、ちようか

註　與那國家の後方にある栴檀木は大舟三艘をも作る樣な巨木だが其家の乙女が嫁入りの吉日には抽出箱(学績箱)をつくり御祝儀しませう

◉いんのぞうやむつまいぞう、あんのぞうやさふまいぞう。　ほうい、ちようか

註　西(イン)の門は糯米門、東(アン)の門は粳米門。

遊戯仕方　じやんけんで鬼を定めくるつと輪になりて立つ、中央には鬼が目隠され、歌ひながら鬼を誘ひ問答しつゝ鬼はやぶれやすき方向を切り迷がれいす。

◉てらのいんたのいんちよんま、うまのふわあばばらみつて、なすつきなつたあ、ふつちやふわで、なかつちやふわで。

註　寺の西のいんちゆ姉が馬の兒を孕んで臨月になつたから、兄の子だとか、弟の子だとか。

○

謎(ホホ)集(ハナシ)

◉柱一本(バライツホン)の家(スヤアー)、何(ノー)?。　解　傘(サナ)

◉足四つ(バンヨ)、蹄(キツヤビト)一つ、何(ノー)?。　解　行(ダカ)燈(トウル)。

◉晝夜(ヨユルヒユルヌノヤリムヌノー)機織、何?。　解　磯(ナ)波(ン)。

◉天(テンカイトウド)に合掌、何(ノー)?。　解　福(フクン)木(ハ)の葉。

◉天(テンチ)衝き棒(ボウ)、何(ノー)?。　解　雨(アアミ)。

◉天(テンカヘヤルム)へ槍向け、何(ノー)?。　解　葱(ビラ)。

◉空中(テンノナカタヌバユルカメ)の酢甕、何?。　解　密(フ)柑(ネン)。

◉空中(テンノナカタヌバユルカメ)の米俵(アイタアラ)、何?。　解　萬壽(マンジユ)果(クリ)。

◉空中(テンノナカタヌバユルカメ)の粟俵(アアタアラ)、何?。　解　ガジマルの實(ナル)。

◉夕往朝來(ユキンユテツトモテカヘル)、何?。　解　雨(ヤ)戸(ド)。

◉行きに空腹、歸りに滿腹何？。　解　釣瓶。

◉生れ落ちて足駄穿ちもぬ何？。解　豆腐。

◉白天青天、　何？。　解　苧麻の葉。

◉青天赤天、　何？。　解　バンタマ(方言)草。

◉初め四足又た二足あと三足のもの、何？。　解　人。

註　人の生立ち四足で這ひ、二足で歩み、老へて杖にすがりて歩むの意。

追補

○

◉ぐう、ざんざん〳〵、ていち、の、たあち、の、ざんざるく、うかしき、むの、めいたねに、ばぬねに、ようる〳〵、だるかむ、じるかあ、にしのぴう、の、なまたんご、いやいや、あんひん、ちよつかあ、なまたんご。

註　人目を忍び男女某所に密會せしを諷せり、一人が二人となり、お可笑敷、所作を我發見す、夜々女(にしのぴう)が、「あんぴん、ちよつかあ」水差し急須即、男と遊んでおるを。

◉かあら、の、はた、の、やまみだく(蜻蛉の一種)づまかいど〳〵、とびはつたねに、かあら、の、はた、かいど、とびはつたねに、のうてど〳〵、とびはつたねに、みつ、ぶさ、てど、とびはつたねに。

註　井戸端の蜻蛉、何處へ飛び去りしや、某井戸端に水を欲しさに飛び行きしと。

歌意　淫奔なる女子を誡めたるものなり、許嫁の婿を避け忌み、婚儀擧行せんとするに、他の情男と相通じ婚儀を破約せしと云ふ。

◉はとまやあ、の、たまなあ、あつぱれ、しやあ、ざん、ねねなで、もんぐる、ぐはさ、ば、かびとるし。

註　鳩間屋（ハトマヤア）に一と粒種の娘あり世に稀れなる醜女に生れた悲しさに、日々鏡に向ひ、粉黛に凝り、花笠を戴き群集の裡におるも裏むる人なく嘲けらる。

◉あかれよう、じむじむ、おりれよう、じむじむ。

註　上（アカ）れよ螢、下（ジム）れよ螢。

石垣島地方　四月初旬より螢發生し、八重山姫螢艦となり、姫螢中堅となる、八月中旬イワサキ螢、之れが殿となりて十二月上旬冬眠狀態に入るが如し、兒童歌を唱ひつゝ、イワサキ螢を狩り、方言「ホタルキウ」學名「ハスノハキリ」の老熟したる結實の内肉を扶去し提灯と稱へ、螢を集め書を讀み字を習ふ、其光淡青温雅愛すべし。

理學博士松村松年先生の御檢定を得て茲に掲ぐ。

一（ヤヒヤマヒメホタル）Luciola yayeyamansis mats.

二（ヒメホタル）Luciola Iwasakii mats.

三（イワサキホタル）Pyrocoelia Iwasakii mats.

◉どうやあ、の、やまたあ、みしん、ましん、かいとり、ばい。

註　唐屋の山多味噌、塩を窃食せり。（兒童、木葉を口邊にあてゝ、謠ひまわる）

◉おう、やあかん。

遊戯　兒童二人對坐し互に額を打合しとき歌ふ。

◉ねいりから、かいしん、ああるから、おらんだ、やいやま、の、やく〳〵、しばしようれ。

註　西より楷進船（檢地便人の船）東より、オランダ船（ペルー提督の艦隊）が來航せり八重山の御役人心配であろう。

◉うらど、はんど、や、てんからど、みよと、なりで、ふきよい、たぼれる。

註　君と妾とは天から定められた夫婦だもの。

◉ゑむき、おりよ、あかいばじ、ゑむき、おりよ、しゆいばじ。

◉おりて、おりよ、あかいばじ、おりておりよ、しゆいばじ。

註　鷹よ舞ひ下りて赤握飯、白握飯を召し上れよ。「エムキ」とは來年の意）

◉おうふ〳〵、だあが〳〵まひまひ、じうが〳〵なかしめに、の、こつち、あむま。

註　年々歲々寒露季に鷹群（コツチアンマ）をなし、交錯して、沖天に舞ひ北より南に渡る狀を歌ふ。

編述者　曾て奥蝦夷にあるの日鷺鷥世界を一周せんが爲めに餌として身欠鰊、乾烏賊を羽根中に藏蓄して南飛しと云ふ口牌をきゝたり、今石垣島にあり寒露節に北より數千百、群をなして南に渡る、該鳥の高空を、低空を飛行するにより歲の寒温を卜す、鷺は同種なるや否や明かならざるも姑らく附記して識者の高教を待つと云爾。

○

理學博士松村松年先生の御檢定を經たる石垣島產蟬類の學名、和名とを掲ぐ。

一、{Leptopsaltria Iwasakii mats. N. SP.
{イワサキ、ヒメハルセミ

二、{Platypleusa Kaempferi F.
{ニイ ニイ セミ

三、{Cicada apicalis mats.
{ツマグロセミ

四、{Crypto tympana facialis WK.
{リウキウクマセミ

五、{Moganuia hebes WK.
{ヒメクサセミ

六、{Cosmopsaltria Iwasakii mats N. SP.
{イワサキセミ

七、{Pomponia fusca Oliv.
{ダイワン、ヒグラシ

Song;"Happy the Cicadas' live, for theys all have Voicelless Wives."

○

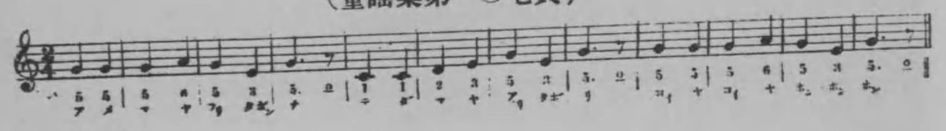
鬪鶏（アらそヒ）

例年穂利祭の日に行はれたり、二十五歳以下の青年數十人東西二組と成り競技す、此日無禮講とて服裝を一にし、顏面を扮し無作法に喚き歌ひ、平地に波瀾を捲き起して戰を挑みたり、優勝したる組には役人酒肴を贈りて祝ひたりとか、遊戯は青年の尙武を鼓舞する一の方法たりきか。

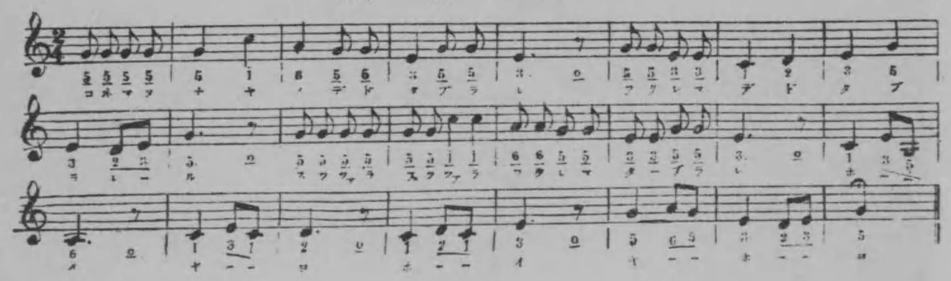
八重山童謠音譜

作曲　宮良長包君

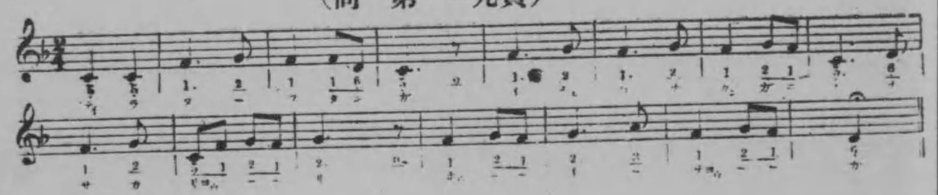
（童謠集第一〇七頁）



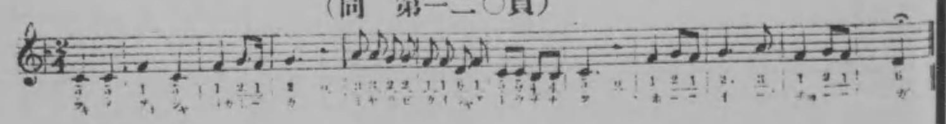
（同　第一〇八頁）



（同　第一一九頁）



（同　第一二〇頁）



八重山民謡集

ひるぎの一葉

喜舍場天與

緒言

糸數原主人岩崎翁は常に新らしき態度新らしき眼を以て翁の周圍の無限に美はしき自然を見んとせり殊に八重山に於ける藝術愛護家の陣笠たるなほこれり今般ひるぎの一葉上梓さるゝに際し左の數篇を呈し祝意を表すと云爾

鷲の鳥節

大あこうの根ざしに
一つの枝ふみのぼり
一ぴらい巣ばかけ
一ぴらい卵産し
一ぴらい卵から
綾羽ば生らしやうり

なりあこうの本ばいに
七の枝ふみ登り
七ぴらい巣ばかけ
七ぴらい卵産し
七ぴらい卵から
天鵝絨羽は生だしやうり

正月のすともて　　元日の朝ばな
東かい飛びつき　　日ばかめ舞ひつき

大榕樹の木の根差になり榕樹の木の下延に、一つの枝をふみ登り、七つの枝をふみ登り、一つの巣を構ひ、七つの巣を構ひ、一つの卵を産み、七つの卵を産み、一つの卵から、七つの卵から、綾羽のやうな鷲の雛を孵へした、天鵝絨のやうな、雛をかへした、正月の曙光に、元旦の朝まだき、東の方に飛んでいつた、旭の方に舞つて行つた。

やくぢやま節

うさいの泊のやくぢやま、作田節ば詠めらる。
うりが隣りの白かちや、うりに合しゆて三味線ばびき詠めうる。
生れる甲斐産でる甲斐がさのなかなが子ば産し見やむな。
うるじんの若夏のなるだら、漁火の事思ひ。
此處よ見りばん彼處よ見ればん、炬の火やあからばたらし走りきいば。

大螯よかな爪よふちゆるばたらしかゝれの苦りしや。
何頼みいか頼まばど我身の隠される。
とんだぶし、ありんだぶし頼まばど我身や隠される。

西表島の古見といふ村のウサイ泊に居るヤクヂヤマ（招潮子？）といふ蟹が大螯を動かして食物を食つて居るのは丁度沖縄で調子の遅い作田節といふ歌を三味線で彈いて居るやうである。其のお隣りにも又白カチヤ（雌？）といふ白い蟹が大爪を上下へ動かして合奏して居るのを見ると實に面白いではないか、彼等は折角生れる位ならガサメの様な強者になつて生ればよかつたのにと歎じて居る、けれども生れ落ちた以上は仕方がない、せめてガサメのやうな強者に子を孕ませて生んで見たい、初夏の交になると吾輩は海人に漁られること計り氣にして居る、此處からも彼處からも漁火がばち〳〵と音を立てゝやつてくると、隠れ場を探さうと周章てゝ居る内に此の大切な大螯を折られるから堪らない此の孱弱い體をマア何によつて安全を計るであらう、マングローブの根やアダンの氣根に隠れるより外に道がないのだ。

此前から乙女色美しやあそのものゝかん嗅び見たんな乙女たかは、なばは、ばさりば、ゑらるの。
此前からびらま着服美しやあそのものゝかん嗅び見たんなびらま、たかは、なばは、ばさりば、ゑらるの。
乙女ぼすぼうのうぼすぼう紺地なの梅の花。
びらまぼすぼうのうぼすぼう芭蕉なの紅露染。
此の間から乙女の色艶やスタイルが目立つて美くしいが何か色氣がついてよい男でも持つて居るだろうかおや〳〵私はそんなことは一寸も知りません、否々そんな事が御恥かしくて言へるものですか。
此の前から二才の服裝が何だかハイカラになつてきたが一体若い女と色氣がついたのだらう?、
おや〳〵私はそんな事は一寸も存じません、否々そんな事が恥かしくて人に言へるものですか。
乙女の腰卷(ぼうぼう)何で仕立てゝあるだらうか一尋位の紺地の木綿布で仕立てゝあるが最初はよかつたが今は色もさめて宛然點々梅の花の絞り見たやうになつて居る。二才の褌(ぼすぼう)は何で仕立てゝあるか芭蕉布で作つてあるが今は垢染みて丁度紅露といふ植物の汁見たやうに點々よごれて見苦しくあります。

舟越節

伊原間よ建だす　舟越よ建だす
誰るの主の建てだね　ぢりの親の建てだね
うんの主の建てだす　めぢんびらまの建てだす
うんの主や頭やなり給ぼんな　めぢんびらまや目差やなり給ぼんな
居りな居る見ればど　立つな立つ行くけど
伊原間ごさにしやる　舟越ごさにしやる

舟越といふ所に伊原間村を建てたのは、誰れの役人が建てたのか何といふ御役人樣が建てたか、當時の役人が建てたのだ、先見の明があつた役人が建てたのだ。村を建てた役人は酷いから頭になつてくれるな、先見の明があつた御役人も同樣に目差といふ職になつてくれるな、いやな伊原間に居續けて見ればひどい舟越に馴れてくれば伊原間は實にエデンの園生だ、舟越は我が第二の樂園地だ、當地の

御役人よ願くば頭になつて下さるやうに、先見の明のあつた貴公よ希くば目差の役になつて下さるやうに。

川平節

世間沙汰しゆる大名家のかんつ何時の夜の露に咲かちすゆが
節よ待ちみしより時よ待ちみしより蕾で居る花の咲かなうちゆみ
節待つんで居るけ時待つんで居るけ人爲めにならば我やちやすが
人爲めんなさの與所爲めんなさの島のある間やかんどやゆる
又も沙汰しゆる後濱家のなべまたんでとうど乙女語られ給ぶり
語られざぎひるからよばれてざきひるから金の屏風おやすて慥かにおやすんど
賺しでんあらの虚言でんあらの新城粹樣も河波連粹樣も知つちよんど
阿波連粹樣もゆのびらま新城粹樣もよの士どうでんやらばん阿波連びらまやましだらど
歌聞きばなべま聲聞けばかんつ山彦の響き餘韻優さる

天道八幡なべま地獄に落てらすかんつ、うらが上によく肝持たでやあらの
歌の出口や新城粹樣どやしか又も出口や阿波連粹樣大名家のかんつ島の夫持つかウフン井戸の水や甘水な
るはづど
甘水ざぎなるから前盛家の阿主がほこらさで思ふか肝の報つくんど
後濱家のなべま組の夫持つかウナヤ井戸の水や詰酒なる筈ど
詰酒ざぎなるから慶田盛家の石戸びら有難さで思ふか胸の報つくんど
たんでとうどなべまがあらとうどかんつ夜の片時や遊ばれ給ぶり
生りる甲斐かんつ產でる甲斐なべま沖縄まで豊まれいけいすつちやいら

氣量の優れて居る女と世間に沙汰されて居つた川平村の大名家(屋號)にかんつといふ女が居つた、何時か好機會があつたらば此の女を手折つて見たいものと二才連は五里餘の山路を通ふて大競爭であつた、今は花の蕾であるから何時か咲く好時節があるだらう其の時節を御待ちなさいよ、時節を待つて居る内に與所になびいたら私の身はどんなになる事でせう、かく迄も命がけての御言葉ならば妾は決

して與所に靡く樣な者ではありません貴方と妾とは僧老洞穴の契りて島のあらん限り此の通りであるから御心配御無用であります。又も川平村の後濱屋(屋號)になべまといふ女が居つた、氣量といひ容姿といひ彼のかんつと相伯仲した大評判者でした。なべま女よ願くば私の妾になつてくれないか、貴女が私の妾になつてくれたならば形見として金の屏風を造つて慥に貴女に上げますからね。貴女に法螺を吹くんでもない虚言を吐くんでもない、此の證據人としては新城樣も私も居るではないか。新城樣も阿波連樣も同じく士族樣でありますが私は阿波連樣の方が何となく希望であります。此の二人の評判女が一度歌を唄ふときは川平南嶽に反響し山彥となり其の餘韻嫋々として聞く人をして引きつける魔力があつた。

彼の八幡大菩薩に妾と貴殿とが心を込めてかくも固く誓つた以上は決して變る事はありません、若しや誓を破るやうなら天道として妾等は地獄といふ苦し目に合ふ事であらう。新城、阿波連の兩粹人の歌の面白い事よ二人共優劣なく上手である。

大名家のかんつといふ切れ者が若しも誓を破つて川平の土百姓の妻になるならば川平の海岸側にあるウフン井戸の鹹水も忽ち甘水に變るであらう、若し此の鹹水が甘水になるものとしたら其の井戸の側に居る茶好きの前盛阿主翁が感謝したらうカンツ女は常に幸福許りでせうね。後濱家のナベマといふ氣量女が本百姓の妻になるならばウナヤ井戸の甘水は忽ち詰酒に變るでせう、若しや飲料水が酒に變ずるものであるならば其の井戸の近傍に住する慶田盛石戸といふ酒豪が有難い酒井戸であると思ひつゝ飲んだら屹度ナベマには善い仕合せがくるであらう。如何に兩親が嚴重であつても私等の此の五里餘の惡道を通ひ來れる心底を察してくれて寸時でも出て來て樂しく語りくれるやうに。ナベマとカンツ女とは如何にも生れ甲斐があつたわい、遠い〳〵沖繩までも呼び者となり譽め者となつて居る事は羨ましい事である。

川良山節

川良山(カレヤマ)の上(ウエ)なが
白雲(シラクモ)で思(オ)むよな
とばらまで思むより

白雲(シラクモ)の立(タ)ちゆらば
乘雲(ノリクモ)で思むよな
かぬしやまで思むより

川良山のねぬらば　　山路のねのらば
川良山や手巾なぎ　　山道や布なぎ
肝のざぎ思ふから　　山道もかぬしやまどやる

四箇から名藏村に行く途中に川良山がある、此の山中の道を川良山道といふ至極惡い谷道である、此の川良山の上に白雲が棚引いたならば白雲や乘り雲であると思つて吳れないやうに御前の可愛い妾と思つて吳れ給へ。私が通ひ路にはかゝる川良山道といふ石塊峽路がなければよいがな!!、ところが思ふて通ふたならば此の川良山の石塊道は手拭や布の長さ位のものだ、思ふ心だに切であつたならば此の谷路も可愛い貴方のやうに思はれて一寸も苦痛は感ぜられません。

仲筋のぬべま節

仲筋のぬべま　　組かどの乙女
一人ある女子　　たのきやある肝の子
新城夫持たし　　うどきや夫持たし

如何の故ぬべま　　何ぐの譯乙女
赤甕の故ど　　白身苧の欲しやんど
水浴みの名付し　　赤甕ゆかめて
●●●●ンブフルに登て　　岡や頂登て
あさごりのゆふごりの　　女子ど待ちゆる
遠ざのけ見らるの　　日涙り見らるの

竹富島の仲筋といふ村にたつた一人の●●●●ぬべまといふ箱入娘が居つた。ところが致方なき事のために此の掌中の珠ともいふべき一人娘を新城といふ六海里も距たつて居る島へいや〳〵ながら嫁してしまつた。如何なる譯何の故にかゝる掌中の珠ともいふべき箱入娘を遠い新城島にやつたのか、これはこうである。新城島特產の赤い素燒の陶器と眞白の上等の苧麻の欲しかつた爲めに詮方なく涙ながらに娘を嫁にやつたのである。娘が嫁いだ後の母親は子を思ふ心に迷ひ焦がれ、人には水を汲み水を浴びる振りを見せながら此の赤甕を頭上に載せて行つて水は浴びないで其の井戸の側にある●●●●ンブフルといふ

小高い岡の頂上に登り朝夕通ふて遠い新城島を目に一杯涙をたゝへながら蕭然として見て居つた。ところが六海里も離れて居る島である上に娘の今の境遇等を考へ涙にむせびしつかりと見ることが出來ず、やむを得ず家に歸つて來た。嗚呼親の焦るゝ思ひは如何許りであつただらう。

戀の花節

戀の花登て濱崎よ見ればマカが布晒し見物でもの
大石に登て前干瀬よ見れば松が章魚捕や面白狂がい
松が捕たる章魚やクヤンタに打ち渡ち居る石と添へて渡たしやるきによう
側に立ちよるヒヤウや悋氣な者やりば鍋と碗添へて打ち破たきによう
大道頂登て北向かて見れば片帆船で見れば眞帆とやゆる
高根久に登て東かい見れば百合や花で見ればマルが袴

新城島の戀の花(地名)といふ小高い岡に登つて濱崎を眺めて見るとマカといふ女か布を晒して居る容姿は實に面白い見物である、昔人頭稅時代御用布晒の狀況を素破抜いてある。大石といふ岩上に立つ

て前の干瀬を見ると松といふ章魚捕りの名人が章魚を捕つて居る態度は實に面白い丸で狂言見たやうである。松といふ名人が只今捕つた章魚はクヤンタといふ女に石の附いて居るまゝ即ち全部生きた儘くれてしまつた。側に隱れて先つきから松とクヤンタといふ情婦とのあやしき舉動を見て居つたヒヤウといふ者は大變な悋氣者であるから直ちに本性のヒステリーを起こして鍋、碗、皿其他の諸道具一切破壞してしまつた失戀の結果である。大道といふ小高い岡に登つて一人の女が蕭然と北方の海上を眺めておつたが遙か沖に一隻の片帆船が見えた。やれ嬉しい我が懷かしい人の海馬捕る片帆船であるわいと心も狂ふ許りに歡んで居つたがしつかり見ると眞帆であつた、嗚呼戀しいあの人は今頃如何に暮してゐるだらうしまつた、待ち焦るゝ女の心は奈何。高根久といふ岡に登つて東方を眺めると眞白い百合の花が瀾熳と咲き亂れておるわいと思つたらこは如何に動いて近く寄つてくるのは舟である。舟の中に乘つておるマルといふ女の腰卷が遠くから見ると丸るで百合の花のやうに見えたかい大に呆れはてたおやおかしいわい。

小濱節

小濱てる島や果報の島やりば大嶽ば後て白濱前なし
大嶽に登ぼて押し下ち見れば稲粟の實り彌勒世果報
稲粟の色や二十歳頃乙女粒清らさあてど御初上げる
小濱てる島や果報の島やりば島と相應めしより我島主の前
小濱てる島や行き見欲しやあしが船の路やりば行きやならぬ
富崎渡のねのらば眞武佐渡のねのらば今日や行き遊て明日や來しが

小濱といふ島は大嶽を後に腰强く据ゑて白い濱を前になして居るから至極仕合せの島である。大嶽に登つて小濱全島を見下して見ると稲粟を始め諸作物の稔つて居る狀況は豊穣である。今年は豊年だ八束穗の稲や粟の色は丁度二十歳前後の乙女の色艶のやうにあつて粒もよく揃ふて上出來であるから初穗として御神樣に捧げるのである。此の島は至極幸福な島であるから小濱在勤の御役人樣は皆島と相應しくあられます。小濱といふ島は毎日行つて見たくあるが海路であるから思ふ樣に行く事が叶はない。富崎といふ灘がなかつたら眞武佐といふ灘がなかつたならば毎日往來して樂しく遊べるがなー。

波照間の島節

波照間の島や男女名豊まれ
下八重山の島や男女名豊まれ
首里の上かに願ようり上の上かに願ようり
下田原水だぎ上田原水だぎ
五日廻り十日廻り隔み給ぶられ
白水ば給ぶられ甘水は給ぶられ
苗代田ばくさやうり
米代田ばくさやうり
米種子ば下らしようり
吉種子ば下らしようり
犬の毛にたらしやうり
猫の毛にたらせうり
大ましばくさようり
中ましばくさようり
大ましば植びようり
中ましば差しようり
うるぢんのなるだら
若夏の立ちよだら
薄株に榮かようり
いばや竹にむとようり
大穗ば生らしようり
中穗ば榮かようり

北風の押しゆらば　　南の畦枕ばし
南風る押しゆらば　　北の畦ば枕ばし

波照間といふ島は人情が男女共に濃厚であるが故に世間からよい島と擧められて居る。御來の出來を御宮に祈るは勿論彼の遠い首里の御神樣に迄も豐年を祈願いたしませう。下田原(地名)や上田原(地名)の田の樣に水も常に滿々として田毎の稻も皆稔つて居る、五日の風十日の雨が降つてくれるからだ。苗代田を掻きならして之れに米種子籾を下ろした所が犬や猫の毛の高低なく並んで油を引いたやうによくも出來て居る。本田や中田を耕やして此の並み揃つた苗を植ゑませう。願くば三四月頃になると薄株のやうによく榮へ强芝の根のやうに白根を充分に張つてくれるやうにそうして八束穗は垂れて水に屆かん許りに出來るやうに。そして北風の時は南の畦に枕をしたやう靡き南風の場合は北の畦に黄金の波を寄せて枕をする位に出來て下さるやうに祈願いたします。

しよんかね節

暇乞ひともて持ちゆる盃や目涙泡盛らち飲みのならん

御宮の前に降りての遺言葉の濱邊に下りての遺言葉の行りて來るけんや夫ゆ持つなんで岩重しよりよ
妾も一所さありおり給ぼり此も一所乘せおり給ぼり
うらん一所さありはらで思ひば公物積む船や船間の無の
屋形上に乘せおり給ぼり艫の上に乘せおり給ぼり
屋形上や手繩の道やりば艫の上や舵間の道やりば乘りやならの
里が懷に入れており給ぼり風呂敷包みに入れており給ぼり
傳馬走り來りば乘らにやならの泣く〳〵と互に別れかていちゆさ
片帆持たしば片目の涙落とし諸帆持たしば兩眼の涙落とし
やでく頂迄や乙女に送られて渡中押し出りば御風ど賴む
いよ〳〵これで御別れを告ぐるかと思へば胸の早鐘は迫り持つて居る盃にも涙が一杯泡を盛らして一口も飲めない。海上平穩を祈願する御宮の前の濱で妾に言ひ遺された戀しき貴方樣の言の葉は永久に忘れはしません。私がもう一度與那國へ來るまでは與所へ嫁ぐやうな事なく元の姿で岩重で私を待つ

て居てくれ給へよ可愛い乙女(ミヤビラ)よ。妾(ワタシ)も里前と一所に四箇へ御連れて下さるやうに御願ひします、花の様に美くしい我が里前よ。左様妾の言ふ通り何處迄も一所に手を取つて連れて行きたいが此の船は國王への上納米を一杯積み込んであるから貴方を乗せる場所が尺寸も明かないから今回は詮方なく思ひ留まつて元の姿で居てくれ給へよ、我が懐(ナツ)かしい妾(ミヤビラ)よ。私を乗せる明間がないと御仰せになるなら艫にある屋形の上にでも宜しいから私一人は是非共に乗せて下さる様命掛けでの御願である。成る程妾の言ふ通り其處は常には明いて居るもの、出帆後は至極肝要な處で手綱を引張る人の通ふ場所になつたり又舵取る船頭などが立つて見る處で誰何人も此處に來る事の出來ない處である、今回は思ひ切つてくれ給へよ私の歸る迄は元氣で待つて居てくれ給へよ可愛い貴方よ。如何に思ひ切れと御仰しやるけれども柔弱な女の心胸の狹い性かどゝしても斷念が出來ません何卒里前よ懐の中にかくも思ふ燃ゆる許りの私を入れていつて頂戴、さもなければ風呂敷包みでも行李の中でもどこでも荷物同様でもよいからして貴方様とならば何處までもどんなつらい目に逢ふても厭ふことなく一所に添ひたい行きたいのである。どうか命がけで御願ひ申し上げます花の様な美くしい里前よ。

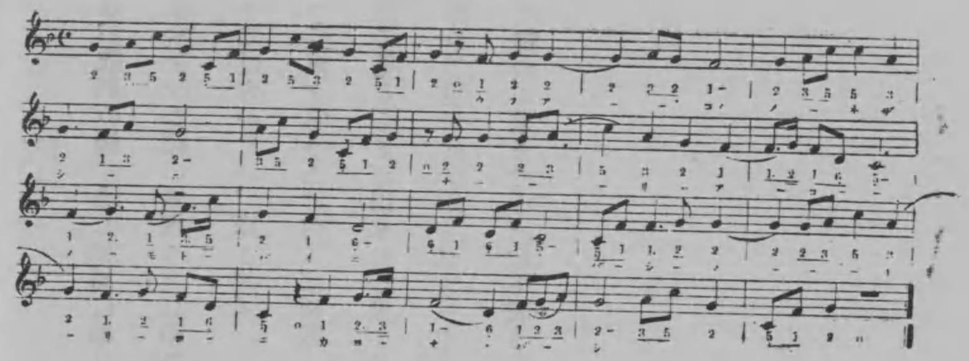
二人が離別の極に達し容易に船に乗らざる態度を船頭は早くに見て小船をやつて兩人が涙にくるゝ所を生木を折る様に無理やりに引き別けて里前一人を小舟に乗せ急ぎ本船へ移したから乙女も今は百策盡きて致方がない、斷念するより外に道がない去らば元氣で無事で歸省されん事を祈る。愈々解纜となつて帆を卷き上げたらば兩眼から流るゝ涙の川、戀しき里前を見ようとするけれども目に一杯の涙が出て見ることが出來ない妾の力でどうともすることが出來ない、もう致方がない港口を出て行く船は隱れて見えないから又も一里餘もある斷崖絶壁の上(ヤデク頂)迄歩きなから見送つて海上平安を祈つて歸つて來ませう。取り殘された淋しき私の身の上明日からは如何に暮すであらう。

(七、一〇、一七)

鷲の鳥節

宮良長包君飜曲

（本調子）

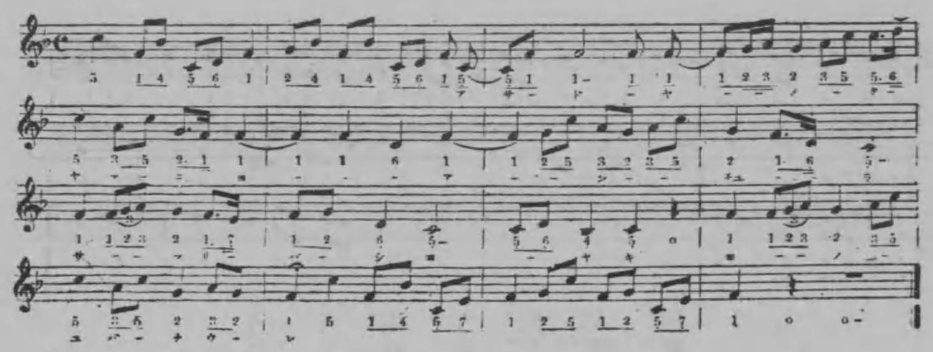


大榕樹の根差に
なり榕樹の本ばいに
一の枝踏み登り
七の枝ふみのぼり
一ぴらい巣ばかけ
七ぴらい巣ばかけ
一ひらい卵産し
七ひらい卵産し
一ひらい卵から
七ひらい卵から
綾羽ば生らしやうり
天鵝絨羽ば生だしようり
正月のすともて
元日の朝ばな
東かい飛びつき
日ばかめ舞ひつき

あさどや節

宮良長包君飜曲

（二揚）

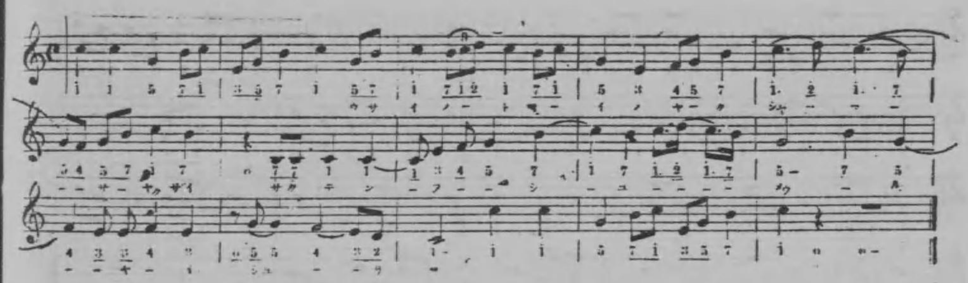


安里屋のくやまに
目差主のくゆたら
目差主や私んば
あん麗ぐさ生りばし
んばでからみしやさみ
あたる親やくりやおいす
んばてすの視る目
べるでからゆくさみ
仲筋に走りおり
べるてすの聞く耳
道廻りし見りばど
組かごに飛びやおり
道廻りのちゆらさすよ
村くりし聞きばど
乙女の逢ゆて
村くりのかいしやす
誰が子で問ふたら
美子の揃りやゆて
兼眞子のいしけま
ちりが子で名問ふたら
兼眞家に走りおり
蒲戸子の乙女
兼眞子や我にひり
蒲戸家に飛びやおり
欲しやでからさりおり
蒲戸子やくりやおいす
餘の喜しやん抱きおり
望みからまきおり
んぶふる道から
ごこの愛さん地やちよんかもさな
玻座眞村さりおり
岡や頂道から
ういか家の浦座に
親村にまきおり
八折屏風の中なが
目差家の座敷に
腕やらいし寝としよる
八折屏風の内なが
男子んくのみどしよる
股やらいし眠んどしよる
男子や島持生りばし
女子ん作りどしよる
女子や家持産りばし

やくちやま節

宮良長包君譜曲

（本調子）

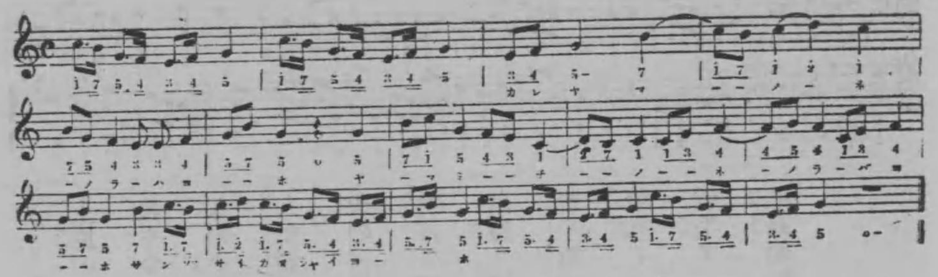


うさいの泊のやくじやま、作田節ば詠めうる
うりが隣の白かちや、うりに合しゆて三味線ばびき詠めうる
生れる甲斐産でる甲斐がさめのなかなが、子ば産し見やむな
うるじんの若夏のなるだら、漁火の事思ひ
此處よ見りばん、彼處よ見りばん、炬の火やあからばたらし走りきいば
大螯よかな瓜よふちゆるばたらし、かかれの苦りしや
何頼みいか頼まばど、我身の隠される
とんだぶしありんたぶし頼まばど我身や隠される

川良山節

宮良長包君譜曲

（本調子）

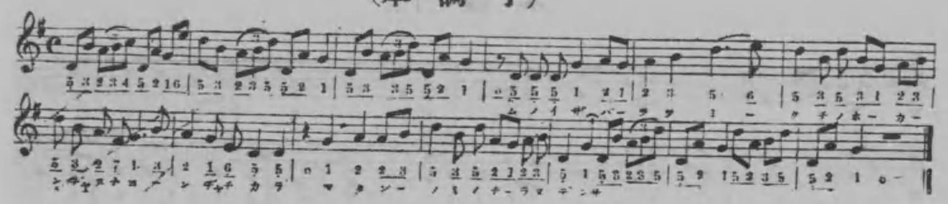


川良山の上なが　白雲の立ちゆらば
白雲で思むよな　乘雲で思むよな
とばらまで思むより　かぬしやまで思むより
川良山の無ぬらば　山路の無ぬらば
川良山や手巾なぎ　山道や布なぎ
肝のさぎ思ふから　山道もかぬしやまどやる

でんさ節

宮良長包君飜曲

（本調子）

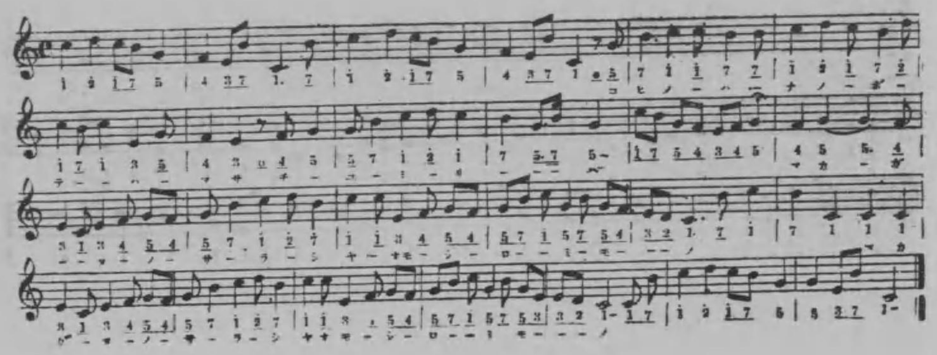


上原のでんさ、昔からのでんさいざ、いざば聞きみしより、世間の戒み
我や金言聞ちやん、歳寄りやのしやることの、童子奈とめて、妻かいの果てねの
人の妻夫婦、夫婦にごかいしやる、歳寄りやと若者とや、うつらんものさみ
人や親まゝご、妻夫や定めうる、我ご儘になよす、犬とゆぬもの
親の言葉聞ちゆし、御主の御聲ゆぬものでん聞かんしご科も罰もかびゆる
物言ざば慎み、口の外出だすなよ、出だしから又も含みのならぬ
島持ちご家持ち、船乗りとゆのものでん、勢頭船子親子、揃はねばならぬ
親や無いん今童、生し子ねん歳寄りやや、ちんだらし者で、思はねばならぬ
朝寝しよる女、朝びきしよる女、うりからご夫や油斷やしみゆる
鬢毛すらしよる女、前髪おらしよる女、うりからご極めて夫や惚らしよる
檣高船の走らばご見、肝高女や家持ちやぬ、舅夫に違かて、灰にとくるびよる

戀の花節

宮良長包君飜曲

（本調子）

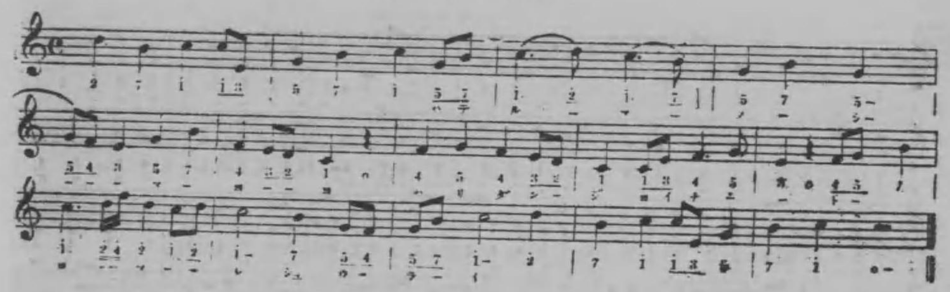


戀の花登て、濱崎よ見れば、マカが布晒し、見物でもの
大石に登つて、前干瀬よ見ればマツが章魚捕や、面白狂言
松が捕たる章魚やクヤンタに打ち渡ち居る石と添へて渡しやる
きによう
側に立ちよるヒヨウや、悟氣な者やりば、鍋と碗添へて、打ち
破たきによう
大道頂登て、北向て見れば、片帆船で見れは、眞帆どやゆる
高根久に登て、東かい見れば、百合や花で見れば、マルが袴

波照間の島節

宮良長包君飜曲

（本調子）

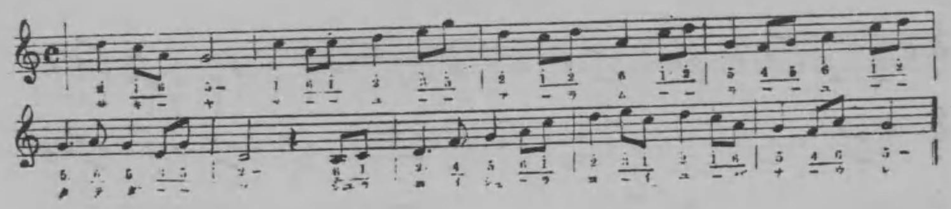


波照間の島や、男女名豐まれ
下八重山の島や、男女名豐まれ
首里の上かに願ようり、上の上かに願ようり
下田原水だぎ、上田原水だぎ
五日廻り十日廻り、隔み給ぶられ
白水ば給ぶられ、甘水ば給ぶられ
苗代田ばくさやうり、米代田ばくさよふり
米種子ば下らしようり、吉種子ば下らしようり
犬の毛にたらしやうり、猫の毛にたらしやうり
大ましばくさようり、中ましばくさようり
大ましば植やうり、中ましば差しようり
うるどんのなるだら、若夏の立ちよだら
薄株に榮がようり、いばや竹にむとようり
大穂ばは生らしようり、中穂ば榮ようり
北風の押しゆらば南の畦　枕ばし
南風の押しゆらば北の畦ば枕ばし

崎山ゆんた

宮良長包君飜曲

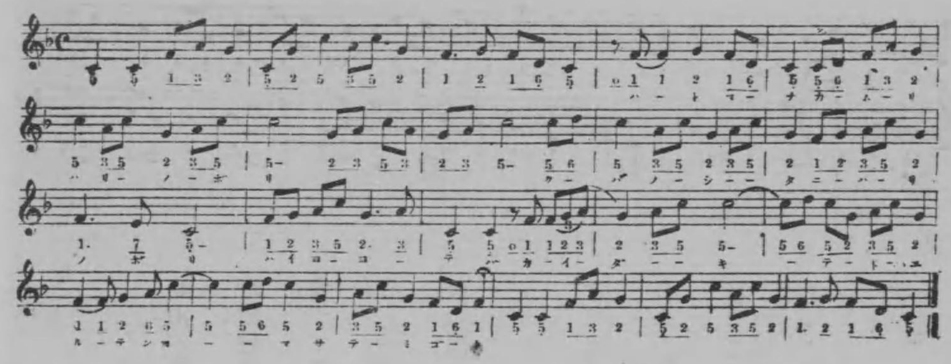
（二揚）



崎山の新村よ建てだす　　與那口崎山口のゆやんど
野濱地金久地のゆやんど　　誰るど分ぎぢりど分ぎで思ふだら
女やぐさみ男やぐさみ別けられ　　許しや主の前肝ちや御主加那志
許しや事肝ちや事我知さの　　公儀の御仰せ御主の言葉どやるす
天の雨や笠被びどばんし　　上の雨や簑着しど防んし
うりやるか是やるか誰もゆむみしや　　あにやる崎山あねる島て思ふだる
立ちば立ち居りは居り嬉しやる　　七月の遊び月の立ちゆだだら
ゆくや頂嶽や上登りて　　生島よ我島よ見やぎりば
見らでしば目涙まり見らるの　　取らてしば遠さのけ取らるな
行らでしば船の路どやるそな　　行かでしば渡の上やりき行かるな

鳩間節　宮良長包君譜曲

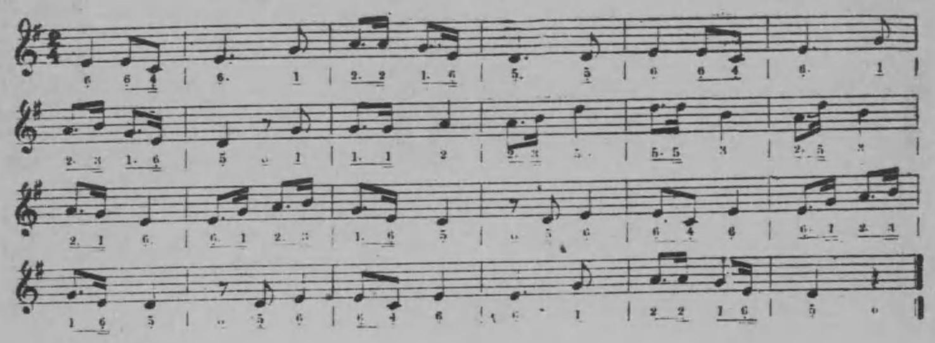
（本調子）



鳩間中岡走り登り、蒲葵の下に走り登り
美しや生いたる岡の蒲葵、立派さ列れたる頂の蒲葵
眞南端見渡せば、濱の見るすや小浦の濱
小浦の濱から通ゆる人や、藏元の前の人心
伊武田福濱下離、舟浦地やかましの地
舟浦人の見るみん、上原人の聞く耳
稲ば作り實らし、粟ば作り實らし
前の渡よ見渡せば、往く舟來る舟面白や
なゆしやる舟のご通ふた、如何しやる舟のごかしやらくか
稲ば積付け面白や、粟ば積付け偖見事

崎枝主　宮良長包君譜曲

（マーチ調
本調子）



雜表

石垣島氣象略表 (其ノ一)

月	平均氣壓	氣温 平均	氣温 最高ノ極數	氣温 最低ノ極數	平均濕度	風 平均速度	風 最大速度	風 方向	風 日年	平均雲量	平均降水量
一月	765.34	18.4	27.8	7.5	78	7.0	26.5	南東	21.(2)	7.9	160.3
二月	764.67	17.7	29.1	6.6	78	6.7	22.9	南南東	13.(45)	8.0	111.2
三月	763.33	19.8	29.4	8.7	81	7.0	24.4	南南西	6.(3)	8.0	119.3
四月	761.16	22.7	32.9	10.0	82	6.3	20.9	北東	26.(45)	7.4	133.6
五月	758.70	24.9	33.7	11.2	83	6.2	24.2	北東	14.(4)	7.2	213.8
六月	756.56	27.3	33.8	17.5	84	7.5	58 9	南東	30.(3)	6.8	208.2
七月	755.80	28.3	34.7	20.9	81	7.9	58.2	南西	31.(36)	5.5	199.7
八月	754.98	28.1	34.8	17.4	82	7.1	63.4	南西	8.(35)	5.8	215.4
九月	757.45	27.1	35.4	17.9	81	6.8	69.4	南南西	6.(3)	5.5	255.1
十月	760.96	24.8	33.0	16.0	78	7.0	53.9	南西	5.(34)	6.4	251.6
十一月	763.45	22.0	30.9	12.3	77	7.8	70.7	北東	3.(30)	7.6	199.0
十二月	765.06	19.3	29.0	7.4	78	7.5	27.2	西北西	28.(1)	7.9	167.7
全年	760.62	23.3	35.4	6.6	80	7.1	70.7	北東	3.(30) XI	7.0	2234.9
春	761.06	22.5	33.7	8.7	82	6.5	24.4	南南西	6.(3) III	7.5	155.6
夏	755.78	27.9	34.8	17.4	82	7.5	63.4	南西	8.(35) VIII	6.0	207.8
秋	760.62	24.6	35.4	12.3	79	7.2	70.7	北東	3.(30) XI	6.5	235.2
冬	765.02	18.5	29.1	6.6	78	7.1	27.2	西北西	28.(1) XII	7.9	146.3

備考　氣壓は粍にして海面及び重力の更正を施さず．氣温は攝氏度．濕度は空氣中に水蒸氣飽和し最濕潤したるものを百と定め算出す．風速は一秒時米．風向は十六方位．雲量は十分率．降水量は粍．即ち降水量の一粍とは平地に溜るとき水嵩の三厘三毛となるべきを謂ふ．之より一坪に對する水量を略算せんには一升八合三勺二を乘すれば可なり(以下之に準ず)